シャルロット・コルデーに聖杯を貢ぎたい……お淑やかな服の下でははちきれんばかりになってる才能を丸出しにしたい……そう思ったとき、既に行動は完了していた(理性蒸発)

夢見る夢人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あなたに『愛』はありますか？

目次

第一幕　夢見るままの日常
ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）一話　彼は幸せな夢を見る ―― 1
ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）二話　騒がしい日々、いつもの日々 ―― 22
ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）三話　吸って、吐いて、息を ―― 56
ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）四話　恒例行事：学生時代の妄想 ―― 86
ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）五話　恒例行事：主人公による事態の収束 ―― 116
ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）六話　後日譚 ―― 155
ロクでなし魔術講師と被害妄想（パラノイア）四話　恒例行事 ―― 198
第二幕　木漏れ日に揺蕩うように優しく
ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）七話　浮足立つ ―― 236

第一幕　夢見るままの日常

ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）　一話

彼は幸せな夢を見る

なぁ、と呼びかける。

「僕が何言いたいか、分かる？」

「さぁ？」

小首を傾げる彼女（サーヴァント）に、僕は笑みを引き攣らせながらこう言った。

「なんで君が同級生として入学するのかって話だよッ！」

「マスターと一緒に居たいからに決まってるじゃないですかッ！」

「逆切れっ!?」

何を当然のことを、とでも言いたげな彼女は自信満々にそう言った。本心から、僕と学園生活を送ろうとしているのだろう。

嬉しくないといえば、嘘になる。仮にも推しだ。半ば意地であったとはいえ、絆は１５まで上げたし、レベルも１２０まで育てた。六周年記念で実装されたメダルを集める

ために何度もガチャを回したのはいい思い出だ。
そんな彼女がお話をしてくれたり、手を握れたりとかできるようになる……二次元は二次元のままであるべきだという持論も、限定的に撤回せざるを得なかったのは事実だ。
だが、だがな？
仮にも今世の保護者ポジションの君が同級生……？
母親と並んで通学とかどんな苦行だよッ！
「いやですねぇ。私はまだ独身ですよ？」
「でも僕育てたのは君だよね」
「はい！　赤ちゃんのマスターは大変可愛らしかったですよ！」
「……うん」
むず痒さを隠すように顔を背け、けれど抵抗は止めず反論を続ける。
「兎に角！　同級生とか恥ずかしいだろ……！」
本音だ。お願いだから、せめて教員枠で学校に所属してくれないだろうか。
「マスターの命令でも、それには従えません」
だって楽しみにしてたんですからっ、マスターとの学生生活。
きっと小悪魔な笑みを浮かべているだろう彼女の顔を、僕は直視できなかった。

幼少期の恥を握られていた時点で、口論における僕の勝ち目など無かった。あるとすれば、恥を捨てるくらいだろうか。

結果、こうなった。

「ふふー、んふふー」

「……」

上機嫌な彼女に、ブスッと膨れる僕。目に毒な女学生服は企画モノのＡＶ臭を漂わせている。それを着ているのが今世の育て主であるから、たとえ彼女が従者（サーヴァント）であろうと気まずくなって目を逸らす。

こんな学生生活は心底嫌だったが、心のどこかで楽しんでいるのは間違いもない。なんだかんだ言っても、相手は推しだ。

だから、不承々々、膨れた顔で並んで歩くのだ。

「今日もいい天気ですねー」

「……そうだね」

「ふふふー」

「はぁ」

引っ付いてくる彼女の僕への好感度は、前世で意地を張る様に連れ回した経緯からだろうか。

「じゃ、今日も一日頑張りましょうか。マスター」

「ああ。今日も一日、頑張ろうか――」

――シャルロット。

シャルロット＝コルデー。

暗殺の天使。クラスはアサシン、レアリティは星1。

前世の推しで、今世では何故か転生特典として一生を共にすることと相成った、僕の相棒（パートナー）だ。

＊＊＊

空高く人が舞う。着地点が噴水でも、下手すれば死にそうな勢いで。

彼女（シャルロット）はちらりとそれを流し見ると、興味を無くしたように目線を前に戻した。

「なぁ、あれってまさか」

「グレンくんですね。それがどうしましたか」

「確かセラさんは助けられたんじゃなかった？」

心の折れてない主人公が非常勤講師として雇われるなんてことがあるのだろうか。
「……人の心が折れるきっかけは、意外と沢山あるもの。らしいですよ?」
むぐ、と口を噤んだ。
それは何時かの昔に自分がシャルロットに語って見せた言葉だからだ。自分の言葉だから、その意味もよく理解した。
「筋書きって、変わらないもんなのかな」
「どうでしょう。変わったものもあります。変わらなかったものもあります」
「そっか」
「そうです」
少し、湿っぽい。
「あー、もういいや。止めだ、止め。こんなこと気にしててもしょうがない」
シリアスな空気を換気するように手を振り回す。
「ところでさ、今日の授業多分自習になるんだけど、何する?」
「そうですねー。大人しく勉強したらどうです?」
「ははっ」
「勉強しましょう?　マスター」
「……はーい」

カラッと晴れた空は、胸が透くほど青い空が広がっている。虚像のような半透明の城が綿雲に紛れて空に浮かぶ。背後の騒がしさすら吸い込むような快晴に、僕は思わず微笑んだ。

「雨降らねぇかなぁ」

「そういえばマスター、熱いの嫌いでしたね」

日差しが鬱陶しいぜ。

教室に着き、辺りを見渡す。人の姿は少なく、それを見て、随分早く来てしまったようだと気付く。

「んふふー。二人っきりですねー、マスター♪」

「なるほどこれが目的かー」

シャルロットの抱きつきを回避しつつ、自身の指定席に腰を落とす。机にノートを広げ、勉強する姿勢を見せることでシャルロットの追撃を阻止した。尚、何処からか聞こえてきた舌打ちは幻聴であると願いたい。

適当に掴んだそれは、白魔術についての物。錬金術には自信があるが、一方で白魔術には自信がない。というか、錬金術以外が殆どボロボロな自分には、錬金術以外の科目は苦行でしかない。いや、実技なら得意なんだけどね？

例えるならあれだ。英語の授業だ。全く単語を覚えられなかった自分にとっては、あれは軽い拷問の時間だった。

言い訳をさせて貰えば、理論は分かるのだ。

ルーン文字が分からないだけで。

……テストにおいては致命的だ。

「あ、分からない所があったら教えましょうか？」

「じゃあ、此処について教えてくれ。白魔【ライフ・アップ】について何だが、此処のルーンの意味がどう繋がってるのかいまいち分かんなくてな」

「えーっと、これはですねー」

肩を寄せられると、当然体同士の距離が狭まるわけで。二の腕に感じる柔らかいものの温かさと、頬にかかるさらりとした髪のくすぐったさ。ほう、と吐かれた甘いため息に身を捩りながら、ノートに視線を落とし続ける。少しだけシャルロットと距離を開けながら、彼女の説明に耳を傾けた。

小首を傾げる彼女の姿は視界に入らず、距離を詰めてこなかったことに軽く胸を撫で下ろしながら二人きりの自習が続いた。だが、その時間も僅かなもので、十数分もしない内に教室内にはまた何人か生徒が増えることとなる。

階段状に並ぶ席が埋まる度に、教室内の喧騒は賑やかになっていく。暫くすると自習

する所もなくなったために、シャルロットのからかいを躱す口実が尽きることになった。

さて、次は教科書で予習でもしようか。そんなことを考えると、それを先読みされたように手元から鞄が消えていた。シャルロットが引き寄せたのだ。その顔はとてもいい笑顔で、何処か嫌な予感がする。具体的には、舌打ちの嵐が飛び交いそうな予感だ。

思わず真顔になって距離を離すが、荷物ごと近寄ってくるシャルロットのせいで間は広がらない。

そのまま後ろに退いていると、距離を見誤ったのか、席と席の合間の通路を歩む誰かに背をぶつけてしまった。トン、という軽い衝撃から、相手は女子であると判断する。

僕は咄嗟に振り返って、謝った。

「あ、ごめん――っと」

「ううん。大丈夫だよ。アダムくん」

「ルミアさんか。おはよう」

ぶつかった相手は、クラスの人気者と断言できる陽だまりのような少女。ルミア＝ティンジェルだった。

尚、僕が彼女を名前で呼んでいるのはファーストネーム呼びが比較的緩い価値観だからであり、決して僕と彼女が親しい間柄だからではない。むしろクラスメイトなのに名

前呼びにすると、何処かよそよそしいと敬遠されるまである。
本当に僕が彼女と友人だとかそういう親しい間柄だったら、と思わなかったことはない。だが、そこまで踏み込めるような度胸が僕には無い以上、それは唯の夢想で終わるだろう。
「あー、ルミアちゃん、システィちゃん、おはようございます！　今日も早いですね！」
「おはよう、シャル」
「……って、おはよう、シャル。そうそう、シャルも聞いてよ。今朝の事なんだけどね？　私たちが登校してたら――」
シャルロットは同性且つ、双方ともに社交性のある人物なので、割といい関係を築いているようだった。親友と言ってもいいかもしれない。
一旦席を立ち、シャルロットとルミアさんの間から体を抜き、シャルロットが座った席に座る。ついでに自分のカバンを抱きかかえて。
システィーナさんがくどくど述べているのは、きっと今朝がた横目に見たあの事件の事だろう。記憶が正しければ、あれは原作開始の一幕だったはずだ。記憶が正しければ。
正直原作を乱しまくっている自信があるから、記憶の中のシナリオ通りに物事が進んでいくか分からない。けどまぁ、そこは歴史の修正力だとかを信じよう。この世界は

『特異点理論』が主流になるくらいには平行世界の分岐が難しいみたいだし。

……ん？　あれ？　そういやそれってまさか……。

いや、深く考えないようにしよう。

頬杖をついて、システィーナさんとその話をいい笑顔で聞くシャルロットを眺める。ふと視線が合い、ルミアさんに微笑みかけられた時はあたふたして、咄嗟にそっけなく頭を下げた。きっと頬は朱に染まっていたことだろう。僕だって男なのだ。

頬の熱も冷めてくると、まだ始業の時間でないというのに教室の扉が開いた。主に教員が使う、黒板側の扉だ。

慌てて姿勢を正すが、入ってきたのは僕らの担任であるヒューイ先生では無く、しかしこの学院に通っているなら知らないものは居ないであろう有名人物――セリカ＝アルフォネア教授だった。

神殺しとまで謳われ、彼女だけの為に特別に作られた階級まで持つ、正に『生ける伝説』な人物の突然の登場にどよめきが巻き起こる。その騒々しさは台風の如く、伝播は津波の様に。うるさく感じるほどの動揺が教室を満たした。

パン、パン。

柏手（かしわで）二つ。

単に手を打っただけのその動作は、行ったものの地位の重さに由縁してか、いっそ神

聖さすら伴って心に染み入る。精神干渉の魔術でも使われたかのようにどよめきが鎮まるが、魔術の痕跡は欠片たりとも残留していなかった。

凄い。これが、セリカ＝アルフォネアか。

度肝を抜かれたとはまさにこのことで、その息を呑むほどの立ち振る舞いに教室中の視線が引き寄せられる。カリスマとはこういう物なのだろう。そう考えながら、僕らは彼女の言葉を待った。

「今日はこのクラスに、ヒューイ先生の後任を務める非常勤講師がやってくる」

短い一言。その言葉ではっと思いだした者もいるくらい、ヒューイ先生の失踪は突然の事だった。

明確な理由の判明しない退職。一説には通り魔に刺されたとさえ噂されるそれは、このクラスに大きな禍根を残した。主に授業の遅れという形で。

だが、何と中止となっていた授業が本日めでたく再開となるらしい。これには喜びを抑えきれず、教室中が一気に騒がしくなる。

「先生先生、その非常勤講師ってどんな人なんですか？」

「女の人ですか？　美人ですか!?」

「かっこいいですか？　彼女いますかぁ!?」

それらの怒号染みた質問に、アルフォネア教授はふっと微笑み、ただ一言。

「まぁ、中々優秀な奴さ」
と、そう告げて去った。
なんかもう、質問に応えるのがめんどくさくなったように見えたのは僕だけだろう。現に、他のクラスメイトは教授のスタイリッシュな退場と言葉に興奮している最中だからだ。
とりあえず、今日もまともな授業が行われないと知っている僕は鞄から教科書を取り出し、それを流し呼んだ。
この世界、ラノベとかないのだ。教科書読むレベルの暇潰ししか無いんだよ。

＊＊＊

「あー、悪い悪い、遅れたわー」
始業数十分経って地雷を踏み抜きに現れたのが、今朝空を舞ってずぶぬれになった男――グレン＝レーダスだ。
この短い時間の間に着替えることはしなかったのか、まだぐちょぐちょの服で教壇の前に立つ。システィーナは噛み付く勢いでキレ始め、対するグレン先生は欠伸交じりにそれを受け流す。これを大人の余裕と取るか、ダメ人間の風格とみるかでその者の鑑定

眼は決まるだろう。
「って言うか貴方、なんでこんな派手に遅刻してるの!?　あの状況からどうやったら遅刻できるっていうの?」
「そんなの……遅刻だと思って切羽詰まってた矢先、時間にはまだ余裕があることが分かってホッとして、ちょっと公園で休んでたら本格的な居眠りになったからに決まってるだろう?」
「想像以上に駄目な理由だった!?」
公園で寝てたのか……あの服で……。
普通は風邪を引きそうなものだけれど、まぁ、『馬鹿は風邪を引かない』って言うし。
頭をぼりぼり掻きながらチョークを手に取り、黒板に文字を走らせる。
彼は黒板の中央に自身の名前を綴って、生徒たちのざわめきを無視しながら自己紹介を始めた。まるで聞いてほしいと思っていない態度に、彼の名前すら頭に入らなかった生徒は居る筈だ。
「えー、グレン＝レーダスです。本日から約一か月間、生徒諸君の勉学の手伝いをさせていただく予定です。短い間ですが、これから頑張っていきま……」
「挨拶は良いから、早く授業始めてくれませんか?」
「それもそうだな」

面倒になったのか、まるで人物把握に役立たない冗長な自己紹介が切り上げられ、システィーナの要望道理に授業が始まる。

ぶつぶつと手元を見下ろしているが、恐らく時間割を確認しているのだろう。前列に居るせいとなら聞こえているだろうが、比較的上の段――後ろに居る僕らの耳には届かない。

自身の名前を消し、チョークを持ち直すと、グレン先生は黒板の中央に筆先を置いた。

「「……」」

教室中の視線が集まる静寂の中、彼はでかでかと、こう書いた。

〝自習〟

「は？　……え、は？　じゅ、じしゅう？　え？　……？」

へぇ。人間、突然の事態でフリーズするとああなるみたいだ。酸欠の金魚みたいに口をパクパクさせ、何を考えているのか『自習』の意味を読み解こうとしている。『自習』には自習以外の意味などあるまいに。

「えー本日の一限目の授業は自習にしまーす」

知ってた。

周囲は理解が追いついていないとばかりに騒めいている。もうこれだけ時間が過ぎているのだから、授業に入るだけ無駄なのだとでも考えたのか、という憶測が耳に入る

折、本人から答えが告げられる。

「……眠いから」

そのまま教卓に突っ伏すと、彼は実に気持ちよさそうに寝始めた。寝息は聞こえないが、きっともう寝ついてるだろう。授業時間の残りを考えれば、これは二限目の実施も怪しい。

予想通りだ、という意味の欠伸をかみ殺して僕は机に顔を伏せる。さて、僕も寝るか。

「マ　ス　タ　ー　？」

「冗談冗談。だからその声止めて。どうやって出してんのかも気に成るけど兎に角止めて」

「はい。じゃあ『魔術基礎詠唱Ⅱ』の本日やる予定の範囲に目を通しましょうか」

さっきは予習邪魔してたくせに、と呟くと、彼女はそれを聞きつけ、ん？　と小首を傾げた。良い笑顔で。

細かいことは気にしてはいけないらしい。僕はきっと、結婚したとするなら尻に敷かれるタイプなのだろう。

なんでもないです、と言って僕らは自習を始めた。前の方で起こる騒動を気にも留めずに。

だってグレン先生もそう簡単に死なないだろうし、幾ら教科書が分厚くっても広辞苑

ほどじゃないし、止めてる人もいるし、問題はないでしょ。
「マスター、マスター。ここの文なんですけど……」
「ああ、此処は……」
舌打ちが聞こえた気がした。
＊＊＊
昼休み。尚、錬金術の授業で女子更衣室に迷い込みかけていたグレン先生は、僕がシャルロットを送るついでに正しい道に導いておいた。
おかげでグレン先生は傷一つなく授業を始められたわけだが。そのお陰か、授業の内容もそこそこ面白い――小学生が喜びそうな感じの、ふざけた実験――ものになった。案の定、ギイブルとシスティーナさんは切れた。
閑話休題（それはともかくとして）。
昼ご飯の為に僕らは学食へ向かっている。学食が安上がりだというのもあるが、社交性の少ない僕にわざわざ話しかけてくる友人たちに合わせた結果でもある。それに学食の料理には割とレパートリーがあるので楽しいのだ。
シャルロットのご飯も嫌いじゃないし、自炊もできなくないが、それはそれとして外食の喜びはまた別物なのだ。
特に原作にもある様にこの時期のキルア豆は……っと、もう着いた。

「あ、ギイブル」
「アダムか。お前は真面目に自習してたようだな」
「まぁ、ね」
「マスターの管理(おせわ)は私がしますっ」
「……ふむ」
「まて。毎度のことだがシャルロットが僕の事を『マスター』と呼ぶたびに距離を取ろうとするな。おい」
「冗談だ」
「本当か？」
　すたすたと歩き去っていく童顔の眼鏡……ギイブル＝ウィズダンの背を追って、列に並ぶ。歩いている間にメニューの内容を考え、手早く注文して手早く横にズレる。直ぐに注文された食品がトレーに乗せられて出てくるので、それを取るといつもの席に向かった。
　食堂の隅、日当たりが良いというわけでもなく、入口から見て柱の陰にあるのであまり人気のない一角。そこには三人の先客が居た。
「おっ、来たか」
　そう言ったのはカッシュ。カッシュ＝ウィンガーだ。お調子者で元気よく、クラスに

一人はいるだろう『男子の』人気者。『男子の』と強調したのは他でもなく、彼は余り女子にモテていないのだ。

思春期の衝動に振り切れんばかりにしたがっているからだということは理解されていて、元気のいい男の子を見る目で見られてはいる。だが、恋愛対象というくくりからしてみれば遠慮させていただきたいような印象らしい。この前シャルロットから聞いた。

『男の子』として見られて、『男』として見られていない、ということだという。

当事者（ギイブル）はそれを聞いて項垂れていた。ちょっと笑った。

「こっち空いてるよ、アダム君」

そう言って二人分の席が空いている側を示すのが、セシル＝クレイトンだ。女顔で小柄で、ともすれば女子に見間違いかねない少年で、このように気の利く人物だ。

此処等は柱の陰になっているせいで、席の空きが良く分からない。場合によっては周囲から椅子を貰ってくる必要も出てくる。だが、見ると既にセシルが席取りをしていてくれたようで、その心配は必要なかった。

「ありがとう、セシル」

「ありがとうございます。セシルくん」

「う、うん。……えへへ」

礼を言って、席に着く。内側から詰めて、僕がセシルの隣の席に座ることとなった。
多分あの反応からしてシャルロットの事が好きなんだろうから、隣同士にさせてあげたい気持ちもあったが……本人は気にしてないようだし、これでもいいかと考えた。
「じゃ、いただきます」
「いただきまーす」
手を合わせて食べ始めた。家の中ではほとんどしないが、僕の格好つけ気質から来るものだろうか、外ではいつもこうやって手を合わせる。気持ちも何も籠ってない言葉だが、こんなことをしているというところが、『しっかりと礼儀ができててカッコイイ』ように思えるのだ。
食事が始まると、最近の学食事情とか、昔の学院事情とか、誰それが玉砕しただの、あれこれが破損しただの、この科目の要点はああで、あの論文の疑問点はこうで、なんて関連性も纏まりもない話題がポンポン飛び交う。
それはカッシュが話題を提供し、セシルが話を膨らませ、僕らがヤジを飛ばし、ギイブルがそれに針を突き刺し、そしてまた新しい話題を放り込む会話だ。何の意味も生産性もないだろうこの駄弁りの中で、一番人気があって長く続いたのはグレン先生に対する愚痴だった。
「――にしても、あの講師すげぇよなぁ。俺、あんなに目の腐ってるやつ見てことねぇ

ぞ」

「全くだ。仮にもアルザーノ帝国が誇る魔術学院の講師なのだから、自覚をもって業務に取り組んで欲しいものだな。なんだあの体たらくは。アレならまだそこらの餓鬼を連れてきた方が幾分かましだろう。授業を行わないどころか学習意欲を削る。腐ったミカンではないか。屑という評価すら相応しくない。そもそも――」

「お、おおう……」

ギイブルが珍しく意見に賛同し、その流れる様な話しぶりにカッシュが聊か引いた。

そもそも、この話題が長く続いたのは話を冗長にさせないギイブルの毒舌あってのもので、彼の矛先もグレン先生の批判に向いたものだから中々この話は終わらなかったのだ。

驚きも冷めた後は二人してギイブルの希少な長文に聞き入る。悪口というものは癖になる。珍味の様に時折口が欲しくなるのだ。それの矛先が無関係な第三者であるならば猶更。無関係の人物に向けたものであろうと嫌悪するものは居るが、そんなムカつきでさえ美酒のえぐみとしてスパイスになり得る。

それを打ち切ったのは、珍しくシャルロットであった。

「はい、そこまでですよ。もうすぐお昼休みが終わっちゃいますから、此処までです」

「――汚泥というもので、そもそも死んだ……おっと、そうだな。早く残りを食べきらな

いと、授業に間に合わなくなるか。あの教師が担当するなら欠席したところで聊かの痛痒も感じないが、やはりそうはいくまい」

よろしい、とばかりにシャルロットは頷く。滅多に話を逸らしたり、打ち切ったりしない実直な性格の彼女だが、こういう時にはちゃんと自己主張する。もう少し遅ければセシル辺りが口を挿んだだろうが、本人は肝が小さいので話を打ち切ることがあまり得意じゃない。自分が口を挿まずに終えられたことにそっと胸を撫で下ろしているのを横目に、僕はギイブルを揶揄った。珍しく、彼が食事を食べ終えるのが遅かったから。

それも当然のことだが、後日同じようにグレン先生の授業に不満を述べながら、しかし今日ほど長続きしなかったのはこれが原因だろう。男子というのは、食事の早さとか、ペン回しの上手さとか、そんなどうでも良いことにムキになるような生き物なのだ。

事が動くのは数日後、左手の手袋を胸に投げつけ、システィーナさんがグレン先生に決闘を申し込んでからだ。

ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）　二話
騒がしい日々、いつもの日々

リン＝ティティスという少女は実に生真面目で、馬鹿真面目で、呆れるほど真面目で――兎に角、自分にできることを努力して行うことのできる少女だ。内向的な性格で損をするところはあるが、その実、彼女はクラス内でも一、二を争うほど心が強いのではと考えている。個人的な意見だ。

そんな性格であるから「嫌われる」ということがとんと無く、友人は少なくとも敵は一人もいない、シャルロットやルミアさんとはまた別のベクトルの人付き合いの良さがある人物だ。

自分にできることをする。そんなことができない奴がこの世に溢れていることを、僕は良く知っていた。僕自身が、出来るのにやらず、夏休み最終日に宿題を纏めて片付ける人間だからだ。

ここ数日心折れずにグレン先生へ質問していく姿を見ていると、つくづく彼女は凄い人物だと実感する。頬杖を突きながら彼女の後姿を見ていると、横からじとっとした視線を感じた。目を向けなくともわかる。シャルロットの視線だ。

その粘つく様な視線に絡め捕られて横を向けば、シャルロットは良い笑顔で羽ペンを構えていた。そのまま突き刺してきても服の上からだと魔術処理のされた制服で防御されるので意味がない。だが、首筋や頬など、肌の露出したところは普通にダメージが通る。つまり痛い。

えい、えいとばかりに無言でぷすぷすと突き刺してくるのを注意する人は無く、僕は自力でそれを防がなければならなかった。手首をつかんで抑え込もうにも、シャルロットは英霊（サーヴァント）だ。人如きの膂力で抗えるはずもない。

「あ」

「どうしました？」

何が、とは言わないが、身を乗り出した際にシャルロットのソレがムニュリと形を変えた。いや、何がとは言わないがクラスでも一、二を争うあれがそれで大変なことになって顔が熱い！

「……っ、ふふふ」

僕の視線が向く先を察して、赤面の理由を理解したのだろう。だがシャルロットは前屈を止めず、むしろその胸を机に押し付けるようにこちらに向け、更に近寄ってきた。鼻腔を擽る花のような香りは、紛れもなく彼女本人の香りだと断定できてしまう。

その妖艶（いたずらっ子）な笑みを見て、完全に揶揄われていると感じた。人を揶揄う娯楽は何にも

代えがたい愉悦を齎す。僕自身がその味の虜なので、その気持ちは理解できた。共感できてしまった。

だが、その頬が仄かに赤いのを隠しきれてはいない。やはり彼女も恥ずかしいのだろう。それを理解したからこそ、僕は反撃に打って出る。

ハムッとするように口を寄せ、耳に息を吹きかけた。彼女の――シャルロットの耳に。

「～っ」

びくんっ、その身を跳ねさせると、身を捩りながらこっちを見上げた。ほんのりと朱に染まった頬の赤が、潤んだ目尻を彩る。それを見て、僕はニヤニヤした。

授業中であるがゆえに声は出せないが、此処が家の中であるならこれは取っ組み合いに発展していただろう。シャルロットの気分次第では、『天使さん（良く分からないナマモノ）』まで出張ってきたかもしれない。だが、此処は学院の中、それも授業中の教室で、僕らは学生だ。更には『天使さん（母体の知れないナニカ）』は一応、シャルロットの前の職場での切り札であったので、そうそう衆目に晒せない。

かといって僕も魔力貯金（ほうせき）や、その他自作の魔術道具を扱うわけにいかないので、自然と争いは小突き合いに収まる。

二人とも自習する集中力が切れていた。

肘で小突き合い、指で脇腹を突き合う。時折羽ペンの飛び交うそれが、席が後ろで無駄に静かな攻防だったもので、止める人がそれに気付くこともない。放っておいたら授業が終わるまで続きそうなそれは、ぶち切れたシスティーナ（システィーナさん）さんの手によって強制中断される。いや、声によって、か。

「――いい加減にしてくださいっ！」

机を叩き、立ち上がる。おっと何事だ、という視線が集まる。システィーナさんに。

揺れる銀髪を尾っぽの様に、今日も今日とて彼女はグレン先生のいい加減な授業態度に抗議した。

もはやクラスの誰もが期待していないというのに、此処まで来ると一種の執着だ。心なしか、クラスメイトの半分は彼女をうざったそうに見ている気がした。

実際、僕はそろそろうざったく感じてきた。最初の一度は勇断だ、二度目三度目は決意だと褒められる。だが、四度目五度目からは嫌気がさして、六度目を超えるとしつこくなる。

別に、だぁれも真面目な授業なぞ求めてはいないのだ。強いて言えば、普通に居れば、事無ければいいのだ。

だからこそ、度を越えた反芻はうざったい。そうだろう？　見ていれば分かるはずだ。

「む？　だから、お望み通りいい加減にやってるだろ」

良い加減と、好い加減。辞書的な意味なら、どちらも正しいことにはなる。所詮、当てる漢字が違うだけで、発音は同じなのだから。

だが、詭弁だ。みんな分かってる。グレン先生がまともに受け答えするつもりが無いことも、みんな。

だから諦めているのだ。

誰も、好き好んで腐ったリンゴに絡みたくないから。

腐ったリンゴとつるんで腐りたくないという、向上心くらいはあるのだから。

そんな中、まだグレン先生に噛み付くシスティーナさんの根性は確かに立派だった。

うざったいのは確かだけれども。僕がうざったいと繰り返すのと同じように。

なんでだろうか。

僕はどうやら彼女が嫌いなようだ。物語を見ている間は好きに思っていたし、転生してから言葉を交わした時にも嫌いだとは思わなかったけど。

なんだか嫌いだ。まるで――。

軽い破裂音と共に、それが叩き付けられた。

グレン先生の胸に投げつけられたのは立派な素材でできた、白い皮の手袋。前世でよく見た薄っぺらい、機能性重視のそれじゃなく、伝統と象徴性の籠った貴族的な量産品

だ。

魔術師は血を崇拝する。そうとはいかない者も血を神聖視し、特別視している。魔力は、血の巡りと深く関係しているからだ。

だから血の集まる心臓を重要視するし、特別扱いする。心臓に近い左手の方が、円滑な魔術行使適している。なんて理由もある。だからこそ、左手の手袋というのは『魔術師の決闘』を申し込むに相応しい象徴性があるのだ。

所詮は、黴の生えた古びた伝統だが。でも人は真新しい薬より、親に教わった民間療法をありがたがるものなのだ。

システィーナが左手の手袋を投げつけたことによって騒めくのは、受けた教養の深さを示す。貴族の風習にとんと縁のない暮らしをしていれば、その意味に気付けないからだ。

だけれどこんなお高い学費の学院に通わせるほどの家柄で、その伝統を知らないものなんてほとんどいない。

それは決闘を受けたグレン先生への意外さも合わさり、これは最近の緩み切った空気に対するいい刺激となった。

＊＊＊

場所は移り変わって、中庭。これから荒らされることになる芝生は、管理人の不断の手入れによって短く刈り揃えられている。昼寝の良いスポットで在り、弁当派の憩いの場であるのが此処だ。

その面積を利用して野外訓練などもよく行われるのだが、それが必要になる時期は本来もう少し先で。だから、どちらが勝ってもどちらもが弁当派からの怒りを買うことになるだろうなぁ、と考えたりする。

普段学食を使う彼彼女には分からないだろうし、僕も正確には分からないことだけれども。

「どうした？　かかってこないのか」

余裕ぶっているグレン先生を見て、システィーナさんは震えていた。オーラとか殺気とか威圧とか、そういうのが全部錯覚だってわかる良い見本だ。

「……くっ！」

決闘のルールは、黒魔【ショック・ボルト】の打ち合い。西洋劇なんかの早打ち勝負をイメージしてもらえれば、それでいい。実際、【ショック・ボルト】は学生が教わる中でも最速の呪文で、それでいて素質によって速度の大差が出にくいほど突き詰められた術式なのだから。

引き金を引いてから、弾が相手の胸に着弾するまで。その速度が同じならば、後はホルスターから銃を引き抜く段階の動作の滑らかさや速さが物を言う。

考えてみよう。転がる枯草（タンブルウィード）の転がる砂地。遮るものは何もない歩幅十歩分の距離。向き合う両者は、どちらも腰に自前の銃を下げている。

片一方は専門家。もう片方は努力する天才。専門家の方は不敵に笑いながら、『先手はどうぞ』とばかりにホルスターに手を添えることすらしない。身構える天才の迫力ある威圧も、まるでないものかの様に、そよ風に吹かれるように笑んでいる。

まるで天才（システィーナさん）が道化で、専門家（グレン先生）が遥か格上であるかのような印象を与えることだろう。差し詰め、ビリー・ザ・キッドに挑む年若いガンマンか。

敗色濃厚だと観客の目には映っている。そのあまりの堂々とした立ち振る舞いに、まさか専門家が早打ち（一節詠唱）すらできないだなんて考えるものは居ない。

最初っから勝負が成り立っていない。

事情を知る者も、知らない者も、皆そう思うような対決（カード）であった。

「――つまり、奴は魔術戦（ごーうと）専門の魔術師ってことだ」

『……ッ！』

『……っ！』

くいっと眼鏡を上げてそう言ったギイブルを見て、笑いを堪えること。これが僕と

シャルロットにとっての今日最大の難関だったに違いない。二人揃って腹を抱えてしまった。

尚、他のクラスメイト……セシルとかは、ギイブルの自説を聞いて息を呑んでいたけど。

大多数が固唾を呑むこと数分。

緊迫の中、とうとうシスティーナが動いた。

「《雷精の紫電よ》――ッ」

直線機動の蛇のように、空気中を雷速で駆け抜ける一条の閃光が放たれる。自然界のそれとは異なって相手を弾き飛ばせるだけのエネルギーまでをも得た紫電は減速することなく、電位の狭間を行く。

直視より認識するまでの僅かな刹那で、その穂先は着弾寸前まで距離を詰める。軌跡を残して弾ける僅かな静電気からは、その威力の高さと、収束の精度が伺える。当たればただでは済まないだろう。

果たして先手を取ったのはシスティーナだった。開始前にグレンが煽ったように、胸を借りるつもりで放った一撃。カウンターを叩きこまれるかもしれない重圧（プレッシャー）と、意図の見えない不安。それらに耐えて放つ一撃の覚悟のほどは、余人には伺い知れない。

「……ふっ」

着弾寸前。そう、殆どグレン先生の胸に突き刺さる間際の事。システィーナの精神は過度の緊張により負荷がかかって、疑似的な走馬燈――或いはゾーンと呼ばれる状態に突入していた。

息もできない、秒針が時針に変わった様な停滞の一瞬で、システィーナは確かに笑みを見た。こちらを嘲笑うような、全てを馬鹿にするような。

――何か、見落としている？

その思いに焦りを抱き、冷や汗を掻くよりも早く二と四の予測結果が脳内を駆け巡る。この状況からの逆転の目は、有り得ないまでに速い【ショック・ボルト】での相殺か、あるいは躱すことのみ。それらを可能にする仮説は、次の瞬間で合計二つにまで絞られる。

乗せられたのだとすれば、反撃が来るはずだ。いや、きっと来る。そう確信して、システィーナは足に力を込めた。

何とかこの後に来るであろう反撃を回避するために。

そして。

「ぎゃぁぁあああーーーっ!!」

呆気なく、抵抗なく、反撃なく。

何もせずにグレン先生は敗北した。

『……は？』

このクラスの中の良さが証明された瞬間だった。

ぷすぷすと焦げ臭い匂いを漂わせて血に臥せるグレン先生を、誰もが呆けた顔で見据えている。自身の目を疑う様に瞬きまでして。

先程の例えに乗っ取ると、如何にも歴戦のガンナーと言った感じの先生がどこかの三下よろしく瞬殺されたのだ。『タイタニック』を見ていたかと思えば、突然Ｚ級のサメ映画に切り替わった様なものだ。

そりゃ呆けるだろう。

この後、グレン先生は更に不意打ち気味に『実は三本勝負……三本先取……五本先取なんだっ！』なんて御託をのたまってシスティーナに挑みかかった。当然、決闘の結果はお察しの通り、グレン先生の惨敗だ。

多分四十七本目の【ショック・ボルト】を受け、とうとうグレン先生は負けを認めた。自己申告によると、新しい世界の扉を開きかけていたらしい。熱の冷めたシスティーナもドン引きしていた。

「そもそもさっきから三節詠唱ばっかり……もしかしてグレン先生、【ショック・ボルト】

の一節詠唱、出来ないんですか？」
「な、なんのことかさぁーっぱり？　そもそも詠唱省略する一節詠唱なんて邪道だなーぁってボク思うわけですよねっ。先人が練り上げた美しい呪文に対する冒涜っていうか！　あ、別にできないからそう言ってるわけじゃないからっ！」
「できないんだ……」
グレン先生が学生でもできる【ショック・ボルト】の一節詠唱ができないと知り、周りの視線がとんでもないものを見る視線に変わった。相手が教師である分、クラスメイト以上にその視線は厳しい。汚物を見る目というより、哀れなものを見る目だ。
「と、兎に角決闘は私の勝ちです！　だから私の要求通り、明日からは真面目に授業を」
「は？　何のことでしたっけ？」
「……え？」
惚けている。だが、いい加減システィーナさんも慣れてきたことか、決闘の賭けをすっぽかそうとしている目論見には気付いているだろう。
だが、「まさか――」と開こうとするより先に、グレン先生のすっとぼけの方が早かった。
「俺たち、何か約束してましたっけー？　いやー、覚えてないなぁー。誰かさんのせいでいいーっぱい電撃に打たれ続けた訳だしい？」

システィーナさんに話させなかったために、更に彼女が怒り出して面倒な事態に発展する事態を防いだ……のだろうか。予想だが、あのままシスティーナさんが口を開いていたらいつもの様な口論に発展していただろう。

「先生……まさか魔術師同士で交わした約束を反故にするっていうんですかっ？　貴方、それでも魔術師の端くれですかッ!?」

「だって俺、魔術師じゃねーし」

まるで予想してたかのような切り返しだ。全く考えた様子もなかったことから、きっとそれが本音なのだと理解できる。冷静な一部な生徒は、それが単なる煽りではないようだと気付けているようだった。

その理由までは分からずとも、吐き出すようなセリフに『踏み入ってはいけない事情』というものの臭いを嗅ぎつけた者の顔をしている。セシルやルミアさん、あとはテレサ＝レイディなどがそうだ。

だがそんな鑑定眼を持つ者は多くない。一クラスに三人もいるなら多い方だ。大多数の生徒はシスティーナさんと同じように、グレン先生への怒り……というより蔑みを募らせている。この期に及んで言い訳をするのか、と。

確証もないわけだから、セシルらが庇う動きを見せることは無い。そもそも庇う理由自体が無い。

クラス全体からのヘイトを高めつつあるグレン先生は、その空気を読まず――いや、読んでこそだろうか――更なる発言に発展させた。
「魔術師じゃねー奴に魔術師同士のルール持ってこられてもなー。ボク、困っちゃう」
きゃぴっ☆　とでも言いだしそうな声音に、神経を逆なでされた生徒は少なくない。
実際、僕も軽くイラっと来たから。
「貴方、一体何を言ってるの……っ」
グレン先生のような人物相手の経験値が皆無だからか、まだ諦めずに食い掛っている。溜息を吐きたくなるぐらい、馬鹿だ。
「はぁ……」
「あれ、マスター。どうしました？」
「ああいや、何でもない」
というか、実際に吐いていた。
「兎に角今日のところは超ギリギリ紙一重で引き分けということで勘弁してやる。だが、次は無いぞ。更ばだっ。ふはははははは――っ！　あいて」
ダメージが残った体で走ったものだから、当然のように何度も躓いて。転ぶ。
そしてそのまま何処かへ逃げ帰ったグレン先生は次の授業まで帰ってくることは無く、更には他の授業と同じように大遅刻をかます始末。此処まで来ると、もはや態と嫌

われに行こうとしているのが見え見えで呆れてくる。そこまで首になりたいのかと、誰もが溜息を吐いた。

もはやただいるだけで不快な気分になる空気の中、終業の鐘は鳴る。

＊＊＊

三日後。いつも通りといえばいつも通りで、可笑しいといえば可笑しい授業を終えて本日最後の授業の時間。やはり、まるでやる気の感じられない、子守歌よりなお間延びした口調での教科書朗読だった。

溜息の音が聞こえるというのも、最近では珍しいことではない。諦めたのだろう。昼の事もあり、システィーナさんですらもう何も言わなくなった教室は、とても静かであった。

何故かそれが妙にさみしく感じるのは気のせいだろう。ぼーっと黒板を眺めていると、ふいに手が上がる。

リンが上げた手だ。

一瞬、猫のしっぽが揺れたようにも感じた頼りなさげな挙手に、グレン先生は気付かない。いや、気付いたうえで無視しているのか。

重ねてリンが口を開けば、流石のグレン先生も教科書から顔を上げたが。

「あ、あの、先生。今の説明に対し質問があるんですけど……」

リン＝ティティスは生真面目で馬鹿真面目な少女だ。其れこそ、講師が如何に怠慢であろうとも、授業に真剣に取り込めるくらいに。

そんなリンを嫌うシスティーナさん――いや、もう『さん』付けするような相手じゃない。システィーナで十分か――ではなく、だからこそこの質問にはシスティーナも手元から目を離した。

「あー、なんだ。言ってみ？」

「え、えっと、その、先生が今触れた呪文の訳が、良く分からなくて」

ため息が聞こえる。学生ではなく、グレン先生のため息だ。心底めんどくさそうでありながらも、それでも教壇の上の辞書を掴んだのは、職務怠慢による罰でも恐れているからだろう。

それをどうするのかというと、代わりに調べるという優しさがグレン先生にあるわけもなく、そのままリンに差し出して自分で調べるように突き放した。

「……え？」

予想はしてた。二度目のため息は、システィーナのものだ。

気づけばグレン先生が一言話す度に空気は重くなる。このどんよりとした空気を吹

き飛ばすために窓を開けたくなるが、自分らの席は窓際ではない。
「三級までのルーン語が音階順で並んでるぞ。因みに音階順ってのは――」
「――無駄よ、リン」
説明が遮られたものの、これ以上口を開く必要が無くなったからか、グレン先生の顔に不満そうな気配は見受けられない。いつも通り、死んでどろどろに腐った魚のような目と、つまらなさげに見える無表情が浮かんでる。
これでは、表情も読めないか。強いて言えば決闘の時ぐらいだろうか、生き生きとしていたのは。
「その男に何を聞いたって無駄だわ」
システィーナはそう言って、席を立つ。
「あ、システィ」
近くに寄った彼女に対して、リンは所在無さげにおろおろし始める。此処で助勢やらなんやらの為に僕も席を立てば、リンのうろたえは加速するだろう。ちょっと見て見たい気もする。
「その男は魔術の崇高さを何一つとして理解していないわ。むしろ、馬鹿にしてる」
そんな男に教えて貰えることなんてない。そう言ったシスティーナは、汚物を見るような目でグレンを見ていた。その横顔を見て、何処かグレンの様な『腐り（あきらめ）』を感じたの

も、きっと気のせいだ。

「で、でも……」

リンの口にした逆接は、システィーナへの些細な反論に繋がるのだろう。それを聴いて、僕は彼女が未だにグレン先生を教師として扱っているということを実感した。

意地を張っているようには見えない、滾々と、純粋な熱意に満ち溢れた瞳を見て、僕はそれを美しいと感じた。

三度目のため息は、僕の口から漏れた。見事なものだと、誰に語るつもりもない感心を乗せて。

「大丈夫よ、私が教えてあげるから。一緒に頑張りましょう?」

リンがより困ると良いとか、そんなことは考えていないが。どうしてか僕は、そのシスティーナの救いの手が余計なものに思えてきた。妥協の産物、諦めの結果。今の彼女の声を聴くと、そんな単語ばかり浮かんでくる。

「あんな男は放っておいて、いつか一緒に偉大なる魔術の深奥に至りましょう」

まるで宗教勧誘だ、と呟く。シャルロット以外には聞こえなかっただろうその呟きは、当然ながら自分にはばっちりと聞こえていて。そんなことを言った自分に驚くと同時に、システィーナから目を逸らした。

「魔術って……そんなに偉大で崇高なもんかね」

ふいに耳に飛び込んだその声は、一日だけ放置したガラス窓のような心を軽く撫でた。それは珍しく、教科書の朗読や質問以外で口を開いたグレン先生の声だ。
気怠さの残るその口調は、質問というより疑問のようで、答えを聞いているというよりも求めているようで。
「ふん、何を言うかと思えば」
それに律義に返すシスティーナ。
「偉大で崇高なものに決まってるでしょう？　もっとも、貴方のような人間には理解できないでしょうけど」
「何が偉大で、何処が崇高なんだ？」
妙に食い下がるグレン先生の言葉を聞いて、ぼんやりと『こんな場面もあったっけ』と思いを馳せる。何分、ずいぶん昔の事だもので、大筋以外はうろ覚えなのだ。
一巻はだいぶ読み込んだので、割と覚えてはいるが。
「え？」
即答のできないシスティーナに、グレン先生は畳みかけるように問いかけた。
「魔術ってのは何処が偉大で何が崇高なんだ？　それを聞いてる」
「そ、それは……」
「ほら、知ってるなら教えてくれ」

頼むから、と続いたように聞こえたのは間違いもなく空耳だ。
生徒に質問する教師。立場は逆であるが、不思議と非難できないような空気が馬にはできていた。
システィーナの掲げる意見。それに対する問いかけは、図らずとも討論の様相を見せている。
だから、引くことができない。優等生であるがために、クラスの雰囲気に聡いシスティーナは、知らんふりして逃げ出せない。
それに何より、その主張はシスティーナにとって何よりも大事な宝だから。彼女の根幹だから。
「魔術は、この世界の真理を追究する学問よ」
「ほう」
演説するように明朗な声で、流れるように言った答え(返し)。それに具体性がないことには、気付いているだろうか。
「この世界の起源、この世界の構造、この世界を支配する法則。魔術はそれらを解き明かし、自分と世界が何のために存在するのかという永遠の疑問に答えを出し、そして、人がより高次元な存在に至るための手段なの。それはいわば神に近づく行為。
だからこそ、魔術は偉大で崇高なものなのよ」

自信満々にそう言い切ったシスティーナは、だが予想だにしない切り返しを受けた。
切り返し事態を、予想していなかったように。
「何の役に立つんだ？　それ」
「え？」
「いや、だから。世界の秘密を解き明かしたところで、それが一体どう役立つっていうんだ？」
「そ、それは言ったでしょ！　より高次元な存在に近づくために……」
「より高次元な存在ってなんだよ。神様か？」
「……それは」
旗色が悪い。
それもそうだ、自分に酔っているような理論で切り崩れる様な、説得できるような相手ではないだろう。システィーナとしては十数年抱えた主義だろうが、グレン先生からすれば過去の遺物だ。更に言うならば、語り方もなっていない。『永遠の～』だの、『いわば』だの、まるで劇でもしてるかのような過大な語り口。
鳥肌が立つ。唾を吐きたくなるくらいだ。
自分にしては珍しい。この気持ちは何だろう、と少し考えてみて、まさか、と仮説を立てた。これはまさか――

「そもそも、魔術って人にどんな恩恵を齎すんだ？
例えば医術は病から人を救う。冶金技術は人に鉄を齎した。農耕技術が無けりゃ人は飢えて死んでただろうし、建築術のお陰で人は快適に暮らせてる。
『術』と名付けられた者は大体人の役に立ってるが、じゃあ、『魔術』は何の役に立ってんだ？　魔術だけは何の役に立ってないのは、俺の気のせいか？」
――なのだろうか。いや、きっと違う……そうだとしても、僕には関係ない。
呆けていた間に、話は進んでいたようだ。青ざめた顔でシスティーナは首を振り、弱々しく反論している。
「……人の役に立つとか、立たないとか、そんな低い次元の話じゃなくて……。人と世界の本当の意味を探し求める学問、よ」
「でも、何の役にも立たないなら実際、ただの趣味だろ？　苦にならない徒労、他者に還元できない自己満足。魔術ってのは要するに、単なる娯楽の一種ってわけだ。
違うか？」
歯噛みしているのだろう。後列で、しかも俯き気味なシスティーナの顔を伺うことはできないが、想像はできた。
反論がないまま、少しだけ長い空白の時間が過ぎる。
「悪かった、嘘だよ」

グレン先生の口調に皮肉の味が混ざるのを聞いた。
毒の様に染み込んだ、粘り気のある皮肉だ。
「魔術は立派に人の役に立ってるさ」
「……え？」
顔を上げたシスティーナは、続く言葉に打ちのめされた。
「あぁ、魔術は凄ぇ役に立つさ……人殺しにな」
その時、何故かシスティーナを向いているはずのグレン先生の瞳が、僕には見えた気がした。泥の様に重苦しくて、昏くて、息苦しい、煮凝りの様な瞳を。
「実際、魔術ほど人殺しに優れた術は他にはないんだぜ？　剣術が人を一人殺している間に、魔術なら数十人も殺せる。戦術で統率された一個師団を、魔術師の一個小隊は戦術ごと焼き尽くす。ほら、立派に役立ってるだろう？」
「っ、ふざけないでっ！　魔術はそんなんじゃない。魔術は――」
毒だ。悪意ある毒だ。システィーナへの毒で、更に自身への毒で、そして、魔術を学ぶ学生にとって、何よりもの毒だ。
「――お前、この国の現状見ろよ。魔導大国なんて呼ばれちゃあいるが、他国から見てそりゃあ、どういう意味だ？　帝国宮廷魔導士団なんて物騒な連中に、毎年莫大な国家予算がつぎ込まれているのはなんでだ？」

「そ、それは」

「お前が大好きな決闘にルールができたのは何のためだ？

お前らが手習う汎用の初等呪文の多くが攻性系の魔術だった意味はなんだ？

大体――魔術が素晴らしいもんだっていうなら、なんで街中で使っただけで犯罪になる？　医療魔術も、それこそお遊びの様な初等呪文でも、だ」

言葉が切れ、だがまだ終わってない。

「お前らの大好きな魔術が、二百年前の『魔導大戦』、四十年前の『奉神戦争』で一体何をやらかした？　近年、この帝国で外道魔術師が魔術を使って起こす凶悪犯罪の年間件数とその悍ましい内容を知ってるか？」

帝国の暗部ともいえる、外道魔術師の犯罪。それは帝国国民ならば誰もが知り、そして『なんと恐ろしい』と囁き合う脅威だ。

倫理なく行われ、尊厳なく殺され、そして躊躇なく繰り返される狂人たちの犯罪。湿った洞窟に繁殖する黴の様に、狩れども狩れども尽きることのない彼らは、実に日常的な非日常（きょうふ）だ。

「ほら見ろ。今も昔も人殺しと魔術は切っても切れない腐れ縁だ。何故かって？　他でもない魔術が、人を殺すことで進化と発展してきたロクでもない技術だからだっ！」

聞きたくない。

何も言うつもりはないし、この光景を言い表す気もない。ただ無性に、顔を伏せて眠りたくなって、だからその衝動に従った。耳を覆うように腕枕して、まだグレン先生の声は聞こえた。

「全く、俺はお前らの気が知れねーよ。この、人殺し以外何の役にも立たねー術をせこせこ勉強するなんてな。こんな下らんことに人生費やすくらいなら、もっと他に――」

ぱぁん、と軽い破裂音がした。

それすらもどうでもよく良いという風に、僕は目を固く瞑る。

脳裏に響くのは、グレン先生の『人殺し』という言葉。それと、シャルロットの――

「わっ、どうしたんですかっ？」

脳がふらりと揺れ、眠気が吹き飛ぶ。何が起きたのか、と額に手を当てると、ずきりと痛んだ。

「何でもない。……何でもない」

そう、何でもない。何でもないのだ。ただ、そう。

何故僕は今更、此処までグレン先生の言葉に揺れているのだろう。

まるで初めて現実を知った周りの奴らみたいに、ショックを受けているのだろうか。

小説で散々見返した台詞に、なんでこうも動揺してんだろうか。

……どうでもいい、どうでもいい。関係ないことだ。どうでもいいことだ。

寝よう。
起きた時には、きっと忘れてる。

でも、シャルロットが帰宅間際に『あ、私ちょっと寄ってきますので、先帰っててください』というときになってもまだ、僕の思考は上の空を漂っていた。
僕はこの世界を現実だと認めたはずだ。
僕はこの世界で『生きている』はずだ。
僕は、この世界で正しく生きているはずだ。
ああ、でも。
――僕は、どう生きるのが正しいのだろうか。

＊＊＊

色褪せるような夕日の中で、熟れた杏色に染まる学院の屋上。
黄昏れるグレンの背中に、学生指定の靴を履いた女生徒が歩み寄る。
「久しぶりですね、グレンくん」
「……シャルロットか」

振り返ることもせずにその声の主が識別できたのは、その足音に聞き覚えがあったからだ。あの日、殉職した■■と同様に、彼女は社交性に溢れていたから――。

「っ。退職したって聞いてたけど、本当だったんだな」

前置き代わりに気に成っていたことを聴く、というふりをして自分の心を誤魔化す為にそんな質問をする。振り返りながらのセリフで、そのわずかに歪んだ顔が見えたのだろう、シャルロットは何も言わずに答えた。

「ええ」

「なんでなのか、聞いても？」

「マスターと、学生生活を送りたくて」

「……」

絶句、といった表情のグレン。いや、学生服を着ているところからそうなのかもしれないとはちょこっと思っていたが、本当にそうだったのか。どうやって学院への入学が許可されたのだとか、そもそもアンタそういう歳じゃねえだろとかいろい――

破片が弾ける。先程までグレンが背を預けていた屋上の手すりの心臓の辺りに、一本の包丁が突き刺さっていた。

「グレンくん？」

「サー！　何でもありません、サーッ！」

震え上がる背筋と本能のまま、敬礼をする。昔覚え込まされた上下関係は、骨の髄にまで染み込んでいた。

ふと、グレンは自身が『特務分室』に入ったばかりの頃を思い出す。そういえばこの人、あの時からこんな見た目だった気が……。

「グ、レ、ン、くん？」

思考を中断する。この人、軍を止めてからますます勘が鋭くなってないだろうか。

「と、ところでその、あ、あれだ！　その、前々から気に成ってたんだが、シャルロット……さん、の保護者（マスター）ってどんな人なんだ？　学院の講師か？」

「いいえ、同級生ですよ。というか、グレンくんの授業を一緒に受けてます」

「えっ」

俺の受け持ちの生徒？

いや、いやいや、いやいやいやいや。

そんな筈はない。身に沁み込んだ恐怖がある限り、幾ら人ごみに紛れ込んでいてもこの人の判別は可能なはず、とグレンは思って動揺する。

思っている以上にグレンが鈍っていることが原因で、そこに行き付くまでに三筋の冷や汗を流す。流石に手に職をつけようとは思わないが、体を鍛え直すぐらいはした方が良いかもしれない、とそう思った。

家に着くころには消え失せているだろう決意だが。

「そっ、そうですかぁ……へへ」

まずい、と呟く。グレンが知るシャルロットは、身体強化の魔術を遣わすとも《剛毅》の名に相応しい怪力を持つ女戦士である。公明正大で、純粋無垢。軍にはふさわしくない明るさと、これ以上ないほど似つかわしい覚悟を兼ね備えた、少しだけ異質な普通の『少女』だ。

だが、その根本が普通の『少女（しょーじょっ！）』である以上、昼間のあの騒動に対して怒りを覚えない筈がない。普段が穏やかな分、起こったら苛烈な彼女の怒りを何度も身に受けたグレンは震え上がる。

「ああ、システィーナちゃんへのあれは確かに言いすぎだとは思います。でも、それで別に怒ってるとか、そういうわけじゃないから安心していいですよ」

「ご、ごめんなさっ……え、そうなんすか？」

とりあえず頭を下げようとしたグレンは、先んじたシャルロットのセリフに疑問符を浮かべた。

「ええ。ちゃんと謝るつもりもあるようですし、ね」

その言葉に、ばつの悪そうな顔で目を逸らした。夕日が目に眩しく、地上を見下ろしながら話題を強引にすり替える。

尚、謝るつもりなかった場合はどうなのかと思ったが、ニコニコとした笑顔を見ているとそれを聴く気が消え失せる。何故再び包丁を引き抜いているのか、ちょっとグレンわからなーい。

「それよりも、シャルロットのマスターっていったいどんな奴なんだ？　学生ってことは、俺よりも年下じゃねーか」

その時点で、保護者って立ち位置でもないだろう。雇い主ならともかく、『特務分室』に所属していた時もその言葉を使っていたところを見るに、単なる雇い主というわけでもなさそうだ。

なら、シャルロットはどこぞの貴族のメイドだったりするのだろうか。それも、その貴族に対して特別な忠誠心でも抱える様な。

ああ、でも。

「あれ、餓鬼が作れるようなもんじゃないだろ……っすよね」

「ふふん。マスターは凄い人ですからっ」

たわわの胸を張り、シャルロットは肯定する。

『特務分室』時代にシャルロットが『マスターからです』と言って渡してきた数々の魔術道具――『魔術礼装』、と呼ばれていたはずだ――は、到底単なる職人の作品とは言えない代物だった。

其れこそかつての上司がシャルロットに命じてでもその身柄を欲しがったように、質が高く、それ以上に異質な魔術道具だった。その件で王城の一角が暫く使い物にならなくなったこともあり、グレンの脳には『マスター』とやらの技術者としての腕の高さがありありと刻まれている。

何せ、セリカですら再現は難しいといった代物だ。できなくはないというが、あのセリカにそこまで言わしめるだけでも大層な人物。

それが、単なる学生のやったことだと？

「はー、天才っているもんだねぇ……」

「まぁ、私のマスターですからねー」

昔から『マスター』自慢の激しかった彼女だが、その理由も理解できる。この歳であんなものが作れるのならば、いっそ異常ともいえる才能の持ち主だ。だからこそ、グレンはますますその『マスター』とやらの正体が気に成った。

「でも、だからと言って大人だということでもないんですよ。幾ら前世があったところで、心は体に引っ張られる……」

「ん？　何か言ったか？」

「いえ。生まれてから何年たっていようと、精神年齢は肉体年齢と＝なんですよ。つまりっ、うら若い心の私はまだまだ少女っ！」

「……ははっ」
「何ですか、もー」
グレンはその言葉を、自身の実年齢を誤魔化すものだと捉えた。
軽く流した後に、好奇心にあかせた質問をする。
「なぁ、『マスター』ってどんな奴なんだ？　うちのクラスの奴なんだろ、その口ぶりだと」
シャルロットへの恐怖は完全に消え失せていた。
『特務分室』時代でも（主に上司のストーカーやら諜報を警戒して）欠片も個人情報を明かさなかったために、グレンの脳内では『マスター』が、『ダンディーな男職人』や『胸のおっきい凄腕女技師』だとか、人物像が迷走していたのだ。
好奇心は強い方であるグレンだ。気に成らないか、と聞かれれば、気に成るに決まってんだろっ、と即答する。その勢いで。
「んー。まぁ、どうせ明日になればバレますし、良いですかね。ほら、グレンくんはクラス名簿見たことあります？　『アダム＝リュクス』っていうんですけど」
「『アダム＝リュクス』ねぇ……。記憶にねぇなぁ」
「地味ですからね、マスター」
「おう、随分辛辣だな」

あと。
「ついでに聞きたいんだが、なんで　シャルロットは『マスター』の事をマスターって呼ぶんだ？」
「それが、私たちの関係だからですよ」
あっさりと、シャルロットは言う。
「そんな、まるで主従みたいな」
「主従ですよ」
あんぐりと開いたグレンの口に、シャルロットは頬を膨らませた。
あからさまに、『こんな女が誰かに従順になるのか』という驚きを秘めていた。
いや、大人しいといえば大人しい性格で、仮にセリカ辺りが聞けば『それもあり得るか』と頷いたのだろう。だが、生憎とグレンの中では『例の事件』を除いても『あのやらかし』や『このやりすぎ』とかが思い浮かんで、どうにも否定せざるを得なくなる。
ふーむ、と唸った後、素直な感想を口にした。
「……奇特な奴もいたもんだな」
「殴りますよ」
「大層素晴らしい方なんでしょうね」
その声音に本気の色が混じっているのを聞きつけ、即座に『マスター』を褒める。

笑んでいる。だというのに、夕日に照らされてできた影が、妙に恐ろしく感じた。

この後、音もなく背後に近寄ったセリカを交えた三人で久闊を叙する中、学院の塀の外では恋に胸を躍らせる少女が偶然見かけた不審な素振りを見せるクラスメイトに絡んでいた。

三人の預かり知らぬことである。

ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）　三話
吸って、吐いて、息を――

それは街が熟れた杏で塗りたくられるように染まり上がった、日暮れ、夕暮れ時のことだ。

「あれ？　アダム君じゃないかな？」

「……ん。ああ、ルミアさん。どうしたの？　こんな時間まで」

「ちょっと居残りしてて……アダム君は？」

「僕は……」

口籠った理由は、自分の中で理由を探していたからだ。

でも訳もなく呆然としていたのに、理由なんて見つかるわけがない。

だから、考えられる原因を正直に答えた。

「ぼーっとしてたら、いつの間にかこんな時間になってたんだ」

「あはは、アダム君ってちょっと抜けたところがあるよね」

「自覚はしてる」

口にしてしっくりときた感覚を覚える。そう、『ぼーっと』してただけなのだ。僕は。

人の名前を忘れたり、提出物を忘れたり、筆箱を忘れたり、登校日を忘れたり。そんなことまで前世から引き継いだかのように、今世でもよく物忘れをする。

そんな、何処か『抜けた』様な、『現実味の抜けている』ような感覚は何時までも残っているみたいだ。

だから嘘ではない。

それから、何を話していただろうか。クラスで噂の美少女と話して舞い上がったのか、それともルミアさんの話しが巧みなのか、内容をよく覚えていない。

笑いあった後に幾らか言葉を交わし、他愛ない雑談をした後、まるでそれが本題であるかのように切り出した話が、次に鮮明に覚えているそれだ。

「それでさ、アダムくん。少し聞きたいことがあるんだけど。ああ、でもその前に」

質問、と聞いて身構えなかったと言えば嘘になる。前世での面接では一番嫌いな時間だったからだ。決められたことをしゃべる自己アピールの方がまだましだった。

けれど、大抵の言葉への返答パターンは脳裏にある。ボッチの性だ。伊達にボッチしてない。

話しかけられる機会など殆どないのに、その時シミュレーションを幾千と積み上げ、それを対人経験値と誤解する。それがボッチだ。それが僕だ。

でも。

ルミアさんのその言葉は、聞こえているはずなのに耳に響かなかった。
何て言うか、防音壁越しに映画を見ているかのような感じで。
――アダムくん、今日顔色悪いよ。グレン先生の話を聞いて気分悪くなったの？
「……」
やっぱ、凄いなぁと僕は思った。
まるでライトノベルの主人公のようだ、って。
人の内心をズバズバと言い当てられる人たちの感覚が僕には分からないために、彼女の心を読んだかのような言葉はとても度肝を抜いた。自分でも目を逸らしていたことが、第三者にこうも容易くバレているなんて、とショックを受けた。この夕日の中、顔色なんてわかろうはずもないのに、自分でも薄々でしか気づいていない不調を見抜かれて驚いた。
顔色を伺う、目で見極める。僕は、そういった人の内心を察する力が乏しいようだ。前世でも空気を読まない発言をしては、クラスメイトから遠巻きにされたものだ。いや、自分から話しかけなかったから交友が無かっただけかもしれないけど。
対人関係がデリカシーの無さによって少なくなり、それによって対人経験値が減って、空気が読めなくなる。そんな悪循環に陥った僕の楽園は、娯楽の世界だった。
溺れていたのか、飢えていたのか。今でも良く分からない。

『お前は、現実逃避をしてるだけだ』

小説を読みふける僕に、そう言った人が居た。

どうにも周りからはそう見えていたらしく、自分でもそうなんじゃないかと思い始めて。その末、僕は自分の『サブカル愛』とでもいうべき衝動に自信を持てなくなった。

僕は本当に、娯楽が好きなのか。本当は逃避の場にしているだけなんじゃないのか。

人の心なんて複雑怪奇なものは、何処まで潜っても底知れない。自分が完全に娯楽を現実逃避の手段としていないとは言えないし、その逆もまたしかりだ。自分に自信の持てなかった僕は、趣味にすら自信を持てなくなった。

小説を読んでないと苦しい。息苦しくて、生き苦しい。なんて、こんな表現もどっかの小説で学んだ借り物で、それがどんな小説だったのか思い出すこともできない。

今まで読んだ本の数なんて答えられないし、好きな作家を聞かれても即答できない。そんな僕は、果たして本好きなのだろうか。

そもそも、『好き』ってなんだろう。『愛』はどうやって証明できるんだろう。教えてくれたら、証明してやるのに。

僕はきっと、絶対物語の世界を愛しているって。

だから――

「――ムくん。アダムくーん?」

「あ、ごめん。ぼーっとしてた」
「まただね」
「うん。そうだね」
　そっとルミアさんの顔から目を逸らす。人の目を見て話すのは礼儀だが、僕はそれが大の苦手で、十秒も続けると息が乱れてくるのだ。だから仕方ない。荒れた呼吸を聞かれて、『うわー、私の臭い嗅いでるのかなぁ』なんて思われちゃあ、たまったもんじゃないから。
「――まぁ、グレン先生の話に思うところが無いわけじゃあなかったし、そりゃ、気分の一つも悪くなるよ」
「そうかなぁ」
「そうだよ。ほら、システィーナ……さん、も顔を真っ青にしてたでしょ？」
「うーん。確かにそうだけど……」
「でしょ？」
　案外話せているな、と朧に感じた。
　それもこれも、向こうの語り口が上手いからだろう。何と言うか、親しみやすいというか、話しやすいというか……こういうところが人気の理由なのだろう。
「ああ、そうそう。それで、そのシスティの事なんだけどね」

「どうしたの？」
「うん。アダム君に聞きたいんだけどさ。もしかしてアダム君、システィの事が好きなんじゃないかなって」
訳の分からない質問だった。気分は笑顔でニコニコしている少女に真っ向から包丁をぶっ刺された様な……まんまジャン＝ポール・マラーさんじゃねぇか。
「……えーっと」
返答に窮して、言葉を探して、でもなかなかいい誤魔化し方も思いつかなかったものだから、これまた正直に答えた。
「嫌いでは、ないかなぁ。どちらかというと、苦手な感じで。好きかどうかは、うん」
そっかー、と笑う彼女に、何故突然こんな爆弾を放り込んできたのかと訝しむ。
いや、案外女子ではこういう話が一般的なのだろうか。だとすれば、これも世間話の一環ということで、こうして身構えているのは寧ろ失礼に当たるんじゃないか？
いやいや、でも普通に世間話でこんな話をぶち込むか？　話すにしても仲のいい間柄じゃ――ってことは、僕はルミアさんに『仲が良い人』判定され――違う違う。思い上がるな。僕如きがそんな事――。
あはは、あはははは―、と誤魔化す様に笑っていたのは覚えている。この後も何事かを話していたのも覚えている。学食とか、授業とか、そんな他愛ない話を。

でも、この質問のインパクトが強すぎたせいだろう。それらの記憶が、良く思い出せなかった。

「じゃあ私、こっちだから」

「あ、はい。じゃあ、また明日」

「うん。さようなら。またね」

気付けばフェジテの街並みに溶け込むような一軒家の玄関に立っていた。家に入って、荷物を部屋に置いて、暫くぼーっとしているとシャルロットが返ってきた。

結局、何故ルミアさんが　話しかけてきたのかは分からないままだった。

普通に考えれば、多分、システィーナの事を聞きに来ただけなんだろうけど。

でも、なんで？

……考えても分からなかったから、とりあえず記憶に残った僅かな会話も忘れることにした。

多分気紛れか何かなのだろう、と。

夕食を食べて、寝床について、瞼を閉じれば、その時の戸惑いは既に朝靄の様に消え失せていた。

＊＊＊

翌日の事。その日も平時と何ら変わらない一日。
が、ただ一つ、異常事態ともいえる出来事があった。
グレン先生が、始業よりも早く教室へ来た、ということである。
「おい、白猫」
物思いに耽っていたように見えるシスティーナは、その声にびくりと肩を震わせて現実に戻る。
「おい、聞いてんのか、白猫。返事しろ」
「し、白猫……それ、私の事？　な、何よそれっ」
全然関係ない話だが、何故か少女漫画というと大抵ムズ痒くなるほどのイケメンが少女に壁ドンして、『俺の子猫ちゃん』とかって囁いてるイメージがある。アレは何処から広まったのだろうか。
「人を動物扱いしないでください！」
そんな。女子って子猫ちゃん扱いされたら喜ぶんじゃないのかっ？
「私にはシスティーナって名前が――」
「――うるさい、話を聞け。昨日の事で、お前に言いたいことがある」

昨日の話、と聞こえた瞬間に、システィーナはびくりと身を震わせた。
どうやら、軽いトラウマになっているように見えた。
「な、何よ、昨日の話ッ!?　そこまでして私を論破したいの？　魔術が下らないものだって、決めつけたいのっ？　だったら――」
臆した自分を鼓舞するように声を張り上げ、
その虚勢をグレン先生は断ち切る。
「――昨日はすまなかった」
「へ？」
柄でもない謝罪に対して、誰もが騒然とした。
あのグレン先生が謝るだなんて、誰一人として思わなかったのだ。
「その、まぁ、何だ。大切なものは人それぞれだよ、な？　俺は魔術が大嫌いだが、それをお前にどうこう言うのは筋が違うっつーか、言いすぎたっつーか……その、まぁ、あれだ。悪かった」
「……はぁ？」
気まずさげにそう言って、グレン先生は頭を下げた。下げたと言っても、僅かな角度だが。
それは見ようによっては謝罪と見える程度の代物で、システィーナの返答に聊かの怒

気が籠っているように聞こえたのも無理はない。
だが、グレン先生は、言いたいことは言ったとばかりにシスティーナの前を離れる。
騒めく教室。初回の授業よりも激しいざわめきを、グレン先生は聞いているのかいないのか。ただ黒板に背を預けて目を閉じ、何かを待つように静かに佇んでいた。
そして始業の鐘が鳴る。
それと同時に、グレン先生は目を開き、こういった。
「じゃ、授業を始める」
まるで、トランプを交換するぐらい自然に、港に爆撃を仕掛ける様な『宣言』をした。
駄目講師グレン、覚醒。
後にそう取り沙汰される一日は、こうして幕を開けた。
直後に思いっきり教科書を投げ捨てたけど。ナイスフォーム。

「お前等って、本当に馬鹿だよな」
ビシィ、と空気が凍った。
開幕のジャブにしてはどぎついストレート。
そんなド直球な暴言を吐かれ、クラス中は怒りに震えた。
喧々諤々。

辛うじて怒鳴り出さないだけ、まだお行儀は良いのだが、それでも地に落ちたはずの好感度は更に地底まで抉りこむ。

「【ショック・ボルト】程度の一節詠唱すらできない相手に言われたくないね」

綺麗な合い返しの手を入れたのは、我らが眼鏡、ギイブルだ。いつものように自信に満ちた顔で、僕らを代表した。

お前如きに言われたくねぇ。というのは、誰もが思ったことだろう。

事実、グレン先生も自分に才能が無いのは分かっていた。だから頭を掻いて自身が三流であることを認めるが――

「ま、確かにそれを言われると耳が痛い。俺は男に生まれつきながらも魔力操作の感覚と、詠唱省略のセンスに優れなくてな。絶望的と言ってもいいくらいで、学生時代には苦労したもんだ。

……だがな？　『程度』、と言ったか。やっぱお前は分かってねぇよ」

――けれど、一流（教え導く資格が無い）ではないことは、認めない。

「確か、ギイブルだったか。いいぜ、お前が『程度』と宣った【ショック・ボルト】を使って、お前らがどれだけ阿保なのかを証明してやるよ」

ギイブルを睨むグレン先生は不敵な笑みを浮かべる。その瞳は相変わらず淀んでいたが、だが、その奥底の心は少し楽し気に揺れた気がした。

身を翻(ひるがえ)し、黒板にチョークを走らせる。これまでと違って見やすく綺麗な字で書かれたのは、〝雷精よ・紫電の衝撃以て・撃ち倒せ〟という一文。続けて掲げたのは、【ショック・ボルト】の呪文書だった。前世でも見覚えのある様な羅列は、まるで厨二病患者が全身全霊で掻き上げた様な引く程本格的な術式と数式。

使用されている言語がちょっとカッコいい『ルーン語』であることも、それに拍車をかけた。共感性羞恥で耳が赤くなるものは居ないが。

あ、いや。習い始めの頃は、マジでこれを唱えるのか……と恥ずかしくなったものだな。

「はーい。この痛々しくて小っ恥ずかしい詩みたいな文章とか、ルーン語で書かれた術式や数識……ひっくるめて魔術式っていうのが書かれている黒魔【ショック・ボルト】の呪文書でーす。

……お前らの基礎能力は問題無いものだとしよう。これらの術式を暗記して、呪文を唱える。すると何故か魔術が発動、これが俗にいう『呪文を覚えた』ってことだな」

そして掲げていた呪文書を教卓に放り投げ、チョークを持つ手とは逆の、左手で扉の方に指を差し向ける。

「ショックボルトの基本的な呪文詠唱は三節……《雷精よ・紫電の衝撃以て・撃ち倒せ》っと」

閃光が扉のギリギリ手前まで駆け抜け、消滅する。誰もができる程度の魔術だが、思えば、グレン先生は僕らの前で初めて魔術を使ったかもしれない。

錬金術の授業はなんやかんやでつぶれたし、それ以外の授業はサボっていたからだ。

「っとまぁ、こんな感じだな。じゃあ、此処でだ」

当然できることをして、当然起こるべきことが起きて、何もおかしいことは無く。

じゃあ、と先生は続けて、一本の線を引いて。

〝雷精よ・紫電の／衝撃以て・撃ち倒せ〟

「さて、これを唱えると何が起こる？」

そんなことを宣った。

当然ながら、正しい詠唱じゃなければ魔術は正しく発動しない。失敗するのだ。間違った操作をした実験の様に、間違った結果が出る。

「ギイブル。お前なら答えられんだろう？　ほれ、答えを言ってみろ」

「なっ」

「んー、詠唱条件は……速度二十四、音階三階半、テンション――」

グレン先生が前提条件を上げ連ねていると、指名されたギイブルは理不尽に対して怒る様に口を挿んだ。

「そっ、そんな詠唱、成功するわけがないだろうっ」

「んなもん知ってるよ。俺が聞いてんのは、どんな形で失敗するかってことだ」

間違った詠唱をすれば失敗する。そんなことは誰でも知っているし、常識以前の当然だ。

だからギイブルはそう答えた。だが、先生は『失敗の形』を問う。

正しい詠唱しか学んでこなかったギイブルは、答えられない。

「どんな、形……？　それは、ランダムで……」

「ランダム？　……ラ、ン、ダ、ムぅ？」

「何が可笑しいっ」

自身の常識から外れた問題を、常識に則って勉強してきたものが答えられるわけがない。

正解なんて、答えられない。

答えが的外れなものになるのは、自然な事だった。

「っぷ、ぎゃはははははは！　あーダメダメ笑わせないでお腹痛い、ひー！　マジで言ってんのか!?」

すると、その答えが心の底からの真剣なものだと気付いたグレン先生は、腹の底から笑い声をあげた。

お前等は、この程度も答えられねぇのかと。そう言う様に。

「はー、笑った笑った」
「じゃ、じゃあ！　貴方は答えられるんですかっ？」
答えられない解答を、教師が用意するわけがない。だが、今までの素行を鑑みるに、グレン先生ならやりかねないとギイブルは判断した。
だから、そう聞き返した。
「ああ勿論。答えは、右に曲がる、だ」
そして初期の条件と同じくして、詠唱だけ四節に区切られた【ショック・ボルト】は放たれる。
それは先生の言った通り、確かに数十センチ進んだ先で右に曲がった。
『な――っ！』
偶然なのか。いや、有り得ない。確かに、何かしらの法則があるのだと、誰もが気付かされた。
『失敗の法則』。教本通りにやれば成功させやすく、失敗してもダメだったところばかり気にして何故そうなったのかを問い詰めない教育では、教えられることのない法則。
「因みに、此処で区切ると」
〝雷／精よ・紫電の／衝撃以て・撃ち倒せ〟
「射程距離が三分の一以下になる」

これもまた、宣言通りの結果となる。
まるでそういう【固有魔術（オリジナル）】でも使ったんじゃないかと、そう思ったものもいたかもしれない。信じられない、という視線は徐々に熱を帯び、この人は凄い、という感心に変わる。
感心すれば敬意が生まれ、今まで落ちた分の好感のギャップで、それは劇的な反応を起こす。
即ち、熱狂だ。
「じゃあ次、この部分を消すとどうなるか――は、そろそろ答えてもらうか」
書かれた詠唱は〝雷精よ・紫電　　以て・撃ち倒せ〟だ。
手を上げるものは居ない。誰かが『分かりません』と言い出すには、グレン先生が積み上げた愚行が重すぎて、自尊心が邪魔をする。
「だぁれも答えられる奴が居ねぇのかぁ？　んー？」
煽る様なその声に、けれど誰もが口を噤まざるを得ない。
自分の知らないことを知る者に敬意を払えない学徒は、この教室にはいないのだから。
「おいおい、全滅か？　情けないな、究めたんじゃなかったのか？」
『分かるわけがない』、だなんてのは誰もが抱える感想だ。だけれど、それを口にでき

るほど、彼らは恥知らずでもない。試してもいないのに、知らないとは言えないのだから。

失敗を知らず、成功だけしかできない。其れの、何処が『究めた』なのか。

ああ、そうか。此処でようやく、自分らは究めたという言葉の意味を理解していなかったと生徒等は気付いた。

煽りに返せる言葉を持たず。沈黙で以てのみ返す。

当然、僕もそれに習い、口を閉ざした。目立ちたくないから。

「ふーむ。だがこれじゃあ、授業にならねーしなぁ」

そんなことを言って、チョークを置く。

教室中を見渡していたグレン先生の視線が、ある一点――僕の横、シャルロット――で止まる。昔の同僚の姿を見て動揺してるのか、口元が引き攣っていた。

そこから視線を逸らし、僕と見つめ合いになる。

「じゃあ、アダム＝リュクス。お前はどうだ？」

「……あ、え？　僕ですか？」

「そ、お前だ」

すると何故かグレン先生は、態々僕を回答者に決めた。

目が合ったからだろうか。

熊かよ。

急に差されて戸惑う。確かに答えは知っている。原作知識で以てチートしようとした時期に、散々実験したからだ。だから答えられるが……それは、目立ちはしないだろうか？

答えられなくてもいい、という空気を感じながら、僕は適当に誤魔化そうかと考えた。

「威力が落ちます」

けど、何故か僕は答えていた。

「正解」

にやりと笑ったグレン先生の顔を見る暇もなく、僕は自分自身に驚いていた。

嘘だろう？僕は、もしかして目立ちたがり屋だったのか？

驚きの視線が痛い。関心の籠っているだろう視線を浴びて、息が詰まる。嗚呼、僕は根っからの陰キャなんだ。こっちを見るな。頼むから。

「なんだよ、答えられる奴もいるじゃねーか。じゃあやってみようか。《雷精よ・紫電の――」

そして具体例を示した先生は、僕らに一つ問いかけた。

「大体、お前等疑問に思わねーのかよ。呪文覚えて、それを唱えて。すると何故か不思議な現象が起こる……果たして何故だ？」

「そ、それは世界の法則に干渉して――」

「――というと思ったぜ。じゃあ、更に聞こう。そもそも、魔術式ってのはなんだ？『式』っていうのは、人の作った言語や数式や記号の羅列で、つまりは人の理解できるものだ。人から生まれたものだ。

魔術式が世界に干渉できるとして、なんでそんなもんが世界の法則に干渉できるんだ？　何故それを覚えないといけない？　なんで一見無関係そうな呪文を唱えると魔術が起動する？

答えられんだろうな。『できて当たり前』、じゃあ、『できなかった理由』しか教わらないからな。『できる理由』は教わらない」

これが、俺がお前らを『阿保だ』と称したわけだ。

そう言ったグレン先生は、続けて教壇の前で宣言した。

「じゃ、お前らの阿保さも証明できたところで。今日はこの【ショック・ボルト】を題材にして術式構造と呪文の基礎を教えてやる。興味がない奴は寝てな。

んじゃあ、始めるぞ」

ペンを取り、ノートを広げる興奮の中。

何故かシャルロットだけは気づかわし気に、僕を見ていた。

グレン先生が初めて行った錬金術の授業は、特に今までと大きく変わったものは無く、けれど妙にするすると頭の中に入るものだった。例えば基本操作の一手順、『抽出』なんかは、それに使う器具と方法、扱いを失敗した時の危険性と、それが起こる理由、具体例、その操作によっておこる変化、一般的に何に使われて、どんな応用があるか。

また、それに纏わる小話なんかも話してくれて、面白いほど学習は進んだ。

今は魔法薬の試作、つまりは実習をしている。服の汚れや、付着した液による魔術的な干渉を起こさないように着替えた僕らは、スポイトやフラスコや魔法布を並べて、聖別された水や様々な触媒を調合している。

作っているのは、魔法薬の性質を判別する試薬の一種。ヨウ素液みたいなものだ。

ペトリ皿みたいな円形の硝子皿に砂粒の様な触媒が置かれている。砂銀と呼ばれる、遡れる限り最も古い文献にも登場する、極めて普遍的（ポピュラー）な魔術触媒だ。これを加工すれば法陣の溶液になったり、魔法薬作成の薬液になったり、特殊素材の保存液や、特定の金属の加工道具にもなる。極めて使い道の広いこれは、特徴的な魔力が染み付いている。

いや、特徴的というと語弊があるが……まぁ、詳しく話しても意味が無いだろう。ヨウ素液の実験を唾液に濡れた米粒でやる様なものだ。別にこの触媒のみが持つ魔力でもないし、説明はまた今度ということで。

兎に角、教室前方の教卓に山のように積まれたこの砂銀に対し、正常に反応する溶液

を作り出すのが今回の課題だ。作り方に加えて途中に発生する反応や変化、出来上がりの状態などいろんなことを事前に教わっているので、成功するものは少なくないだろう。
「あれ？　アダムくん、凄い早いね」
「ん、あ、ああ。まぁ、慣れてるからかな」
「へぇ、凄いねぇ」
「ありがとう。あと、セシル。そこ薬液入れる試験管が違うぞ。よそ見してると、下手すると怪我をする」
「え？　……うわわっ！　危なっ！」
　間一髪で触媒同士の拒絶反応が起こる組み合わせを阻止できた。別に拒絶反応を起こす触媒を混ぜる方法が無いわけでもないが、それに必要な道具は今回支給されていない。あの量と質では試験管一つが割れて使い物にならなくなる程度だろうが、それでも破片で怪我をする可能性はある。
　慌ててスポイトを隣の試験管に差し込んだセシルは、胸を撫で下ろし、そして礼を言ってくれる。
「ありがとうアダムくん、教えてくれて。……ああもう、まだバクバク言ってる」
「どういたしまして。気を付けなよ」

ちょっとした会話も切り上げて、僕は最後の攪拌作業に入った。工程はこれが最後ではないが、殆ど最後まで調合は進んでいる。工程の中に抽出が多いレシピだから手透きな時間は多くできるが、何をすることもないのでその間に事前準備を進めていた。その結果が、セシルの言った『凄い早い』作業の理由だ。

周りを見れば、慣れない器具の扱いに手間取っているために、まだ作業工程の半ばまでしか進んでいない姿が多く見受けられる。ギイブルとかシスティーナとか、あそこらへんはだいぶ早いけれど。

「ほぉん。流石、手慣れてるな」

「わ。……グレン先生、ですか」

流石？

どういうことだろう。何かグレン先生に『錬金術が得意』だというような情報を与えただろうか。

覚えはない。唯一の心当たりとしても、シャルロットには口止めしてあるし……それ以外では、裏マーケットに色々流しているところを見られたりしたか？

その場合、なんか脅してきそうな人なんだが、この人（ロクでなし）は。

うーん。

「変な驚き方だな。今見回ってんだよ」

「そうですか。
……ええっと、なにか？」
「いんや、何も？」
「えっと、じゃあ……」
じゃあ、なんで僕の手元をじっと見てるんでしょうか。
その言葉は結局口に出ずに、沸騰し始めた液を別のフラスコに移して次の工程に入る。口下手な自分が恨めしい。
その手際をじっと見つめてくるグレン先生に、たまらず僕はもう一度聞いた。
「……何でしょうか」
「いや、見事な手際だったからな。そろそろ終わりそうだし、良かったら他の生徒も手伝ってやってくれ。さっきみたいにな」
見られて、いたのか。
少しの気恥ずかしさを感じながら、僕はその言葉に「分かりました」と返した。

＊＊＊

歩いていると、ふと、違和感を覚える。

「あ、アダムくん」

食堂の入り口をくぐるや否や、僕は呼び止められた。友人故に声で誰か判別出来た僕は、一旦後ろから来る人の邪魔にならないように、脇へと避けた。

「セシルか。奇遇だな」

「ちょっと着替えるのが遅くなって……」

「あー」

その言葉でセシルが更衣室でカッシュと駄弁っていたのを思い出す。グレン先生の変わりようがあまりにも衝撃的だったためだろう。他の生徒も大体がそんな風に駄弁っていたため、此処まで来る道のりではⅡ組の生徒を見かけなかった。

実質一番乗りではあるが、それでもいつもと比べると遅い。特にセシルは、いつも一番先に席についているような印象がある。見れば、頬に汗の跡が伺えた。走って来たのか。

因みに、僕も普段から早着替えするタイプだ。性分だということもあるが、放っておいた鞄を覗かれて他くないという理由もある。バレたらまずいというか、少なくとも取調室に連れていかれる程度には危ないものがあるからだ。

それはさておいても、果たして他の皆は何時来るのだろうか。喋り尽くして昼ご飯を忘れる羽目になれば面白いのだけれど。

ああ、そうそう。きっと、グレン先生についてのおしゃべりは女子でも行われているのだろう。社交的なシャルロットの事だから、食堂に来るのはだいぶ後になるはずだ。

……というか、これか。違和感は。

何時も傍に居たから、むしろ傍に居ないことが不自然に感じられる。違和感の正体は、シャルロットがいないこと。

ううむ、なんか少し恥ずかしい理由だ。

「じゃあ、一緒に飯取りに行こうか」

どうせ、シャルロットの姿も見えないことだし。

「うん。……そうだ、言い忘れてたんだけどさ」

列に並んでいると、セシルが話題を振ってくる。

珍しいことだ。

「言い忘れてたこと？」

「そう。その、さっきの授業、ありがとう」

何のことか、と一瞬迷ったが、心当たりは直ぐに見つかる。

先の授業でセシルにしたことなど、一つしかないからだ。

「……アドバイスの事か？　大したことじゃないぞ？」

それは、グレン先生に言われた通りに行ってみた手伝いの事だ。

「でもこういうのはちゃんと言わないと、後になる程言いづらくなるもん」
眉を跳ね上げ、次に顔を逸らした。その見上げた笑顔に、ムズ痒さを感じて。
つくづく、そういうところが凄いって思う。
例えば食事の毎に惰性で手を合わせる僕とは違い、きちんと気持ちの籠った言葉だと傍目でも分かるそれをするセシルは、何と言うかド直球で純粋だ。
いじめを看過できず、ポイ捨てを見とがめて、でもだらけるのを見過ごすぐらいには柔軟性のある……ああ、小学生の頃を思い出すな。
思えば、誰しも子供の頃はこれほど純粋であったはずだ。
セシルを見ていると感じる微笑ましさは、そういうところから湧いているのかもしれない。
一人で納得して、セシルに習って口に出した。
「セシルのそういうところは、凄い美徳だと思うよ」
「そうかな？」
「うん」
思ったことを素直に口にするには、時間は敵だ。
タイミングを逃して、どんどん先延ばしにすると、ますます言いにくくなる。
適当なメニューを選んだ僕らはお盆を取り、いつもの席へ向かって定位置に座る。

「ギイブル君も来てないね」
「ああ、あいつも着替えるの遅いからな」
クラスメイトの駄弁りに巻き込まれていなければ、そろそろ来てもいい頃だが……入口に、それらしき影は無い。
「誰かに捕まったか、こりゃあ」
そう呟いて、苦笑してやる。普段から毒舌なギイブルだが、別に人気は低くない。顔のせいか、それとも成績か、人柄というのはありえないだろうが、可能性はあった。
ギイブルは極稀にだがいつものメンバー以外の生徒と話す機会もある。運が良ければ、構内のどこかでその姿を見かけることもできるだろう。
それは道端で一食分の食費を拾うぐらいの幸運に匹敵する光景で。
まぁ、つまり。
滅多にないという意味である。
「お前、今変なことを考えただろう。そこはかとなくイラっとした」
「うおっ……ギイブル？　もう来たのか？」
折角クラスメイトと話せていたのに？
「……ああ、言いたいことは大体わかったよ。一つ断っておくが、僕は別に社交性が無いわけではない」

「いやいや、またまた」
「事実だ。事務的だというだけで、別に人見知りとかではないからな」
そう言えばそうだった。自分から話しかけに行かないだけで、基本的には話を振られても返さなかったことは無いな。
あれ、それじゃあなんで孤高（）だなんて印象が着いたんだろうか。
気質か。
「さて、今日はシャルロットも遅れているようだし、此処座るぞ」
「あ」
ギイブルが座ったのは、いつもシャルロットが座る席。つまりは僕の隣の席だ。
なんで今日に限って此処に？
そんな考えを読んだように、彼は口を開く。
「大したことじゃあないんだが、一つ聞きたいことがある」
そこまで言うと、まるで気まずさを隠すようにスープを一掬いして啜る。上品に嚥下されたそれは、どうやらお気に召した様で、続く言葉は少しだけ軽かった。
「【ショック・ボルト】の改変の話だ……知ってた、んだよな？」
「公式の事なら、まぁ……」
なら。

「良ければ、僕に教えてくれないか？」
呆気に取られた。
重々しそうに語るそれが、本当に些細なことだから。
「別に構わないよ。僕もいつか自慢しようと思って温め続けて、いつの間にか存在ごと忘れてたネタだしね。セシルも一緒にどうだい？」
「え、僕？　うーん、じゃあ、お願いするよ」
「分かった」
斯くして、僕の放課後の予定が一つ埋まった。

＊＊＊

そう言えば。
昨日の様な夕日を浴びる帰り道、ふと午前の授業を思い出す。
そして、それをなんとなく、隣を歩くシャルロットに言ってみた。
「シャルロット」
「なんでしょう、マスター」
「愛してる」

「はい、知ってます。私も愛してますよ、マスター」
ふむ。
僕の言葉の力って弱いなぁ。
肩透かしを食らった気分で、僕は「急にどうしたんですか?」と聞いてくるシャルロットを適当に誤魔化した。
「今日の夕飯は何が良い?」
「ん―っと。昨日ムニお婆さんからバケットをいただいたので、それに合うのをお願いします」
「ああ、パン屋の。じゃあコンソメスープでも作ろうか。冷蔵してあったはずだし」
「わ。良いですね、それ」

ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）　四話
恒例行事：学生時代の妄想

ゆさゆさと体を揺するその揺れが心地よくて、ぼくはさらに眠りを深める。果実が腐っていく速度でベットに沈みながら、ぼくは惰眠を貪っていく。

――起きてください。マスター。

心地の良い声が耳に届くのを聞いて、僕は渋々目を開けた。薄めだが、ぼんやりとした視界でも彼女を見間違えることは無い。

「……あに？」

何？　と聞いたつもりだった。

だけれど、粘つく喉は少し狭くて、言葉が掠れてしまう。

「朝ですよ。起きてください。ふふっ」

全く、朝は飛び切り弱いんですから、と小さく声が聞こえた気がした。幻聴かもしれないが、実際に聞こえたのかもしれない。だから、掠れた声で反論した。

「シャルロットが、朝に強すぎるだけでしょ……」

幻聴だったところで、寝ぼけていたと判断されて奇異の目では見られないだろう。

そのままくわぁと欠伸を打ち、上半身を起こして背伸びする。ぼさぼさの頭を掻き回すと、ベット脇で微笑むシャルロットに半目を向ける。
「おはよう」
「はい、おはようございます」
ニコニコと上機嫌な姿を見て目を逸らす。布団から足を出して床に足をつけると、足裏から伝わる冷気で目が覚めていく。冷たさが染み入る様に、足はすぐに寒くなる。
そろそろ断熱材でも作るか、と一人ぼやいて立ち上がった。ベット脇のサイドテーブルには、昨晩遅くまで弄繰り回していた歯車細工が置かれている。
それは、【グラビティ・コントロール】の影響下でも問題なく扱えるように試行錯誤している試作品だ。当然未完成であるが、完成した暁には一個単位で六桁の取引が確約されている。ベルトは別に要らないらしい。流石にそれは向こうで作るのだろう。
風が吹けばごちゃ混ぜになりそうなそれを適当に鷲掴みにし、傍の木箱に納める。綿の敷き詰められたそれは、細かい部品を傷つけることなく歯車やバネなどの細かい部品を受け止めた。
「じゃあ、いこう。朝は何だ？」
「行きましょうか。朝はベーコンエッグとトーストです」
ベーコンエッグ、卵か。卵料理が好物な此方としては、嬉しい朝食だ。

「……ん？」
「どうしましたか、マスター？」
いや、と返して小首を傾げる。
何かこう、妙に体が軽い。半徹夜明けの体調じゃあない。
……まさか。
「シャルロット？」
「はい」
「……いま、何時？」
絞り出すようなその言葉に、シャルロットはとても良い笑顔で遅刻確定の時間を告げた。
「――――」
妙に思考回路がまっさらになって、呆然として。
とりあえず、ゆっくりご飯を味わおう。そう考えたのは、完全に諦めからだった。

＊＊＊

いつもより早く流れる街並みには焦りの表れだ。気を抜けば速度の落ちる足に鞭を

打ち、意識して駆け足を維持して――

「空が青いな」

「そうですね」

「今日もきれいだ」

「きれいですね」

「……あー」

――それでも、死んだ目で遅刻を確信する。

脳の片隅で『いや、ワンチャンあの講師が遅刻している可能性も……』と囁く声を聴いた。

それは無いだろう。グレン先生は確かに不真面目な人だが、授業に関しては一切の手抜きをしていない。あの日から。だから、それはたぶん、ない。

言ってて無性に悲しくなってきた。

「……遅刻だな」

「遅刻ですねー」

暢気だな、とその返しを聞いて思った。もしかして今日は休日なんじゃ、と思ったがしっかり補講日である。ばっちりきっかり記憶に残っていた。

横で歩くほのぼの娘には、どうにも焦燥感が欠けているように見受けられた。もしか

して単位が欲しくないのだろうか。思えば制服も似合っていないし、そもそも戸籍上の年齢も本来は――

「マスター、それ以上はいけませんよ？」

「あ、はい」

――アサシンに『直感』スキルってあったっけ？

冷や汗を掻くのを感じながら、目を上に逸らす。今日も今日とて空が青いなぁ。あ、天空の城だ。相変わらず輪郭がぼやけて半透明だなー。ははは、鳥が飛んでらぁ。なんて種類だろ。

道行く人の姿を尻目に歩く道は、普段朝早くに起こされて歩いているからこそ違和感を抱かせる。店が開き、客引きの声が飛び交って、人の熱が街に満ちる。血が巡り始めたように騒がしくて、少し安心感を覚える。

幾ら安心しても、遅刻は遅刻だが。

街中を早足で駆ける僕らに、視線が集まるのは自然なことだ。学院の制服、駆け足。それ以上にも、シャルロットの存在が人目を引いているのだろう。周りに美人が多いので忘れがちだが、シャルロットも割と美人なのだ。

つくづく目が肥えてきていると感じた。シャルロットの風貌が普通と感じるなら、自分の顔は何なのか。ドブか？　土砂崩れか？　鍬で滅茶苦茶に掘り返した畑か？

知らず知らずに吊り上がった醜い笑みに、自嘲の味を感じ取る。
「マスター。……マスター？」
「……ああ、なんだ」
「これじゃあちょっと間に合いそうにないので、スピード上げますね」
「スピード上げるって、全力疾走か？　此処から学院迄どんだけあると――」
「――いえ、私が抱えて走ります」
「は、え、ちょ、まっ――」
風が吹き荒ぶ。景色が横に流れていく。ふわふわした四肢と、きゅうと縮まる丹田。緊張で硬直する首の疲れは、理性を取り戻す。
辺りを見て、シャルロットを見上げ、自分の足下を見下げて。
成程。
僕、シャルロットにお姫様抱っこされてるわ。やだ男前、って阿保。
「し、シャルロット……？」
「はいっ、何でしょうか？」
心成しか生き生きとした笑顔。いや、心成しじゃないわ、すっごい生き生きしてるわ。輝いてる。眩しい。
「なんでお姫……横抱きにされてるのかな？」

「私がマスターに『お姫様だっこ』して欲しいからです」
「うん、繋がってないね」
　えーっと？　わざわざ人が濁したところをはっきり言ってしまったことへ抗議するのが先か、そもそも前後関係の繋がらないセリフの真意を知るのが先か。
　と、思ってたらシャルロットが自分から話しだしてくれた。
「良く『愛されたいなら愛しなさい』っていうじゃないですか」
「うん、よく言うかどうかはさておいて、割と耳にするフレーズだね」
　日常会話で使われたこと、一度もない言葉だけれど。でも聖書の朗読とかには出てきそう。
「それと同じです。『お姫様抱っこされたいのならば、まずお姫様抱っこしなさい！』ということですっ」
「ごめん、なんでこのタイミングでその理論持ち出してきたのかが分からない」
　だって、僕を抱き上げて走ることと、お姫様抱っこされたい、というのはイコールではないじゃん。
　どっちの理由でも僕をお姫……横抱きにする結果につながるけど、理由は違うじゃん。そこに立った時点で、大体理由も察したけど。
　というか、その程度言ってくれればするのに。今みたいに急いでる状況じゃなけれ

ば。

「あー、うん。……本当にこうしなければ間に合いませんか……？」

やめて欲しい。あちこちの視線が痛いから。

そんな切実な願いを込めたセリフは、吹き付ける風を浴びて心地よさそうに目を細めたシャルロットの――

「間に合いません♪」

――という、実に上機嫌そうなセリフで切り捨てられるのだった。

明日からどんな顔して礼装売りに出せばいいんだろうか。あの世界、嘗められたら足下見られて値切られるんだよなぁ。大抵どの世界でもそうだけど、フェジテのブラックマーケットじゃあそれが顕著に出る。

すでに一定の需要があるから、捨て値で買われることだけは無いだろうけど……なんて、そんな現実逃避をしていると、いつの間にか校門を過ぎ、学院内に入ってきてしまっていた。

ということは、少なくとも警備員にもこの姿を見られたということで。というかよくよく思い返せば『おい君』だの『ちょ、待ちなさ――』とか言った声が聞こえた気がしないでもない。

だいぶまずいのではないのだろうか。と冷や汗を流す。明日からどんな面下げて登

校すればいいのだろう。これが寝坊に対するペナルティなのか？　あまりに酷すぎやしないだろうか。

……ま、いいや。思考を放棄して微笑む。

もう、どうにでもなーれ。

学院の中はがらんどうだ。彼の第七階梯の教授から保健室の先生まで、教員全員が魔術学会で不在。それによって学院も本来は休校日……なのだが、前任者（ヒューイ先生）が大事な時期に失踪した我らが二組は、本日を補講日として登校を続けていた。

僕は遅刻したけど。

いつもと違う廊下を歩いていると、なんかいろいろと場違いな気分に襲われる。遅刻故の不安とか、今日が休日であることへの淡い期待とか、そういうので胸の中がごちゃごちゃになる。

「あ、マスター。私先トイレ行くので待っててください」

「分かった。……いや僕待つ必要ないよね？　って、もう行ってる」

流石に、女子トイレの中には行けない。預かったシャルロットの分の鞄の事もあって、仕方なく僕は廊下で待つことにした。

壁に埋め込まれるようにして立つ柱に背を預け、窓から外を眺める。特殊な製法で精

錬されたガラスは気泡一つ、不純物一つ混ざらず、とても透明度が高い。
どうやって作ったんだろう。魔術かなー、やっぱ。などと、外の風景とは一切関係ない思いを巡らせていると、足音が聞こえた。
振り向くと、見覚えのないバンダナの青年が、良く見知った銀髪の少女を拘束して引き連れている姿を見た。
……。
どう見ても事案です本当にありがとうございました（白目）

「あん？　生徒か。んでこんなとこに……」
「システィーナ……さん、学内でそういうプレイは、流石にどうかと思う……」
「違うわよ襲われてんのよ惚けてる暇あるなら助けなさいよ――っ！」
「あ、こら暴れんなって」
動揺収まらない思考。つい口から飛び出た軽口は、その必死な突込みによって爆笑ギャグになった。やっぱシスティーナは突っ込みキャラなんだなって。
けらけらと聞こえたせせら笑いも耳を通らず、ただ上滑りする。混乱の最中にある僕は、頭が空白に染まっていた。
え、いや待って、なんで？

何この状況。知らな……いや知ってるわ。

知ってるわ僕。これ原作一巻のテロリスト襲撃イベントやんけ。わー、お初にお目にかかりますう。

「え？　え、警備員……は？」

「ま、いいか」

そうだ、警備員は殺されたんだった。てかどんだけ早く捕縛と誘拐済ませたんだ。僕が校門くぐった時ってまだ警備員さん生きてたよね？　僕どんだけ呆けてたのかな。

自分自身に呆れながら、自分自身に向けられた指の先から逃れることも出来ない。既にそれがどれだけの脅威なのか、知るはずがないのに知ってしまったから動けない。体が竦んでいる。

恐怖に応じて、顔が勝手に引き攣る。強がりのように浮かんだ笑みは、果たして笑みに見えただろうか。

「そこ動くなよ？　――《ズドン》ってなるからなぁ」

指先から駆け抜けたのは、【ショック・ボルト】の様な細い閃光。しかし、その殺傷力は尋常ではなく、背後ではガラスが割れる音がした。

あれは【ライトニング・ピアス】、軍用魔術であり、脅威は拳銃ほど……射程を考えれば、それ以上だろうか。

切り詰められた詠唱は、それこそ引き金を引く程容易に連射を可能にし、連射数も十だの二十だのではきかないだろう。

頬の真横を駆け抜けたそれ。凪いだ僅かな風が、妙に冷たい。

そのまま動けずにいると、呆気無く捕縛された。後ろ手で拘束する縄は頑丈で、捩った程度では抜け出せなさそうだ。無抵抗に捕まった自分が、そんなことを冷静そうに考えている。

「ん、鞄が二つ……もう一人いるのか。めんどくせぇなぁ」

そう言ってガリガリと頭を掻いて、男子トイレへと入っていく。

置いて行かれたのは、きっと何もできないだろうという確信から来るものだ。一つも閉じていない扉を見れば、直ぐに出てくる。だけれど、その僅かな隙でも何かを伝えたいのか、肩に顎を乗っけるように、後ろからシスティーナが耳元で囁く。

「ちょっと、アナタ何してるのよ。なんで逃げなかったの？　……って、ああ、そう。シャルロットも一緒だから……」

こんな時にも他人の心配か。余裕があるようで、と思いながら横目で見れば、その顔は僕でも分かるほどに青くなっていた。こういうのを、顔色が悪いというのか、それとも単なる見間違えか。

当然だ。ただの女学生が命の危険を感じて冷静でいられるわけがなく、更には自身の

貞操が奪われるかもしれないのだ。

そして、それが僕も例外でないことを、ガラスに映った自分を見て知る。そこに映っていたのは、本当に酷い、引き攣った笑みを浮かべていた僕だった。

これが僕なのか、と一瞬ドン引きするほど歪だった。

――ああ、怖がってるんだな。

すとんと、腑に落ちた。

そうだ、怖がっているのだ、と。今更ながら理解したように、今更ながら気づいたように。

いっそ逃げ出してしまいたいが、すんでのところでシャルロットの存在が僕を踏みとどまらせる。冷静に考えれば、受肉したとはいえサーヴァントだ。たかが人間ごときには負けないだろう。

でも、見捨てて逃げるという選択肢はなかった。あれだ、壊れないと分かっていても、地震の時はお気に入りのグッズを持って逃げだすオタクの思考と同じだ。此処で逃げ出したくないのだ。

此処で逃げ出したら、きっとそれは愛が無いから。

ふぅ、息を吐く。思えば、これは深呼吸とはまた別に、自分を冷静にさせるルーチンになっている気がする。

最近は動揺すること多い。

というか、さっき突っ込みながら暴れてたのって、まさか僕を逃がす為だったんだろうか。とんだ自己犠牲精神だ。いや、どうせ襲われるんだから、それまで手荒いことはされないだろうという打算を含んでいたのだろうか。

じゃあ自分が彼女の立場であったら、同じことはできただろうか。捕らわれの身で、さほど知らない級友を助けるために自分のみを危険に晒せるだろうか。

「凄いなぁ」

そう呟いた声は、果たして聞こえなかったようで、聞き返された。

「何？　なんか言った？」

彼女の、そういうところが苦手なんだ。まるで主人公みたいな蛮勇を働かせるところが。どうせ主人公補正もないヒロイン何だから、大人しく誘拐されていればいいのに。

そんなことを考えて、吐き気が込み上げた。人様を人形（キャラクター）扱いか。反吐が出るなぁ。

ああ、こんな奴、死んでしまえばいいのに。何時もの様に、そう卑下する。

「テメェの連れ、どうやら女のようだなぁ。良いねぇ。どうせなら二人纏めて遊んでやるよ」

トイレから出てきたバンダナの男は、下卑た笑みを浮かべて言ってきた。明らかに僕に向けられた顔で、期待されているだろう反応も、察した。

悔しげな顔をして睨む。

サービスで軽く突っかかってやると、腹を蹴り飛ばされる。背後に居たシスティーナを巻き込み、廊下に横倒れになった。

まるでアダルト漫画みたいな展開だな。ＮＴＲれ展開は好きじゃないんだけど。

……いや、そうふざけてられる状況でもないよな。

女子トイレに入ったバンダナの男の背中を見ると、不思議と恐怖以外の想いが沸き上がる。僕でもこんな感情が湧くのか、と思いつつ、その感情で恐怖を麻痺させながら鞄の下まで這いずった。

閉じた個室を見つけ、バンダナの男が戸を叩いたようだ。ふざけた声と軽いノックの音を聞きながら、鞄の中から素焼きの試験管を探り当てた。自己防衛用にしては過剰防衛な作品だが、今この状況ではまだ心もとない。

口でそれを持ち、立ち上がる。真正面には視界を遮る壁。首を振って、中身の見えない試験管をトイレの中に頬り投げた。

ああ、重かった。そう心中で呟きながら、同時に口は別の文言を紡ぐ。

「《Ｆｅｒｖｏｒ（沸き立て）、ｍｅｉ（我が）Ｓａｎｇｕｉｓ（血潮）》」

思い返すのは、これを作るのにかかった月日。本日初公開ですよっとおどけて見せれば、自分の胸が躍っているようにも思える。実際は恐怖だけど。

この世界の魔術は、僕らには使えない。それが判明したのは、何時の事だったか。

正確に言えば、この世界で定型化された――例えば【ショック・ボルト】や、【グラビティ・コントロール】をはじめとした魔術が使えない。何故なのかは断言できないが、恐らく、僕らの出自が原因なのだろう。

此処とは異なる法則の世界の記憶を持って生れて、育って。だからルーン言語での自己暗示が、この世界の原住民と同じように働かないのではないのだろうか。

大陸一つ違うだけで、言語ですら変化するのだ。世界が違うなら、深層心理が別物になっていてもおかしくない。だから、深層心理に働きかけるルーン語が正常に機能しない。

そこでどうすればいいのか、僕は考えた。転生直後ではこの世界が型月だと思ってたし、この世界が『ロクでなし』の世界だと気付いてからも、型月より少しマシ程度の危険さだという意識は持っていた。

護衛用に、魔術を使いたいと思った。だが、先人が積み上げた技術の結晶は、僕らに適合しない。

そこで、こうした。自分にできないのなら、他にやらせればいいと。発想の大本となったのは、『宝石魔術』だ。

型月には、自身の代わりに魔術を行使する礼装が山ほどある。彼のスマホゲーでは、

ど素人でも扱える様な魔術礼装がゴロゴロと出てきたものだ。

何もこの世界固有の魔術に固執する必要はない。自分らで自分らに合う魔術を使えばいい。

【ショック・ボルト】などの起動も、礼装に代行させればいい。理論が分かれば、後はコンパイル（こっちの理論に落とし込む）するだけだ。

これは、その思想の集大成。

「あ――？」

「――《Ｄｉｌｅｃｔｕｓ（指定）　ｉｎｃｒｉｓｉｏ（攻撃）／（斬）　Ｓｃａｌｐ（撃）》ッ!!」

今世で自衛用に作り上げた魔術礼装。ロード・エルメロイの至高の魔術礼装。

月霊髄液（ヴォールメンハイドラグラム）……の、模造品。

『模造：月霊髄液（ヴォールメンハイドラグラム・フェイク）』だ。

うん、劣化版である。やっぱケイネス先生スゲーや。

音声に反応する機能や、一定の形状を維持する機能、ある程度の自立思考に、防御能力。これを作り上げた本家の脳はスパコンなんじゃないかと疑うぐらい、面倒な代物だった。数年かけて未だに完成していないのだといえば、少しは大変さも理解してくれるだろうか。

体積は試験管二本分。防御に回すには少なすぎるために、攻撃ぐらいしか使い道がない、自衛グッズとして終わってる性能。専守防衛ってレベルじゃねーぞ。

大体、試験管の容量を広げるだけで一年かかったのだ。材料となる水銀も高いのだし、此処まで着くれただけでも十分に過ぎる。

そんなちょっとした自慢は、これで勝負が決まった、という油断から生じたものだ。

「いってぇ！　おいおい……なんだぁ？　この玩具はっ！」

「っ、効かなかった……避けられたのか！」

体積が少ないだけに、どう攻撃しようとも自然と攻撃力は足りなくなる。細かな制御が必要となる刺突は自動制御では難しい。その為に斬撃を選んだが、間一髪のところで避けられたようだ。　試験管の割れる音で攻撃に気付かれたのだろうか。

トイレの中から足音が聞こえて直ぐ、眼前にバンダナの男の姿が現れた。

その顔は怒りの色が見えるほどには歪み、だが鹿撃ちをする貴族の様な残虐な笑みも見えていた。

「やってくれたじゃねぇか、坊主。あぁ？」

右腕に切り傷。さほど深くなさそうだ。やはり、振り返ったところで避けられたのだろう。命令しなかったために礼装は待機状態で、恐らくはトイレのタイルに転がっていることだろう。使い捨ての護身用具とでも思われたのか、どうやら何の対処もしてない

ようだ。

せめて自律機能を先に組み込んでいたら――いや、それでも足止めには――今なら不意打ち行けるか？

『模造・月霊髄液』に搭載した機能なんて、形態維持と音声認識、自律防御、斬撃、刺突、殴打くらいだ。

自律索敵とか、ほんとどうやって搭載していたんだろう。せいぜい数メートルの動体しか検知できないんだぞ、うちの子は。魔力の供給源から離れると只の水銀に戻るし。

あー、ほんと。どう改善すればいいのやらねぇ――っ。

「かはっ！」

「アダムッ!?」

思考は、呼び動作の分かり辛い蹴りによって中断させられる。

「おーおー、良く吹き飛ぶじゃねーの」

肺に残っていた空気を吐き出し、強かに背を打ち付ける。よろめきながら壁に着いた背。倒れはしないものの、横隔膜が痙攣でも起こしているのか、呼吸ができない。

嗜虐癖でもあるのか。バンダナの男は人差し指をぴんと立てると、こっちに向けてくる前にこういった。

「痛かったじゃねーか、今の。カノジョ救ってヒーロー気取りかい？」

面白いオモチャを手に入れた様な、無邪気で悪意の籠った笑み。ああ、いやな予感しかしない。

「だが素晴らしいっ！　いやー、やっぱ青春っていいよなぁ？　そう思うよなぁ？」

突然の大声に、視界の隅でシスティーナがビクッとするのが見えた。

「だからさ、カノジョさんを救うチャンスをやるよ。

今から十発、てめーを撃つ。全部耐え切れたら、三人とも見逃してやっていいぜ？」

ああ、テンプレだなぁ。

これ絶対後で反故にされる奴じゃん。

「《ズドン》《ズドン》《ズドォーン》……ほらほら、後四発だぜ？　男を見せろよ、カレシくん？」

彼氏って誰の事だ、と考えて、それが自分の事だと踏みとどまる。意識が途切れそうになって、前後の記憶が繋がらなかったのだ。飛びかけた思考を繋ぎ止め、痛みに喘ぐ口を開く。

「《Ｓ　ｃａ――」

「《ズドン》。おおっと、どうしたんだ？」

さっきから、『模造・月霊髄液』への音声指示が妨害されている。まさか、あれが繰り

返し使えることを察しているのか？　そうでなくとも、他の予備を隠し持っていると疑われてもおかしくないか。そも、なんでさっきから妨害されている？　同時に詠唱を始めれば、確実にこっちの方が早く詠唱し終えられるのに。こっちが口を開く前に唱え始めてる？　どうやって――口元か。口元を見て、こっちが口を開くより早く、こっちが唱え始めるより先に、【ライトニング・ピアス】を撃っているのか。あ、光って――

「《ズドン》《ズドン》。おおっ、後一発だぜぇ？　根性みせんじゃーん」

「――カ、アッ」

――脳が焦げるように、体が痛む。

最後の二発によって、全身に痺れが回った。これまで腕や足をギリギリ掠る程度にしか撃っていなかったそれの威力調整を引き上げたのだろう。そんな分析をしているが、体の方は死に体である。もう壁に寄り掛かることしかできていない。意識も途切れかけ、礼装への指示も、行えそうにない。

学院の実力テスト用の礼装では役に立たない。護身用の『模造・月霊髄液』は命令を入力する前に妨害される。

霞む視界。狭まる視界。廊下で向かい合わせになっている僕とバンダナの男以外の景色が、白く霧かかって見えない。

「いやぁ、中々すごかったぜぇ？　うんうん――てなわけで、死にな。《ズドン》」

嘘くさい笑みから一転して此方を嘲笑ったその男は、最後の一撃として放つ【ライトニング・ピアス】を発動させ――

「ん、あぁ？」

――られ、なかった。

「人様の生徒で、なぁに勝手に遊んでんだぁ？」

聞き覚えのある声だ。

ああ、そうか。

主人公（グレン＝レーラス）が、到着したのか。

目の前が黒くなる。気絶したわけではなく、光が遮られたためだ。

声は遠くなり、恐らくは先生の背中であろうそれを見つめながら、廊下の床に膝を突いた。目を細めてその背中を見ると、まるでアニメでも見ているかのように現実味を感じられなくなっていた。そろそろ、やばいのかもしれないな。

ふわふわする体で、物を想う。目の前でグレン先生の体が跳ねる。バンダナの男に拳を打ち込んだのだろう。

――あ、確かシャルロットがまだ。

「くそっ、こうなりゃ――」

ああ、やっぱり。追い詰められた敵役って、なんでかいつも人質取ろうとするよね。

それが何だか可笑しくて、だから僕は何故か微笑む。
「《Ｓｃａｌｐ（斬り殺せ）》」
自分の声の筈なのに、何故かその一言は綿に包まれたように遠かった。
同時に聞こえた誰かが転ぶ音も、それを取り押さえる先生の物音も、体を揺さぶってくる誰かの声も。
全ては霧のように霞んで。
そして僕は、気絶したようだ。

「う、ぅんん……」
「起きたか」
「あれ、グレンせんせ――いった……っ」
次に目を開けると、眼前にはバンダナの男を卑猥な感じで縛り上げてるグレン先生と、心配そうにのぞき込んでくるシャルロットの顔があった。後頭部の感触は、膝枕だろう。後ろ手に回っていないところを見るに、拘束は解かれたようだ。
「ああ、シャルロット。大じょ……」
「もう少し寝ていてもいいですよ、マスター。ええ、はい。私はこの通り。マスターが足止めしてくれていましたから」

とてもいい笑顔でそう言ったシャルロットに、僕は自分の心が満たされるのを感じた。

「そうか……それは、良かった」

僕の愛は――

「――って、そうそう。シャルロットよぉ。あんたなら一人でこいつぐらいのせてたはずだろ？　なんでやらなかった」

「いやですねぇ、グレンくん。私、トイレに居たんですよ？」

「それがどう――」

「――先生ッ、セクハラですよ！」

ああ。

セクハラって、もうこの時代でも存在するんだな、って。

「っ、おはようございます、グレン先生」

この状況下で甘えてられるわけもなく、僕は身を起すことを選んだ。

硬い廊下に寝そべり、背中が痛くなったのも理由の一つだ。どうせなら、ああいうのは家のソファーとかでやってもらいたい。

名残惜しみ、後ろ髪を引かれる思いで立ち上がると、後頭部に少し痛みが迸った。きっと、倒れた際に床に打ち付けたのだろう。痛みの響く処を抑えると、先生はらしく

もなく心配げな瞳を向けてきた。
「大丈夫なのか？　こいつにさんざっぱらやられたばかりなんだし、もう少し休んでたらどうだ？」
「いえ、硬い床で休むも何もありませんよ。それに、この状況なら休んでいるより動き回っていないといけないでしょう？」
　そう言うと、グレン先生は凄く微妙そうな顔をした。なんでだろうか。
「グレン先生の言う通りよ、アダム。さっきあれだけ【ライトニング・ピアス】打ち込まれてたんだし、休んだ方が良いわ」
「いやいや、いっても手加減されてたものだ。軍用魔術ってところが【ショック・ボルト】とはかけ離れているけど、この程度なら被害の程度はさほど変わんない。せいぜい何十発も【ショック・ボルト】をぶち込まれた程度の負傷だよ」
　そう言いつつ、グレン先生を見ろというように目をやった。システィーナはそれにつられて顔を向けると、ああ、なるほど、と言った風に頷いた。いや、呆れた。
　僕でも分かるげんなりとした顔に、グレン先生は何か文句あるのかよ、という風に口を開く。いいえ、何も。その短い言葉が、システィーナの返答だった。
「さてと、そっちの彼は、どうするんですか？」
　シャルロットがそう言って、話題は直面した事態のそれに立ち戻る。

グレン先生が捕縛したテロリストの片割れ、バンダナ男。名前は分からないが、なんかヤンキーっぽい。シャルロットに近づかせないようにしよう。

と、その時。シャルロットはバンダナ男を見て何か思い出したのか、胸の前で手を打ち合わせた。

「あ、ちょっと失礼しますね」

シャルロットが女子トイレの中に戻っていく。忘れものでも取りに戻ったのだろう。バンダナの男はグレン先生に引き摺られ、女子トイレの入り口から遠ざけられる。おいそこ、首傾げてスカート覗き込もうとしてんじゃねー。あ、グレン先生に殴られた。

そんなことを考えていると、ふと忘れ物を思い出す。

あ。

トイレと言えば、僕の礼装はちゃんと回収したっけか。

「マスター、此方をどうぞ」

「ああ、ありがとう、シャルロット」

忘れ物をしたのは、僕の方だったか。

シャルロットは小さいメロンぐらいのサイズの、銀色の球体を差し出す。

ミニチュアサイズの月霊髄液とでもいうべきそれは、正しく僕の作った模造品の礼装だ。空間拡張の魔術を刻んだ試験管はもうないので、これからはこれを抱えて移動する

ことになる。

……いっそ、置いて行こうか？

ズシリと手に圧し掛かる重みを前に、そんなことを思案する。だってこれ持って移動するの疲れそうだし。

でも、これを作り上げるのにかかった労力と資金と資金（大事な事なので二回言った）を考えると、それも躊躇われる。いや、一度作り上げられれば複製なんて容易い事なんだけど。むしろ『量産性』がこいつの売りですらあるんだけど。

「けっ、誰が話すかよ」

「ほぉーう？　そうかそうか、このグレン様に楯突こうというのかね？　――亀甲と薔薇、好きな方を選べ」

向こうではいやな予感しかしない二択が提示されてる。どう抗おうと地獄の二択って奴だろうか。僕の想像通りなら、周りへの被害が大きいし、むしろ本人が新しい扉開きかねない。

ていうか何やってんだろうあの二人。どういう話の流れで亀甲と薔薇の二択が出てくるんだ。

尋問なんだろうけど。尋問ではあるんだけど……牛と梨とかじゃあないのかな、そういうのって。

「お前等なんぞ、レイクのやつが――」
途切れた言葉、震える瞳。その先を辿る様に僕らが廊下の奥を向くと、そこには笑うしかない光景が広がっていた。
成程、此れが『話の途中だがワイバーンだ！』と言うやつか。
「……はな」
「言わせませんよ、マスター」
遮られた。
流石に真面目にしないと怒られるようだ。
見れば、廊下を埋め尽くすほどの骸骨がそこに立ち並んでいた。
ははっ、此処は炎上していなければ聖杯戦争も起こってないんだぜ？　人理が滅んでもいないし、そもそもシャルロットに凶骨とか要らないから。強いて言うなら塵。でもお前等落とさないじゃん。
ね？　君たちの来る場所じゃないの、分かったかい竜牙兵君たち。
心中で、見覚えの在りすぎるその召喚獣に文句を言いながら、だらだらと冷や汗を流

す。

一時期、型月世界の魔術を再現しようとして只管流出させまくった術式の一部に、あんなのがあった気もする。当時『これで骨採り放題だぜやったね！』って興奮してたのを覚えてる。

でもあれ、割と特殊な素材と無茶な鮮度を要求してるはずなんだけどなぁ。見た目が似てるだけの別術式って線は……ないみたいですね（諦め）

駄目だ。使われている魔術式に見覚えがありすぎる。

うん。

これが終わったら、全部の礼装に魔力パスを繋いでおこう。

無詠唱でも起動できるように。過剰防衛でもいいから、自衛できるように。

『模造：月霊髄液』の改造を最優先におきながら。

そう誓った。だって、コレ後でお偉いさんに恨まれるパターンじゃん。

危険視されて排除されるパターンじゃん。

謝って済む問題じゃ……ないっすよねぇ。

レイシフト用のコフィンが出来たら真っ先に修正しよう、この黒歴史。

「――逃げるぞっ！」

人間、流石に波には勝てません。

それが殺意を持っていたなら、猶更。

ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）　五話

恒例行事：主人公による事態の収束

才能に溢れていると自負し、血の滲むような努力をしていると確信し、そして魔術の負の側面から目を背けないと誓った。

きっと、そんな私に怖いものなど無いと。

そう思い上がっていたのだろう。

「――っそい！　全く、あいつは何してんのよっ」

まぁまぁ、とルミアが宥めてくる。それに甘えて私はルミアに愚痴を吐きかけた。

内容はヒューイ先生の突然の退職の代役として雇われた非常勤講師のアイツ――グレン＝レーダスの事だ。怠惰と不真面目を煮詰めた様な人間性は本当に見れたものではないが、その腕は、まぁ、認めなくもない。

「でも、ほんとにね。どうしたんだろう、グレン先生……ここ最近は遅刻なんてしてないのに」

それを聞いて私は少し考えてみた。確かにあの男（グレン先生）は最近遅刻をしていない。生活態

度は不真面目でも、授業態度は不真面目ではなくなった。言動はふざけていても、教育はふざけていない。

そんなあの人が、何故……

「……まさか、今日が休校日だと勘違いして……？」

「い、幾らグレン先生でも、そんなことは……」

ルミアでも否定しきれないようだ。それは無いだろうと思いながら口にした説だが、何故か案外的を射ているような気がした。

「いや、いやいやいや、まさかまさかまさかねぇ、そんなねぇ……ねぇ、シャル……って、あれ？」

動揺のあまり、シャルロットに否定してもらうことを期待して通路向こうの席に顔を向け、そこでまだ彼女が登校してきていないことを知った。さり気に、彼女と常に一緒に居る印象のあるアダムもだ。

「あ、アダム君とシャルも来てないね。二人とも寝坊かな？」

「今日は寝坊が多いわね」

まったく、それでも栄えあるアルザーノ帝国魔術学院の学院生である自覚はあるのかと。小一時間ぐらいは説教できる。

だが、それをするまでもなく、システィーナの日常は崩れた。

教室の扉が開かれる。

入ってきたのは、連日遅刻をしていたグレン先生ではなく、珍しく遅刻したアダムでもなく、見知らぬ二人の男であった。

「あ、何考えてるんですか先生！　もうこんなじか――」

当然、それは登校中に遭遇し連れ添ったグレンとアダムではなく、全く知らない部外者――不審者であった。

「――へ？」

「あー、ここか。いや、みんな、勉強熱心ゴクローサマ！　頑張れ若人！」

へらへらと、いつぞやのグレン先生を思わせる気軽さでその男は手を振った。

軟派な笑みから爽やかさを感じることはできず、むしろ近道として路地裏を通った時に向けられた下品な視線を思い出し、身震いを起こす。とても心許せるような相手ではないことは明白だ。

ざわつく教室に、遅れてもう一人の男が教卓の前に立つ。教室中を見渡している彼は、果たして何を探しているのか、誰を探しているのだろうか。

『システィーナ』は、我こそが、と義務から来る焦りに駆り立てられて立ち上がる。

「ちょっと、貴方たち一体何者なんですかっ？」

少し弾む声は、よくよく聞いていれば軽く上ずっていた。長年の付き合いで、ルミア

はシスティーナが怯えていることを察する。それはそうだ。見知らぬ男が居る筈のない場所に居れば誰だって警戒ぐらいする。

何より、男らが纏う空気はピリピリしていて、それが一層緊張を煽る。恐怖はそこから漏れ出たものに過ぎない。

深呼吸を一つ、それで覚悟を決めるには十分だ。

だが、少しの恐怖で退くわけにはいかない。何故なら自分はフィーベル家の娘なのだから、と。システィーナは見知らぬ二人の前まで歩を進めた。無警戒にも思える足取りは、リズムを狂わせることなく男たちの前まで続いた。

「此処はアルザーノ帝国魔術学院です。部外者は立ち入り禁止ですよ。そもそも、どうやって立ち入ったのですか？」

毅然と振る舞い、最初に入ってきた方の男を見上げる。意識して吊り目を保ち、『講師泣かせ』の二つ名で知られる自身のテンションを呼び起こす。

それは、普段からの興奮によって非日常な事態から感じた恐怖を塗り潰そうとした足掻き。言うならば子供の背伸びの様なものだった。

だから、そんなものは軽々と押さえつけられ、圧し折られる。

「おいおい、質問は一つづつにしてくれよ」

息のかかりそうなほど間近で、上から、押しつぶすように見下してくる。

「オレ、君たちみてーに学がねぇんだからよ」

「……っ！」

静かな威圧に息が詰まるのを感じた『システィーナ』は、それによって思わず一歩退いた自分を自覚した。

だが、逃げるわけにはいかないと自らを　咤し、その場に踏みとどまらんとする。その無言の気迫を見て取ったか、男はニィと嗤った。

「まず、俺たちの正体ねぇ。テロリストって奴かな。要は、女王陛下サマに喧嘩を売る怖ぁいお兄さんってワケ」

何故素直に答えるのか、という肩透かしから続いた、まるで非現実的な単語にシスティーナは間抜けな息を漏らした。

「は？」

テロリスト。それの意味するところはつまり、テロを行うもの――恐怖心（テロル）によって自身の要望を満たさんとする者、つまりは暴力。

彼らは、害する側の人間だ。

「で、此処に入った方法。守衛さんをぶっ殺してー、結界をぶっ壊して、そんでお邪魔させていただいてるのよ。どう？　分かった？」

その核心を裏付けるように続いたセリフに――いや、待て今こいつは何と――？

『――守衛さんをぶっ殺して』

殺、した？

殺した、殺した……死ん、だ？

なら、もしかして。

殺される？

とたんに襲い掛かる恐怖に、私は腰が抜けかかる。辛うじて持ちこたえられたのは、自身がフィーベル家の娘であるという自尊心と、普段の立ち振る舞いで得た地位を全うせんとする義務感故だ。

それが無ければ、当に震えてそこのクラスメイトに紛れ込んでいたに違いあるまい。私は、今更ながらに後悔を感じ始めていた。

持ちこたえなければ、威圧されてはならない、跳ね返さねば。

その一心で、『システィーナ』は怒鳴り声を上げる。

「ふっ、ふざけないでください！」

ふざけた状況への怒号として、それはとても平凡で、そして何時もの様にクラスを代表するような一声であった。

だが、だからこそ、それに対する返答もまた、テロリストの模範の様な一撃だった。

「《ズドン》」

頬をかすめて教室後部の壁を突き抜ける。青い空まで飛びだしたのは質量を持った放電現象――【ライトニング・ピアス】、軍用魔術だ。

鼻を僅かに擽るのは空気の焦げた様なプラズマの臭い。それは【ショック・ボルト】のそれより強烈で、エネルギーの籠っている事の証左であり、そして当たればその貫通力に関わらず血を焼き肉を焼いて骨身に届き、死に至らしめるだろうことを本能に理解させた。

「う、ぁ……」

へたり込み、床に尾骶を打ち付ける。見上げている男は一瞬、とてもつまらなそうな無表情を浮かべていた。だが、それを打ち消すように下品なまでの笑みを見せると、優しく、脅すように語った。

「んー、俺たちすっげぇふざけた奴らだからさぁ……あんまり五月蠅いと、殺しちゃうよ？」

それで、僅かに波打つ騒めきも収まった。痛いぐらいの静寂に満足そうに頷いたバンダナの男は、そのまま何処かに目配せした。

これまでが茶番だったみたいに、或いは私の時間が止められたように。トントン拍子に進んでいく話を、私は出来の悪い劇でも見るように俯瞰的に見ていた。現実味がな

い、現実逃避、或いは、心がついていけなくなったのか。
気付けばルミアは連れ去られ、自身は縄できつく縛り上げられていた。
その痛みすら、遠く感じながら。

ぼんやりとしていた私を現実に引き戻したのは、先ほど【ライトニング・ピアス】を放った方の男が自身に触れた時だ。乱暴に腕を掴み上げられ、立たされ、引き摺られ。震える声で何をするのかと問えば、はぐらかすような回答が返ってくる。
こんな状況で、行き付く結末など目に見えていた。先程まで観劇気分——ある意味暢気に思考を投げ出していた私は、思いの他早くその結論に行き付いた。
惜しむべからくは、それがあまりにも出来過ぎた展開だったからか、まだ現実味を取り戻せず、とりあえずと言った感じでのみ抵抗していたこと。
きっと、バンダナの男がもう一度脅せば、今度こそ人形のように体に力が入らなくなってしまうだろう予感を抱えながら、抱え上げられたままじたばたと藻掻く。
バンダナの男も鬱陶しく感じてきて、何もなければ一発掠めるように撃たれ、それで終わりだっただろう。女として大事な尊厳も、貴族として守るべき矜持も、学生として在るべき姿も、『システィーナ』として作り上げた気概も——全てが台無しになる。
何事も、なければ。

「ん？　人がいる、だと？」

曲がり角間際で顔を顰め、バンダナ男が呟いた。

此処まで呆然としていた私には、その言葉ですら耳を左から右へ通り抜けてしまったが、続く光景には流石にはっとした。

人がいたのだ。

バンダナ男――ジンのささやきは、曲がり角の廊下、ガラス窓越しに見えた人影を訝しんだものだ。そして、予想通りにそこに人が居たことに、彼は何の驚きも覚えなかった。人間である以上遅刻ぐらいはするだろうし、もしかすれば人払い担当のミスかもしれない。計算外は戦場の常だ。

だが私にとって、その光景は予想外も予想外で、脳味噌を殴られたように衝撃的に映った。テロリストの襲う学園で、一人遅刻して廊下で静けさに戸惑う少年。

――ああ、なんて主人公らしいことか。

好んで見る大衆小説に出てくるような、手垢がつき過ぎてむしろ絶滅しかけているほどの典型的（テンプレート）な展開。この瞬間だけ、比喩でなく、私は舞台に入り込んだ。

自身を、舞台に上がった役者か何かだと勘違いした。

蛮勇を振るったのは、現実味を失っている故のバカげた妄想からだった。理性ではそうではないと知っている人関わらず、心の奥底が、此処は舞台の様なもので、だからこ

そ命の危険はないと信じ込んでしまっていた。
謂わば現実逃避。そう片付けてしまえるものが、蛮勇を為す勇気を与えた。
「……っ、離しな、さいよ……っ！」
私は自身の役割を演じるために、与えられた勇気を振り絞った。

――ジンは舌打ちを堪える。
腕の中で藻掻いていた少女の抵抗が激しくなったのだ。だが余裕そうな面は取り下げてはならない。襲う側は、常に上位でなければいけない故に。
傍目には、単に抵抗を増したようにしか見えない。だが、ジンは彼女が正気を取り戻したのだという風に見えた。先程までの様な、とりあえずと言った風の抵抗とは質が違う。
ただ単に藻掻くのではなく、体の揺れや腕のズレを利用して本気で抜け出ようとしている。予想外の存在もいる此処で、それはジンにとって厄介な反応だった。
どうせならもう少し後、お楽しみの時にこの抵抗を見せやがれ……そう心中で毒吐いたジンは、素っ頓狂な反応をした少年にヘラりと笑って見せる。
さぁ、手っ取り早く済ませてしまおうと、そう決めて。この先に待つご褒美に思いを馳せて。

彼が非常勤講師に捕えられ、そして味方から見捨てられるまで。

あと――

＊＊＊

廊下一面を埋め尽くす、汚れた白。竜牙兵と呼ばれるその存在は、まだ二年生の私でも知るほど有名な魔術。

だが、此処まで大量に召喚するなど、有り得ない。

――現に、起きているじゃないか。

有り得ないことはありえないのだと、いつか誰かが得意げに語っていた。誰だったかは忘れたし、もしくは数多読んだ大衆小説の一文だったかもしれないが、その言葉が脳内にリフレインする。

「はな――」

「――マスター？」

脇でアダムとシャルが言葉を交わしていた。『はな』……？　何だろうか。『離れろ』、だろうか。それだとまるで、自分がこれを食い止めると言わんばかりの言葉じゃないか。

ああ、そうか。だからシャルは止めたのか、それが自殺行為に等しいから。
グレン先生（自分より強い人）が居る。任せておけばいいのに、と。
そう考えた自分が嫌になる。
だって、それじゃあ自分は唯の役立たずではないか。
それならば、蛮勇であろうと足掻く方が誇らしい。
私は、先の自分に酔っていた。
「逃げるぞッ！」
弾かれるように駆けだしたグレン先生に引き摺られるようにして、私もまた逃げ出した。
有難かった。腕を掴むこの痛みさえ、今は安心できる。あそこで逃げださねば殺されていただろうことは、背後の悲鳴が証明している。
けれど、無駄に自尊心ばかりの高い自分が、自ずから逃げることを選べるかというと、馬鹿らしいことにそれはＮＯだ。本当に、馬鹿らしい。身の丈を弁えない自尊程醜いものもないだろうに。
でも、私はフィーベル家の娘で。お爺様の孫で。だからこそ誇り高く在らねばならなくて。
本当に、本当に、馬鹿らしい。

何もできないくせにうだうだ悩む自分が、何よりも。

駆ける、駆ける、駆ける。その繰り返しに苛立って、床を踏み砕く様に乱暴に一歩踏み出す。ダンッと音が響き、そして足裏から骨を伝う衝撃に涙目になる。痛い。

その感覚が薄れていくと、今度は疲れすらも感じなくなった。あれほど重かったはずなのに、その愚鈍な重りが初めからなかったように、疲れを感じなくなっている。

まだ、頭の中が霧がかっている。息を切らし、荒い呼吸と共に失踪しているシスティーナの理性はそう判断していた。暇を持て余した理性は、背後に迫った死への対処を考えるのではなく、自己分析を始めていた。

今の段になっても、まだこれが現実だと思えてないのだ。死の恐怖はあれど、実際に死んだことは無い以上、きっと痛いんだろうなぁとしか思えない。今まで感じたことのある一番痛い痛みを想起して、怯えを為すぐらいしかできない。

喉が痛い、肺が熱い。瞼を汗がつたい、顔を振ってそれが目に入らぬようにする。

霞むのは視界か思考か、いつの間にか呼吸は乱れ、獣のように喘いでいる。息を噛み締め、無理やり整える。酸欠でますます朦朧として、けれど背後の危険は止まない。まだ、その軍靴の音が続く。

杭打つように、鎚振り下ろすように、重く、深く、その音は響いている。連なる足音は、着実に私たちを追い立てていた。

何段目かの階段を上り、踊り場でちらりと下を見た。どうやら竜牙兵は段差を上るのが不得手のようで、少しつっかえていた。

これなら逃げ切れるかもしれない。そんな希望が沸き上がり、前を振り向く。何故か先生たちはもう階段を上らず、廊下を走っていってる。

「ま、待って――」

必死に後を追うと、あることに気付いた。窓の外の景色が、高すぎるのだ。そして気付く。ああ、此処はもう最上階なのか、と。

この先はもう、特別教室か屋上へ続く扉しかない。所謂、行き止まりというやつだ。幾ら階段である程度足踏みさせられるからと言って、追いついてこれないわけではない。

これは、もしかして、チェックを掛けられたのだろうか。

「チッ……追い詰められたか」

やはり、グレン先生もそう思うか。此処は袋小路、逃げ道など無い。

小説ならばここらで主人公が起死回生の策を考え付いたり、奥の手を披露したりするものだが、流石に現実そううまくはいかないだろう。そろそろ、死ぬ時間が来たのかもしれない。

他人事みたいに、私は冷静だった。先生から声をかけられて驚いたのは、声を掛けら

れるはずもないと思い込んでいたからだろう。
「おい、白猫」
「白猫……私の事ですか？　どうしたんです、急に」
まさか、何かいい策でもあるというのだろうか。こんな、どうしようもない状況で。
まだ何か、案があるというのだろうか。
「俺らが此処で食い止める。お前らは奥へ先に行って……即興で呪文を改変しろ」
「えっ」
「グレンくん。申し訳ないんですけど、マスターに即興改変する程の才能は無いんですよ」
「マジかよ。才能の偏りどうなってんだ……仕方ねぇ、白猫、お前がやれ」
そう言って、グレン先生は拳を構えた。
って、え？　まさか先生――
「あの数のゴーレムを足止めするつもりですかッ？」
「ああ、そうだよ」
事もなさげにいうが、その額に冷や汗が滲んでいることは見て取れた。
幾ら格闘技が上手かろうと、先にテロリストに使った固有魔術（オリジナル）が魔術師戦で万能だろうと、それは全能ではない。

如何なる達人とて数十倍の数の有利を覆せることは無いし、切り札の固有魔術でもあのゴーレムの群れをどうにかすることはできないのだろう。

前者は純粋な事実であり、後者は気絶間際のアダムが魔術道具を（恐らくは）起動させてテロリストの足を止めたところからの推測。

封殺――起動の阻害という事は、恐らく既に発動された魔術には効果が無いのだろう。現に、先も【マジック・ロープ】や【スペル・シール】の解除は手作業だった。恐らくはアダムの魔導器もその類で固有魔術の影響から逃れ、そして竜牙兵もまたそうである。

この推測に、大きな誤りはないと直感した。顔色を伺えば、体調不全や事前準備が足りないわけではないと読み取れるから。そこに、長年フィーベル家の娘として振る舞い、身に着けた社交性が生きた。

システィーナとアダムの間の差異が性別以外にあるとすれば、その社交性も一つだろう。アダムには無い対人関係の経験は、この急場でグレンの固有魔術の詳細を語られずとも察することを可能にさせた。

グレンからそれを取れば、正真正銘の三流魔術師。どう足止めするつもりか。

いやそもそも、なぜ足止めしようとする？　私を守って何の意味がある？　くだらない英雄願望か、大人だからとかいう責務か。

私に守るほどの価値が無いのを、この人は知らないのだろうか。どうせみんな死ぬというのに。

うだうだと悩み続けるシスティーナに、グレンは迫りくる軍勢を睨みながら言った。

「別に勝算が無いわけじゃねぇ。お前は先に行って、魔術を即興で改変しろ。足止め用にだ。アダムはその補助」

「分かりました」

「……ところで、灰錠とかねぇか？」

「黒鍵なら三頁分ありますよ。というか灰錠は死者特攻の武装なので、別に竜牙兵相手に装備してもさほど意味がないかと」

「誰がそんなゲテモノ使うかッ！　いや、無いよりましだろ。てか手が痛てぇ」

「ははっ、頑張ってください」

「てめぇ……」

羨ましい気持ちと困惑する気持ちがいっしょくた……3：7ぐらいでごっちゃになる。システィーナからすれば、その迷いのない即答は覚悟の強さで、自分の嘘っぱちなそれとは違って見えた。

実際が知っていた流れをなぞるだけの惰性だと知る由もないのだから、こうして二人は順調に苦手意識を持つようになる。憎悪とまではいかず、嫌悪とも言えず、鏡に映っ

た自分を見る様な苦々しさを、少し努力していれば得られるかもしれなかった姿を、互いの内に見て。

「――それで、白猫……いや、システィーナ。

『出来るか』？」

そして、この場では。システィーナは僅かに湧く羨望、そこから生じた嫉妬で、自身の退路を断つ。

「で、出来ますっ！」

「うしっ、いい返事だ。

……じゃあ後は任せたぞ！」

手を引かれ、奥へ奥へと駆ける。十メートルほどで屋上へ出る扉の前に付いた。

此処までくれば、時間も十分だと判断したのか、それともこの奥へ行く必要はないと判断したのか。アダムは立ち止まり、私に言ってきた。

「じゃあ、始めよう。改変するのは【ゲイル・ブロウ】で、足止め用なら持続時間を長くして、威力は無くてもいい。あの数ならなるべく広範囲に、後は……ああ、そうそう。節構成は三節程が良い」

「ちょ、そんな、一気に言わないでよ。大体、アダムは？　あんたもそれくらい……」

「悪いけど、僕はそういうのには向いてないんだ。ちょっと組み直すのにも時間がかか

る設計でね」

設計？　ちらりと自身の左手首を見るアダムのその視線を追う。その先にあるのは、肌に吸い付く様に目立たないリストバンド。よく見れば、僅かに光沢が見えて、そこそこ品の良い装飾もなされている。

何だろうか。それは、システィーナの目からは到底装身具には見えなかった。むしろ、暗器とか肌着とか、そういう『見せるべきではない』様なものと同じようにつけられていると、そう感じる。

そんな些細な違和感は、けれど偶然にも畳みかけてくるアダムによって潰された。

「覚えきれなかったならもう一回言う。だが、これは今はシスティーナにしかできないことだ。やってくれ。

その……期待してる」

「……っ」

期待してる。その言葉を聞いて、システィーナは後に引けなくなった。

君ならできる。やってくれるよな。いいや、やるべきだ。強迫観念の様な添付は、自身の脳内が生み出した幻聴に過ぎない。だが、そういうニュアンスがあったのは否定しようのない事実だ。

その追い込むような、むしろ攻め立てる様な言葉が……システィーナの背を押した。

その痛いぐらいに無責任な期待が、信頼が、『システィーナ』を肯定しているように感じて。

「分かったわ。じゃ、始めるからアドバイスはよろしくね」

その代わり、貴方には何ができるのかしら？

そこには無意識にも挑発的なニュアンスが籠っていたと、後になってシスティーナはルミアに言った。直後に弁明するように、そう考えた理由を続けて。

詠唱の改変等、よほどの理解が無ければ余人の介入する余地はない。グレン先生から教わったように、魔術は人の心理を突き詰めるもので、詠唱はそれがより顕著に表れる作業だ。言葉選びにテンション、魔力の調節、テンポ等、公式はあっても答えが無いのが魔術なのだ。

故に、まぁ、出来るわけもないだろうと。

侮っていたのだ、あのグレン先生の最初の問いに応えられたアダムを。

「まぁ、そのくらい（アドバイス程度）ならできるよ。じゃあまずテンポを決めてしまおう」

そして愕然とした。胸の内を解剖されているかのように、結果が見えているかのように、アダムの指摘が的確であったから。魔術が自身の心理を突き詰めているというのなら、よもやアダムには人の心が読めているのではないか。

そんな妄想に揺れながらも、何とか言葉を選び、語調を安定させ、意識を束ねて改変

する。始めて見れば、手慣れた風属性であってもその作業が恐ろしく繊細であると実感し、けれど無理なことではないと確信していく。

「――出来たっ！」

「よしっ！　それで、詠唱は何節だ!?」

意識の外に居たグレン先生の怒鳴る様な返答を聞き、漸く竜牙兵の大群が目の前にまで迫っていることに気付く。体に圧し掛かる倦怠感と、額を伝う汗。相当に疲れていることを自覚しながら、同時に心のどこかには余裕さえあった。それはアダムが自分に向けてきたように、やるべきことをすればあとは何とかしてくれるだろうという信頼か。

「三節ですっ」

「三節か……なら俺の合図と共に詠唱を始めろ」

「分かりました」

タイミングは完璧に噛み合う。全ての竜牙兵が一列に並んだ頃合いで詠唱が完成。図ったかのようなタイミングだ。グレン先生は、教えてもいない詠唱速度を察したのだというのか。

もしかして、優れた魔術師は大抵こんなことができなければいけないのではないか。

そんな偏見を植え付けられた昼頃である。

更に植え付けられた偏見の上から畑を駄目にする勢いの鍬が降り下ろされるように、

目を剥く様な事がグレン先生の手によって起こされた。
足止めされる竜牙兵。少し漏れてきた個体を銀色の球が押し返し、魔法を維持する私が息を吐けるようになる。
状況は好転していないが、悪化は止まった。では後はどうするのか。

問いも口を突いて出てくれなかった疑問への答えは詠唱で返される。
通常では異例の、七節もの詠唱で以て。
―我は神を斬獲せし者
――我は始原の祖と終を知る者
朗々と詠い上げられる、存在の宣言
我こそは超越者であると世界を欺く祝詞
―其は節理の円環へと帰還せよ
―五素より成りし物は五素に
――象と理を紡ぐ縁は乖離すべし――
その魔術は余りにも有名だった。少し魔術に詳しければ――いや、街の子供らですら知るだろう程に、それは伝説的で代表的な、魔術。
それこそ初めの二節を聴くだけでその正体に行き付くほどに、有名に過ぎた。

「――《いざ森羅の万象は須らく此処に散滅せよ・遥かな虚無の果てに》――ッ！

ええい、ぶっ飛べ有象無象！　黒魔改【イクステンクション・レイ】――ッ!!」

喉も張り、裂けそうな程の怒鳴り声。優美優雅な詠唱とは程遠いそれは、始原の暴力を生み出す。何もかもを蹂躙する、荒々しい光の帯を招来した。

システィーナの柔らかに堰き止める風に続き、虚数エネルギーの唸りが吹き抜ける。全ての有質量存在を元素まで分解するその光は、濁流のように荒れながら、魔術防護の掛けられた学院の壁を障子紙の如く駆け抜けた。

まるで衰えぬ勢いは、しかしそのエネルギーが底を尽きたことにより白昼の夢のように掻き消える。後に残るのは、汚す者の居ない清涼な風のみ。

イクステンクション・レイ。

世界に一人しか使い手のいない筈のそれを、グレン先生は足止めされた竜牙兵らに打ち放ったのだ。

代償としてグレン先生は真っ青になり、しかし竜牙兵らは塵も残さず消え失せた。恐らくはマナ欠乏症ではあろうが、その程度の消耗であの御業を再現できるなら安いものだろう。

何せ、『神殺し』の魔術だ。命と引き換えにしてようやく等価とすら言える奇跡は、たかがこんな場所で披露された。

「だ、大丈夫ですかッ!?」
「これが大丈夫に見えたら病院行け……っ」
この人は何回私を驚かせば気が済むのだろう。
……もうシャルがじつは殺人鬼だとか言われても驚かない自信がある。
慌てて駆け寄ったように見えるシスティーナだが、実は割と余裕があるのかもしれない。心中とは言え、こんな冗談を紡げるのだから。
憎まれ口にも力がないし、それほど消耗しているのだろう。
なら、応急処置でも癒さなければ。白魔術は苦手だが……。
そう考えるシスティーナは、吹き抜けの廊下に人影を捉えて血の気が引く。
まだ、敵がいるというのか。
もう少し冷静なら、心に余裕があれば、様子を見に来た生徒か、或いは異常を感知した衛兵なども可能性に上がるのだろう。テロリストの襲撃に、強姦未遂、全力疾走の後に即興改変、余裕の無さがそれらに至る可能性を塞いだ。
だけれども、それは考え過ぎなどではなく。余裕の無さが転じて正答を与えたのか、もしくは学生以外居ない筈の校舎では違和感がありすぎるほどの黒コートがその即断を許したのだろう。
「まぁ、んな暢気なこと許してくれるほど、甘い相手じゃねぇよなぁ……チッ。すいませ

ん、シャル――」

「【イクステンクション・レイ】まで使えるとはな。少々見くびっていたようだ」

「うーん、強キャラ臭がプンプンしますねー、マスター。どうします？」

「どうしようもないだろ。いや、それよりも……」

確か、あの男は――そう、あのバンダナの男にレイクと呼ばれていた男だろう。

傍らには五本の剣が浮いている。材質は分からないが、重力に反し続けている様子を見るに、アダムの銀色の球の様な魔導器の一種なのだとは推測できる。

またしても、グレン先生の切り札が通じない敵。

これは、もう、典型的な窮地――

「……心のゲオルギウス先生が叫んでる。

『汝は竜、罪ありき』と……っ！」

――何言ってるんだろうか、こいつ。

私は恐怖を忘れて真顔になる。奇しくも、それは緊張を解くのに最良の薬で。

そこから先はもう目まぐるしかった。グレン先生に【ディスペル・フォース】の使用可能数を聞かれて、答えて。突き飛ばされて、屋上から落ちて――

――ほんっとうに、死ぬかと思ったんだからねっ！

ああ、でも。一つだけ。
アダムが戯言を吐いた時、なんでか黒コートのレイクって奴が顔を顰めたのよね。
見間違えかしら。まさか、図星だったりしないわよね。
というか、ゲオルギウスって誰よ。うちの学院にそんな人、いたっけ？

＊＊＊

システィーナが屋上から突き飛ばされた後、どうしようか迷っていた僕はシャルロットに抱きかかえられてシスティーナに続くことになった。
いや、仮にも元同僚だろう？　驚愕したのは言うまでもなく、顔を見つめればにっこりと笑顔を返された。可愛い。
違うそうじゃない。先生は良いのか、と聞けば、シャルロットはグレンくんなら大丈夫ですよ、と返す。
確かに主人公補正が効いてるなら、こんな序盤で終わることは無いだろう。打ち切りとかでもなければ。だが、飛び降りることに欠片の躊躇もなかったな？
確かに、僕は足手まといなのだろうが……。
そこで、中庭の木に盛大な被害を与えながら花壇を体中で満喫していたシスティーナ

が起き。

「私、先生の所に行ってくるッ。アダムはそこで休んでなさい！」

それだけだった。

ついていく気も起きない。自分が行っても、グレン先生の勝利に貢献することは無いと確信していたのもある。　いや、単にあのレイクという男が怖いのかもしれないけど。

意気地なしめ。

自分の不甲斐無さに、落胆すら烏滸がましい悔しさを覚えて溜息を吐く。敗北感を覚える。

こんなところで仰向けになっている自分と、戦場へ駆けるその姿を見て、恥ずかしくなる。

もう、例え心中でも馴れ馴れしくシスティーナと呼ぶのは分相応だ。前の様に、『システィーナさん』と仰ごう。

「ああ、ほんと。あいつ、嫌いだなぁ」

そんな、自己嫌悪が紡がれた。妬む自身を蔑んで。

システィーナさんは、何処か自分と似てる気がしたのだ。無駄な努力とか、空回りした結果とか。

グレン先生の改心だって、結局はルミアさんのお陰が大きいだろう。だから、やめればいいのにとか思って、苦々しく思うのだ。

「なんで嫌いなんですか？」

「あいつ、一生懸命になれる奴だからな」

これがカッシュなら、ギイブルなら、或いはこんな気持ちにならなかったのだろうか。

他人が努力する姿を見て、黒い泥の様なものを胸に感じるのは、気持ちいいものじゃないというのに。

なのに、どうしても考えてしまう。あんなに一生懸命になれる様な人間だったら、どれほど良かっただろう、と。

自分と見比べて、死にたくなるほど恥ずかしくなる。

目を閉じて思い返すのは、天才と称えられた少女の努力だ。彼女がクラスで一位の成績を取るのは、決して才能のみではないと、誰もが知っている。

息を吸う様に、遊ぶように、心底楽しそうに努力をする姿はみんなが見たことのある姿だ。きっと、初めの頃のグレン先生への説教も、ウザがっていた奴は少ない……居なかったんじゃないだろうか。

彼女の魔術に対する真摯な姿勢は、誰だって認める所なのだから。

そんな彼女が、僕は大嫌いだった。その姿を見る度に自分が嫌になって、息が詰まり

そうになって。
酷い話だ。理想を映す鏡でも見せられた気分だと。
ああなりたいのに、ああなろうとしない。そんな自分が、死ぬほど嫌いで、喉を掻き毟って死にたくなるくらい――
「は、ぁぁああ――――」
――盛大に息を吐き、思考を打ち切る。
いつもの自己嫌悪のループに入りかけていた。
結局のところ、僕は自分自身が大嫌いなのだ。
別にシスティーナが居なくても、努力している別の誰かの姿を見てこんな状態に陥った事だろう。そんなくっだらない自分が、心底嫌いだ。
でも、今はそんな悠長にしていい状況でもない。だって非常事態だし。
僕は立ち上がり、こういった。
「行こう。先に、露払いでも済ませに」
「はい。仰せのままに」
シャルロットは相変わらず、微笑んでいた。

＊＊＊

グレンが起きると、そこが気絶前の青空見える屋上ではなく、清潔感ある医務室であることを知った。上体を起こして見渡す前に、薄眼で開いた視界で状況を確認するのは職業病だろう。

身を起そうとすると、胸元の僅かな重さに気付いた。それは、グレンを治療するために限界まで魔術を行使したシスティーナが、グレンを枕に暫し微睡む姿。

マナの使い過ぎによって意識が遠くなる感覚は、気絶のそれにも似ている。グレンはシスティーナの体を気遣い、身を起さずに体を休めることにした。

そこにポケットに入れていた通信用魔導器が鳴る。鉄と鉄を打ち合わせた様な、甲高い音だ。

ズボンから宝石の片割れにも見えるそれを取りだして、鏡面程滑らかな方を耳に近づけた。

「俺だ。遅いぞ、セリカ」

『――グレンか！　良かった、心配したんだぞ……。何度呼び出しても出ないし……』

「すまん。少しトラブってな」

『……まさか、敵とやり遭ったのか？』

声が震えて聞こえる。心配されているのだと、ひしひしと感じた。

この歳にもなって心配をかけるとか、ああ、恥ずかしくてやってらんねぇなぁ。
オトコノコの強がりで、努めて何でもないかのようにあっさりと報告をする。
「ああ。おかげでこっちも進展した。敵の魔術師を、一人殺した」
『……そうか……』
気丈に振舞っている傍らに、そんな消沈された声を聴かされるのは辛い。
自分は何ともないのだと、そう思わせるために重ねて報告を続けてやる。
確認した魔術師は無力化し終えたこと、一人大分怪我した奴がいる事、居合わせた元先輩が相変わらず訳の分からない人であるという愚痴。
そんなことを離し終えれば、向こうも本来の調子を取り戻し始めたようで、転移ができないこと、魔導士団が動いたことなどを報告してくれる。これで、後は時間の問題だ。学院の結界は書き換えられているために、今はそれの解除に苦労しているらしい。
確かにあれは、一目見ただけで「うへぇ……」となるほどに複雑でち密で面倒な代物だった。ざっと見ただけでも百数桁の数字式暗号、立体回路、変圧式の開錠機構……あれを正攻法で破るのに、自分なら何日かかる事か。例え数百万渡されたところで釣り合わないと跳ねのける自信がある。
「やっぱ宮廷魔導士団でも簡単には解除できねぇのか」
つくづく懐を漁っていてよかったと思う。あれが無けりゃ、アダムとシスティーナは

今頃……。

『ああ。はっきり言って、今回の仕掛人は天才だ。シャルロットのマスター……アダムだったか。空間系におけるアイツみたいなものだ』

「お前がそこまで言うほどなのか」

静かに、システィーナを起さない程度の声で驚く。セリカは自分の知る限り、一番の魔術師だ。その彼女が称賛するというのは、それこそ並大抵の天才ではない。

その分野の第一人者と呼ばれる程の才能、それを指してこそ、セリカは褒め称えるのだ。転じて、今回の仕掛人の力量は、空間系の分野で自分の知る誰よりも上に来るほどのものだという事。

『そうだ。私なら組もうとも思わん術式を組みやがって……。アダムと言い、今回の仕掛人と言い……最近は豊作なことだな、ええ?』

「おいおい、拗ねんなよ」

『拗ねてなんかいないよ。もとより自分が魔術を極めているなどと思い上がったことは無い。だが……こうも見せつけられると、流石に自尊心に触るな』

拗ねてんじゃねーか。苦笑して、言葉を飲み込む。

「ところで――」

『ハズレだ。学会に参加して――』

話し合いは続き、グレンはその最中で仕掛け人の正体を掴んだ。
「そうか、まさか――。っ、セリカ、今何時だ？」
『は？』
「良いから答えてくれ。俺のは壊れちまったみてぇなんだ」
『……十七時を回ったあたりだ。それがどうかしたのか』
五時間も寝ていたのか……！
それならもう一刻の猶予もない……いや、下手したらすでに、仕掛け人は逃げきっているかもしれないッ。
「なぁ、セリカ。本当に転移法陣は全部壊されちまったのか？」
『さっきからそう言って……いや、そうか！
だとしたらもう時間はないぞ。私なら、もうじき書き換えは終わらせられる！』
「だよなぁ……！」
通信を切り、跳ね起きようとする。自分が今なぜ寝たまま通話していたかを忘れたその行動は、傷口を責めるのと同時に少女を眠りから起こした。
「ん、ぅん……」
やっべ。
視線の先で、システィーナが身を捩りながら目を覚ます。

その隙にグレンも上半身を起こし、『よう、起きたか』と声をかけ、夢現と言った様子の彼女の返答を聞いた。

うつらうつらとしながらの返事は、普段の姿と大いに違って可愛げが見えた。

彼女がしょぼしょぼとした目をこすりながら、自身が包帯を巻いた相手が目を覚ましていることを理解するのに、数秒かかった。

「起きたか。無事そうで良かっ――」

「――先生ッ」

「グフッ」

抱きつくシスティーナ。傷口に頭が当たって、呻き声を漏らす。けれど『離れろ』とは流石に――いや、言おうとしたが、痛みに邪魔されて――言えず。

暫く離れないシスティーナを見て、グレンは頭を掻いた。この非常時に、こんなことをする暇など無いだろうと、そう焦る自分を押さえつけるように。

「それで、一体何があったんだ？」

「あ、はい、そうです。実はその――」

システィーナは、自身の凡その出来事を順に説明した。流石優等生か、短く、的確に纏められた情報は、するりと頭に入ってくる。僅か数分で状況を把握した。

「ルミアが連れ去られた、ねぇ……」

何よりも見過ごせないのは、そこだ。『天の智慧研究会』が何故彼女に目を付けたのか。

フィーベル家の居候で、システィーナの親友。それだけの存在の筈だ。あいつらは屑だが、馬鹿ではないし間抜けでもない。だから今までさんざん手を焼いたのだ。

必ず、あの陽だまりのような少女を狙う理由があるはずだ。

だがそれは、今考えることでもない。きっと、連れ去られたルミアも仕掛け人と同じ場所に居る筈だ。そいつを見つけ出し、目的を聞き出せばいいだけの事。

身を起したシスティーナに離れるよう促し、保健室の床に降り立つ。マナ不足と貧血による眩暈が襲うが、ぐっとこらえた。

それを見たシスティーナは、ふと言われたことを思い出して懐からそれを取りだす。正体が何なのかは分からないが、きっと必要なのだろうと、何処かへ急ぐ先生に渡すために。

「そういえば……先生、アダムが先生にこれをって。使い方は先生が分かるそうなんですけど」

そう言って差し出されたルビーを見て、グレンは意外なものを見たという風に目を丸めた。

こんなところにあるだなんて思いもしなかったが、よくよく考えればアダムはこれの

制作者。あってもおかしくないし、自衛用にいくつか持ち歩いていても不思議じゃない。

どころか、むしろそっちの方が自然だ。

「これは……そうか」

「先生？　これが何だか、分かるんですか？」

システィーナが渡したそれは、アダムがシスティーナに預けた宝石だ。

血のように赤く、ガラスの様に透き通ったルビーをカットし、内部に特殊な魔術理論で以て魔力と術式を刻んだ宝石。

その内部は通常自然界で見られることのない揺らめきの赤光が滾々と揺らめいている。

それは、馬鹿みたいに高い材料で作られた魔晶石の代替品みたいなものだ。

本来の魔晶石はただ単に魔力を取り出すだけだが、これは違う。グレンがこの石の存在を知っていたのは、軍に所属していた時代に支給されていたからで、つまり、これには軍用されるだけの秘密がある。

「白猫。水を入れてくれ」

「は、はい。分かりました」

医務室の器具は実に多彩だ。特に、此処の主の事を想えば、錠剤を呑むためのウォー

ターサーバーが設置されているのは自然なこと。自然なことになっちゃダメなんだけれども。

コップに入れられた水を受け取ると、グレンはもったいなさを感じながら宝石を口内へ放り、そのまま水で流し込んだ。

「ちょ――先生っ!?　何してるんですかっ？」

システィーナの反応もむべなるかな。宝石は愛でるものであり、口にするものではない。胃酸でも解けないのだから、腹を下すどころの騒ぎでは済まないだろう。

だが、これでいいのだ、この石の使い方は。

嚥下されたルビーは、本当の血の様に、刻まれた術式に従って溶け、籠った魔力が吸収されやすい形になる様に変化する。偽りの血は熱の有る血と合流し、不足を補う。

これこそが、アダムの渡した宝石の使用法。宝石魔術の理論を転用した、最高級にしてグレンの元上司が彼を欲しがった最もたる理由の魔術礼装。

即効性と、回復量。何より『誰でも等しく効果を得ることができる』という特性から、魔晶石の上位互換とも呼ばれる消耗品だ。その分、原材料費も（恐らくは）魔晶石の上位互換だろうが。

「ああ、糞。もったいねぇなぁ」

そう歯噛みしながら、乾いた体に水が染み渡る様に魔力が補充されていくのをグレン

は感じた。

性質上、過度に興奮していたり、砂漠などの乾燥状態での使用は難しい。だが、僅かな造血作用に、体力の回復、体調の調整までしてくれる至れり　尽くせりな消耗品。出すところに出せば、グレンの月の給料を余裕で上回るだろう。

非常勤とは言え、一つで帝国学院の教師の月給を上回る値になる。もしかして、ああ見えてアダムの奴は白猫以上の金持ちなのでは、と。ふと気づいた。

――いや、なわけねぇか。

高価なのには理由がある。おおざっぱに見ても予測できるだろう原材料費を考えれば、到底大金持ちとは思えない。裕福ではあるのだろうが、流石にフィーベル家のような貴族ほどでは無い。

やはり、集るなら白猫だ。確信は小さな笑みを生んだ。今度から迷惑かけられた詫びとして、毎食集りに行こう。

そんな情けない決意。

笑みというよりは下衆笑いだった。

全く、彼らしい。

＊＊＊

「……あ」
「どうしました？　マスター」
「いや、あのテロリストの自動で動く剣さ、鹵獲すれば月霊髄液の自立制御に役立つんじゃ……」
「そうなんですか」
「……あああっ！　ちっくしょう、僕の間抜けめッ！　てかあの魔術使えるんなら触媒だって持ってただろうに……！　もったいないことを……っ」

ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）　六話

後日譚

「お、何だお前等、休日にこんなところぶらついて」

グレンが何時もの様になけなしの給金を賭け事につぎ込んだ（朝）帰り。予定調和の様に全額スって、数日後の給料日までゼロ円生活が確定したことを嘆いていると、見覚えのある三人組を見かけた。

白猫ことシスティーナに、大天使ルミアに、元同僚のシャルロット。

シャルロット一人が買い物袋を持っているところを見るに、買い物途中のシャルロットにばったり遭遇した二人が彼女に同伴しているといったところか。買い物袋は既に満杯な為、買い物は既に済んでいるのかもしれない。

「あ、先生。こんにち……大丈夫ですか？」

「先生じゃないですか。どうしたんですか」

「グレンくんですか。丁度いいので、荷物持ちしてくれませんか？」

ルミアはグレンの目の隈を見て取り、心配した。とはいえ、グレン相手にそんな優しい態度をとるのは、この場では少数派だ。システィーナはそれがいつもの事であるかの

ように接し、シャルロットに至っては荷物持ちを任せようとする。まだ買い物を続けるのだろうか。

グレンは学生服とは正反対に露出の少ない、町娘を思わせるシャルロットの私服を見て呟いく。

「……馬子にもいしょ」

「グレンくん？」

石畳が罅割れる。ピシィ、というよりバキッ、と。

「何でもないっす。はい」

グレンは背筋をピンと伸ばして敬礼した。こめかみと背筋を、冷や汗が伝う。

何故見え透いた地雷を踏みぬくのか。

呆れ顔のシスティーナが街道の修理代って案外高額だったわよね、と思いを馳せていると、ルミアがシャルロットを宥め始めた。気を取られて居なければ、放っておきなさいとでも言っただろう。

「まぁまぁ、シャル。先生も、女の子にそんなことを言っちゃだめですよ？」

「はい、スミマセン。以後気を付けまーす」

「先生？」

「っす」

教師と生徒という関係だが、実年齢はさほど遠くなく、しかも今は学院外。
こうしていると、腹違いの姉弟がじゃれ合っているようだ。
グレンが弟だ。精神年齢的に。
まぁ良いでしょう。シャルロットはそう言って、話題を変えた。
「さっき偶然二人に会いまして、荷物を持って立ち話しも何なのでお家に誘ったんです」
それを聞いて、グレンは言った。
「へー、面白そうじゃねぇか。俺もつれてけよ」
シャルロットの家……ということは、アダムの家ということでもある。
それはつまり、技術者として超一流の腕を持つ魔術師の家だということだ。
運が良ければまだ世に出ていない論文やら模型やらが見れるかもしれないし、或いは自作の礼装の解説を聞いて知識を増やせるかもしれない。
そんなまたとない良い機会だ。
勿論、グレンの脳内には『あいつの工房にあるもん、一つぐらい譲ってくれればいい金になるな』とかしかないだろう。或いは、『譲ってもらう』でもなく『パクる』かもしれない。何かを学ぼうという気は恐らくない。
だがアダムの工房を訪れることは、システィーナとルミアにとってはいい刺激になることだろう。そこにグレンの解説が加われば二人の勉強も進むはず。

そんな打算もあって、シャルロットはグレンを家に招くことを承諾したのだ。代わりに荷物持ちをすることと引き換えに、と楽をするついでに。重くはないが邪魔なのだ。

なんだかんだ、グレンはシャルロットに頭が上がらない。

尚、買い物袋は家に入る直前にシャルロットが受け取った。聊か強引に。

それにグレンは疑問符を抱いたが、直後家主の対応に納得する。

ああ、いちゃついてんなぁ……。

＊＊＊

シャルロットが外出して短針が一回りするくらい。買い物を任せた彼女が帰ってきた。

蝶番の軋む音を聞いて、おや、と思う。普段より早い。

「ただいま帰りましたー。マスター、お客さんですよー」

「お邪魔しまーす」

「お、お邪魔します」

「邪魔するぞー」

玄関の方で、聞き覚えのある声が聞こえた。

何してんだ、あの三人。
そう呆れるとともに、シャルロットが早めに帰ってきた理由に目星がついた。
あの三人が一緒に居たから、いい寄ってくる男や世間話を始める主婦が寄らなかったのだろう。
一応、家主として歓待するべく椅子から腰を上げ、工房兼自室から廊下に出た。
正面にシャルロットと学院の有名人三人組が見える。
「お帰り、シャルロット。荷物は預かるから、三人を客間に案内してくれ。
三人も、いらっしゃい。でも滅多に客が来ないもんだから、大したもてなしはできないぞ」
「構わないわ。急に押し掛けたのはこっち――」
「おうおう、茶菓子ぐらいは出せよ？　因みに俺、クッキーとか食いたいな」
「――ちょっとは遠慮しなさいよ、アンタっ！」
あはは、と苦笑するルミア。苦労人ポジションが板についてるな、と思った。
「はいはい、今から作り始めたら一時間くらい待ってもらうことになりますよ」
「え、マジで出してくれんの？　……ああいや、つかお前が作んのか？」
「何もこいつの要望を聞かなくったっていいのよ、アダム」
「客をもてなすのは家主の務めだし、準備もあるからな。できなくもない。というか、う

ちの炊事は分担で担当ですよ」

「へぇ、流石は保護者（マスター）だな」

はい、荷物持ってくよ。ありがとうございます、マスター……あー、からだがー。

おっと。

シャルロットはわざとよろけ、まるで荷物が重かったとでも言う様に胸に倒れ込んでくる。サーヴァントがこれくらいで体幹を崩すわけがあるまいに。だが倒れないように抱きかかえると、シャルロットの顔が目の前に来た。

わ、とルミアさんが赤面する。僕はそのまま、掬い上げるように荷物を受け取った。手と手が重なり、シャルロットの手が抜き取られる。

シャルロットが渡してきた買い物袋を受け取り、リビングへと向かった。

それじゃあ、ゆっくりくつろいでいってくれ。そう言い残して。

「さーて、どのお茶出すべきか」

茶棚には数種類の茶缶が並んでいる。紅茶に拘る男ってかっこよくない？　と考えたところ、色々凝り始めたのが理由だ。シャルロットは褒めてくれるが、彼女は絆レベルの関係で聊か僕に盲目的なきらいがある。

システィーナさんとか貴族的で舌が肥えてそうだし、批評でも頼んでみようか。

手を伸ばしたのは、一番扱いに自信のある茶葉。蓋を開けて匂いを嗅ぐ。

うん、悪くない。お湯を沸かして、早速紅茶を入れる。自家栽培した茶葉で緑茶も作れるが、たぶん彼女らの口には合わないだろう。自分でもなんか不味いって感じるし。

「……あ、天使さん、おはよう。今はお客さんが来てるからね」

茶缶を抱えたまま、眼の前を過ぎった釣り鐘型のナマモノへ朗らかな挨拶をかける。

ルージュの口紅を引いたような唇は、人のそれよりも何倍も大きい。今にも頭を丸のみにされ、ギロチンのように首を噛み千切られるのではないかと恐ろしくなる。

しかしもう日常に溶け込んで十数年の付き合いだ。彼女（自己申告）にシャルロットの物ではない意識が存在するのは知っているし、それが怪物や異形の様な危険なものではないとも知っている。

気付けばそこに居て、頼めば家事を手伝ってくれる。ブラウニーの様な不思議なナニカであるだけだ。

大体、魔術なんてものがある世界だ。どこぞのように歴史が焼かれたり、星が滅んだりしてもないなら驚くに値しない。

アダムは意外と図太いのだ。

「あ、ちょっと冷蔵庫からクッキー生地を取ってくれない？

……うん、これこれ。ありがと」

冷蔵庫から作り空きしていたクッキーの生地を取り出して貰い、それを自然解凍す

る。

天使さんの頭（と思われるところ）を撫でてやると、その大きな唇がニヤリと弧を描く。

やはり不気味である。

それはどうしても否めない。

「……あ、お湯出来た」

薬缶から蒸気が噴き出す。

それを見て、クッキー生地に包丁が通る硬さになるまで待つ間に、先に紅茶も飲んでいてもらうことに決めた。

お客が来るなんて滅多にないことだが、これからはお茶菓子を常備した方が良いだろうか。シャルロットと暮らしていると、三時のおやつは作り立てばかりになるし……女子ってホント、甘いものが好きだよなぁ。サーヴァントとは言え、受肉すれば流石に太る気がす――あ、毎回自分で買い出しに行くのってまさか。

……うん、それはさておいておこう。ちょっと太ったところで、シャルロットはシャルロットだ。

四人分のティーカップとポットをトレイに乗せ、リビングの向かいの客間に向かう。

尚、天使さんはいつの間にか消えていた。本当に神出鬼没だ。ていうか何なんだろう

か彼女は。訳の分からない生態……生命？

ドアノブを捻って部屋に入ると、そこではグレン先生が面白そうな話をしていた。

「――っつーことで、【固有魔術（オリジナル）】ってのは外注されることまであるんだ。それができるだけの腕を持ち、尚且つ信用できる相手を見つけるのが難しいがな」

「そんなこともあるんですね。因みに、先生のは？」

「俺のは自作だが……っと、アダムか」

ティーカップを並べ、紅茶をそれぞれに注ぎ入れる。グレン先生がお礼を言ってそれに口を付けると、話に一区切りついたとして残りの二人も紅茶を飲んだ。

システィーナが感嘆の声を漏らしたことに少し気分を良くしながら、グレン先生に先まで話していた話について聞いてみた。

【固有魔術（オリジナル）】の外注……うまくいけば、新しい事業にできるかも知れない。

「そうだ、アダム。お前の工房見せてくれよ」

話を聞き終えた後は雑談に移行した。

解答し終えたクッキーを焼いて、それを囲んで談笑しているうちにそんな提案をグレン先生からされる。

「別にいいですけど、下手に触らないでくださいね。繊細なものがゴロゴロありますの

で」

丁度ポットに入っている分を飲み終えた頃合いだ。クッキーも残り少ないし、これ以上うら若い女生徒二人（ルミアさんとシスティーナさん）をもてなせるようなものはシャルロットとの駄弁り以外思いつかなかった。

見られて困る様なものはないが、小さな部品が散乱しているので作業机は余り触られたくない。そこ以外なら構わないけれど。

「アダムの工房……そんなのがあったの？」

「工房と言っても、自室と兼用してるけれど」

「何を作ってるのかな？」

「色々、としか言えないが……最近は時計だな。良い値段になる」

ピンと来ない様子の彼女らに、お金持ちは珍しいものが多いんだと言って部屋を出る。

背後でグレン先生が舌なめずりしているような気がしたけどそんなことは無かった。直接見たからわかるんだ。

僕の自室兼工房の部屋は、客間から少しだけ離れた位置にある。二人のささやきから察するに、離れにでもあるのかと考えていたのか。あれは倉庫なんだけどな。……っ

と。

工房の防衛機構を、そうと覚られないように解除し、三人を自室に招く。密かに聞こえたグレン先生の感嘆からするに、あの人にはバレているようだ。三人が帰った後、隠蔽技術にもう少し力を入れてみようか。

カチャリという開錠音に紛れて響く高音は、一秒の六十分の一にも満たない時間、廊下を駆けた。ドアノブの表面では指紋による生体認証が行われ、魔術的な鍵も解除される。

傍目には鍵を開けただけに見えるだろう動作の中でどれほどの仕掛けが解除されたのかは、きっとグレン先生にも把握されていないと思う。魔術師の工房はそこの主の心臓でもある。故に、防備は万全以上でなければいけないのだ。

「はい、ようこそ」

扉を開くと、システィーナとルミアの二人が驚きの声を上げた。それは設備の充実さへの驚きと、掛かっただろう資金への畏怖と、予想を超えた光景から来る賞賛の声と思われる。そこらに転がる道具の一つ一つが、値の張る分の品質を持つ高級品。目が肥えていれば分かるのだろう。

「へえ。中々本格的……というよりは、節操がないわね」

その言葉に、僕は振り向かずに苦笑いした。確かに節操がないと言われれば返す言葉

が無い。錬金術に蒸気機関に天文学に医術に礼装作成に魔術開発にｅｔｃ……。手がけている研究が多すぎて、広すぎて、どの分野も遅々としているのが現状だ。

「あの模型、何だろ。歯車かな」

ルミアの視線が向いたのは、大きめのサイズで設計しているパーペチュアル・カレンダーの模型。こっちの暦に合わせる為に微調整を続けてはや三年。なんか変な研究成果が出てしまったため、多分何処かで計算を間違っているのだと判断して資料を読み直しているところだ。

「ああ。時計仕掛けでカレンダーを作れないかって試しててね。その模型なんだけど、細かいところでズレが出てくるからまだ実用的ではないんだ」

約三十センチほどのそれを抱え上げると、細かく分解して機構の説明をする。

此処がこうで、あれがああで、組み合わさるとこんな風に動いて、そしてこうなると。そんな感じの説明を続けていると、システィーナが何かに気付く。

「あれ、でもそれって魔術でもいいんじゃないの？」

僕は頷く。全くのその通りだからだ。

「確かにね。魔術を使った方がもっと簡単だけど……どの世界にも、好事家はいるもんだよ」

この世界でも時計の類は普及している。とはいえ、それは魔術的な機構が組み込まれ

て居たり、異常な性質を帯びた素材などを使っているからで、僕の様な普通の素材で作り上げた時計というのはめったに見られない。そういう希少性から、僕の作る時計はそこそこ高く売れる。

とは言え、別に時計が普及していないわけじゃあないので、前世のそれに比べれば大分安い。高い時でも三桁リルにギリギリ届くくらいだ。低くても三十リルぐらいだけれど。

錬金術なんていうのはある世界なのだし、それを除いた人力での金属の加工技術があまり重視されていないのだろうと思う。いや、産業革命直後相当の文明レベルなのだから、これからに期待と言ったところだろう。

因みに、上流階級にも格差はあるが、年収は大体二千リルから四千リルぐらいだ。その中から使用人やら豪邸の維持費やら差っ引かれて、だいぶ自由に使える金が減るとも聞く。金感情は何処でも苦しい。

三十リルでも、流通や産業が階級ごとに根本から異なるから一概に低価格だともいえない。格差っていうやつだ。

特に街で見かける支出から確認できる収入と、上流階層との差がえぐい。シャルロットなんか、軍属の時は一度の任務で今の数か月分の生活費を稼いでたからな。

……そういやグレン先生、元とは言え軍属だったくせになんで金が無くてヒィヒィ

言ってるんだろう。
　ダメ人間だからか。退職金とかだけでもかなり貰ってると思うんだけどなぁ。一年で使い切ったのかな？
「それとは別の利点もあるぞ。白猫、魔術機構が組み込まれていないことによる利点、分かるか？」
「へ？　えーっと、量産できる、とかですか？」
　急に話を振られたシスティーナさんは、まさ普通な答えをした。いきなり流れ始めた授業の空気に、グレン先生の言いたいことを察した僕はごそごそと機材を探し始めた。比較の見本は彼女らが今持っているし、必要なのは計測器ぐらいか。
　あ、納品前の試作品がある。これを比較対象にしよう。
「……まぁ、それも正しいが……ここでは違うな。じゃ、ルミアは分かるか？」
「うーん、魔力による影響を周囲に与えない、とかですか？」
　僕が持ち出した計測器を見て、そんな予測を立てたのだろう。自信は無さげだが、正解の筈だ。
「そうだな、それが正解だ」
　やっぱり。
「ちょっと待ってください、先生。魔術機構が周囲に与える影響って、そんなのどんだけ

小さいと思ってるんですか？　授業で作る法陣ですら、計測器じゃあ誤差とされる態度の影響しか与えませんよ？」
「確かに一般生活中に使うならそうだがな、白猫、その考えは甘いぞ。授業用の計測器は元から誤差を想定されて作られている分、精度がひでぇんだよ。多分三年から扱うことにもなるかもしれねぇが、現場で使う計測器はもぅと繊細で高価なもんになる。
例えば……アダム」
「はい。これなんかだね」
僕が見せたのは、授業でよくみられる卓上置きのそれよりスリムで、手持ちであることを想定してる延べ棒状の機器。机にある本格的な奴は、使う前の手入れが面倒臭……今はまだ要らないだろう。
計器の目盛りを覗き込んだ二人は、授業で使うものとは違って指針が複数本存在しているのを見て目を丸くする。なるほど、とシスティーナさんが呟けば、ルミアさんが何かわかったの？　と問いかけた。
「ルミア、コレ、指針ごとに内部で使われてる素材が違うのよ。きっと。
多分一番長いのが普段授業で使うミリ単位。次のものがマイクロ、かしら。一番ちっちゃいのは分からないけれど、もっと小さい単位なんだと思うわ」
「正解だ。その一番小せぇ指針はナノ単位。小数点七桁から九桁までを計る目盛りだ。

目が痛くなんだろ？

最も、そこを使う機会なんて殆ど存在しねぇけどな。こいつみてぇに個人製造でもしなけりゃ、触れることもないだろうよ」

システィーナさんの口から単位が出てこない姿を見て、つくづく前世の豊かさを噛み締めた。学園ではなのという単位など出てくることもない。せいぜいが図書館の奥に放られている論文の幾つかに、その単位が用いられているのみだ。

一般的でなさ過ぎて、存在を知る機会もない。ネットサーフィンなどで無駄な時間をこさえることも、時には利点に繋がるのだ。

「基本的にこの計器を使う場所っていうのは、魔力濃度の調整設備が整っていない個人工房が多いんだ。

塵より遥かに小さなズレが信頼を水に帰すような仕事だからね。その日その日でちゃんと環境を確認して作業しないと、連結部品造ってたはずが魔力貯め込む性質を得てしまった、ってことにもなりかねない。

それがどんな危ない事かは、先生にこの前聞いたよね」

……少し、知識で優位に立てているのが心地よい。

グレン先生の説明に捕捉を入れ、具体的な例を示す。実体験から来るそれは、同時に体の古傷を疼かせる。

あれは痛かったなぁ……。

「……確かに、言われてみればそうね。幾ら技術があっても、実験用の計器じゃ細かい機構なんて作れそうにないもの」

「そりゃあね。あれで測れるのは余程魔力が濃くない限り、花弁程度の大きさが精々だよ。

それでもいろんな条件で大きな誤差が生じるし、とてもじゃないけど実用できないかな。まぁ、単純な大型機機器の調律とかならあの位の精度でも構わないけど」

まじまじと見てくるので、変な扱いをしないと信頼して手渡す。調整摘みやレンジ切り替えのダイヤルや位相切り替えのスイッチとかがついてるけど、基本的には学生の実験用の計器とさほど変わらない。

ただ少し、機能が多いだけ。

「ごちゃごちゃしてるね」

「うん。慣れるまでが一番大変な道具だよ。慣れれば凄く便利なんだけどね」

ルミアさんが肩口越しに覗き込み、感想を述べる。僕も前世で初めて仕事で使う計器を見た時、うへぇ……と漏らしたもんだ。目盛りを読むのにも慣れが必要で、慣れてからも時折混乱するのが計器というものだ。

全部デジタル化すればいいのに、何て愚痴を漏らしてたな。こっちではデジタルにな

んかしたら精度が酷くて使い物にならないけど。『魔術』っていう学問が根本的にデジタル変換に向いてない気がする。

グレン先生の言葉を借りれば、『世界の真理を求めるのではなく、人の心理を突き詰める学問』だからなぁ。心拍数をデジタル視することはできても、感情を可視化するなんてできないというものだ。

「ん。この箱は何だ？」

グレン先生が見つけたのは、机の脇に置いたる桐箱。中身は時計用の部品の予備だ。製品は既に出来上がっていて、後はベルトに着けるだけの状態だから此処には無い。買い物ついでにシャルロットが届けに行ってくれた。

「ああ、それが時計の部品ですよ。見ます？」

「いいのか？　なら、見せてくれ」

言われたとおりに箱を開け、中身を見せる。何か気持ち悪いものでも見せられたかのような引き攣り顔になられて、正直困惑している。何故だ。

「気持ちわりぃぐらいに均一だな……」

「いやー、やっぱ錬金術ってすごいですよね。僕みたいな若造でも、こんなもんが作れるんだから」

精密機械方なしだぜ、と語るとグレン先生が突っ込んでくれた。

「いやいやいやっ、んな変態的なパーツ作れんのはお前ぐらいだよ！」
変態とな。
「……マスター、嬉しそうですね？」
「褒められれば嬉しくなるだろ」
褒めた訳ではないと思いますけどねぇ、と呟くシャルロットに心中で返答する。日本人に『変態』とは誉め言葉なのだよ、と。
同人誌の性癖の幅には驚かされたものだ。心の底から敬意を込めて『変態だ……』と呟いたのはあれが初めてだった。
「それは兎も角として。
別にこの均一さに種が無いわけじゃないんです。半ば固有魔術（オリジナル）……技術ですけど、精密部品の量産化に成功してまして」
「……ああ、うん。確かにセリカが褒めるわけだわ……。
それで、精密部品の量産って……あー、どのくらい精密なのまで行けるんだ？」
「現状存在するような部品なら、全部行けると思いますよ」
当然、自作の時計機構の部品も。
Ｏｈ……と言いたげな先生にどや顔を向け、ちょびっと胸を張る。
自分でも割とすごいと思えた成果だ。これまでは専用の器具を使って一つ一つ手作

りしなければならなかったことも思えば、量産化時代はよと言ってしまうのも当然だ。所詮時代は工場制手工業。もう一、二回産業革命が起こらない限り、時代の大量生産技術が僕に追い付くことは無いだろう。

マジかよこいつって言いたげな顔をしている先生は突然我に返り頭を抱えた。

確かにこの情報をそこらに漏らせば、それだけで向こう数日は先生でも懐暖かな生活が送れるだろう。だが僕は知っている。そんなことをすれば、僕は当然のこととして先生もまともな生活を送れなくなる。

ぶっちゃけ、フェジテで紛争が起こりかねない。

要は厄介ごとの種を抱え込んだわけだ。

「ところでこの、カレンダー？　って完成してないの？　素人目にはよくできているように思えるのだけれど……」

「ああ、それ？　いや、閏年とかに合わせようと調整してたらさ、なんか変な結果が出るんだよ。どっか調整し直さないと未来の日付がずれるんだよね」

だからシャルロットに頼んで特務分室に後ろ盾に……っと。

システィーナさんは今現在調整中の模型を指さしている。計器は机に置かれていた。ツンツンと突つかれても壊れはしないが、なんとなく居たたまれなくなってその手を止

めさせた。
　そのまま模型の螺子を巻き、手を放して動かし始める。小気味いい音を刻みながら歯車は回り、見るものも目を楽しませる。
「へー。……で、どんな風に可笑しいんだ？」
「それはですね……あった」
　それに関して、先生の意見も聞きたいために自筆のレポートを棚から抜き出し、表題を確かめる。
　うん、これであってるな。
　僕は研究成果の纏められた紙束を渡し、言った。
「何回計算しても星の動きが可笑しくて、計算通りだと結構昔に大陸一つ消し飛んでることになるんですよ。
　どのタイミングかは分かりませんけど、旧い資料と比べて星の運行がずれてるんです」
「消しっ……ああ、『四百年星体運行問題』の事か」
　おや、知ってたらしい。中々にマニアックな問題なはずなのに。
　なら何か持論の一つもあるかもしれない。グレン先生の意見を仰ごうとすると、占星術は専門外だと突き返される。苦味の逆った顔。何か占星術に嫌な思い出でもあるの

だろうか。

『四百年星体運行問題』とは、古い文書と今の計測結果の奇妙なズレに関する問題。唯一分かっているのが『凡そ六百から三百年前――恐らくは四百年前ほど昔に星の運行に何らかの影響が与えられたのではないか』という事だけ。

僕の『大陸消滅説』はあまり主流ではなく、今は『戦争影響説』、『隕石飛来説』、『災害説』、などが主に考えられているらしい。

とは言えそれらを纏めた論文など、あまりにもマイナーな話だからか、帝国学院の図書館ですら僅かに資料が見られる程度だ。誰が見つけられるんだよ、あんなの。

因みにこの通称『四百年問題』、なんならば『記録方法の差異説』なんてのまである。それは、古い資料が間違った計測方法の下に作成されていたとする説だ。

だが、星の観測など現在も昔も変わらない上、計算にもミスが見当たらない。ただ、観測結果だけが可笑しいだけ。その上、当時の資料は押しなべて同じような計測結果を出している。

端的に言って、馬鹿馬鹿しすぎる仮説だった。いっそ妄想とすら言える。そんなものを、当時生き生きと議論していた学者らの間に放り込んだらどうなるか。

――昔と現在で、何か星の観測・記録方法に大きな変化が出たのか？　馬鹿な。そんなことがあれば歴史書に書かれているだろう。

――そもそも世界規模で資料に誤りが発生するなど、どんな異常現象だ？　大陸が消し飛ぶよりも有り得ない話じゃないか。

――よもや君は、先人が皆智慧の無い猿だとでもいうつもりかね？　数字すらまともに記録できない、馬鹿であるとでも？

――もしかしてタウムの天文神殿の天象儀装置をご存じない？　あれは確かな古代の天体運行だったと証明が為されているのだが、何か反証でも？

その他等々の『素人質問で恐縮ですが』を受けて、その節の提唱者は学界から消えたと聞く。まぁ、面白い考えだったからか、まだ根強い支持者がいるらしいけど。

でも今となってはまともに論じられることのない問題だから、そうそう見かけることもない。

現在は古代人の持つ文明を見直している流れができているので、また数十年ぐらい早くその説を出していればちやほやされたんじゃないかな。

それから僕は自分の造ってきた製品や実際の収益なんかを話し、ちょっとした雑談が小規模な社会科見学の様子を模してくるようになった。

「……って、よくよく考えればあんた結構稼いでるじゃない。なんでこんな小さい家に住んでるの？」

「や、宝石魔術に研究やらで資金が溶けるんだよ」
　現状で収入の八割が溶けている。
「そんなに？　あんた何の研究してるのよ。お爺様でもそこまでじゃなかったわよ」
「そりゃシスティーナさんのとこは考古学だったからでしょ。器具の購入や実地調査、後文献にお金はかかっても、逆を言えばその程度じゃないか。宝石魔術って一つ試すごとに宝石一つ消費するから馬鹿にならない出費になるんだよ」
「……ちょっと待って。今消費って聞こえたんだけれど」
「そう言ったよ」
　まさか、とシスティーナさんが呟いた。
「……その、先日グレン先生に手渡させた宝石って、原材料費幾らなのかしら？」
　ちょっと声が震えている。
　概算で一個当たりの原材料費を言ってあげれば、信じられないものを見る目で三人に見られた。
　いやグレン先生。貴方昔そのバカ高い消耗品バカスカ使かってた側でしょーに。
「いや、上司の個人的な伝手で手に入れた備品の値段なんて知ってるわけねーだろ……。マジかよ。もう少し安いと思ってたぜ」

この後、部屋の奥に戸棚で隠すようにして置いてあるベッドを見つけたルミアさんが赤面したり、ふと見た棚に大粒の宝石が山のように入っているのを見てシスティーナさんが頬を引き攣らせたり、金銭感覚が破綻している空間に居続けてグレン先生がゾンビになり掛けたり、色々ありながらも時間が過ぎて行く。

一番大変だったグレン先生の強行を、シャルロットが後頭部への一発で止めた後はかなり平穏な空気になった。けれど女子が多すぎることに気付いて急にそわそわしてしまい、不審な目で見られたりもした。起きてると目が離せなくて面倒だが、寝ているとそれはそれで気まずい。手癖の悪くないグレン先生は何処で売ってるんでしょうか。

あ、非売品でしたか。そうでしたかすいません。

日も暮れ、そろそろ帰ろうとした二人を送ろうとシャルロットらは外に出る。ぐっと背伸びしながら、グレン先生が起きるのを待った。

「……ん、ここ、は……ああ、そうか」

「おはようございます。もう夕方ですよ」

「へ？　んな馬鹿な……ってマジかよ！　どんだけ寝てたんだ、俺……？」

「二、三時間ぐらいですよ。一応病院行きます？」

「いや、いい。家でセリカに見て貰った方が安上がりだ」

さいで。

「じゃ、そろそろ帰ります？　これから夕飯の支度があるんですよ」
「お、そうなのか？　んじゃあ俺もご相伴に――」
「因みに、寝てる間にセリカさんから連絡が来てましたよ。そろそろ帰らないと不味くないですか」
「――っと急用思い出した。悪いな。寂しいだろうが、俺はこれで帰らなくてはいけないのだ……！」
「はいはい」
玄関でグレン先生を見送ったら、手を洗って夕飯の準備に取り掛かる。
シャルロットが帰ってくる頃には、食卓にご飯が並んでいるだろう。

シャルロットがシスティーナとルミアを送った帰り。ばったりとグレンと出くわし、そこで少し歩かないかと提案された。
それを承諾し、シャルロットはグレンの帰路に付き添った。まだ、シャルロットの中ではグレンは手のかかる後輩だというイメージが残っている。
――斯くしてグレンは、シャルロットと並んで歩いていた。
偶然ばったりと出会い、つい口を突いて出てしまった言葉に後悔しながら彼女の隣を歩いていた。正直な所、居心地が悪い。

妙な罪悪感が襲う中、人目を気にするように暫く口籠ってから当たり障りのない話題を投げかける。

「随分と温い奴だな。あんたのマスターは」

先輩、と敬称をつけずに呼んでも拳が飛んでこない。

少し寂しいような、ほっとするような。

ああ、調子が狂う。

アダムについて、グレンはこの狂人の飼い主なのだから、もっとイカれていたり、頭の螺子が外れているのだと思っていた。学院では、その面を隠しているだけだろうとも。

でなければ、あんな過剰防衛な礼装など作らないだろうとも思っていた。

それを確かめるためにシスティーナらに同行した、その一面も確かにあったのだ。

だが、今日見たのは何だ。友人が家に遊びに来て、照れくさくも嬉しそうにしていた、唯の少年だったではないか。挙句、自身の研究成果を無警戒に見せて、手土産にと研究レポートまで渡して。

手に持つ紙束の感触を確かめて、それが夢でないと三度目の確認をした。

人懐っこい子犬を見ている気分だった。いや、澄ましている分、教鞭を振るう教室で優等生を気取っている眼鏡の方が近いだろうか。

本来はあれが正しいのだ。自分の方が間違っているのだ。

グレンはそう思いながら、とても胸のむかつきを隠せなかった。

だがそれは自分に向けているものだけではない。

「そうでしょう？　自慢のマスターです」

ニコニコと、この元同僚（シャルロット）は胸を張る。胸のむかつきは、この人に向けているものも多分に含まれている。

思えば特務分室時代から、この人の事は理解が及ばなかった。一切の加齢をしている様子が見受けられないのも、身体強化術式も使わずリィエルと同程度の腕力を振るえるのも。

まるで、非人道な実験の産物で生み出された強化人間のようだ、とセリカがぼやいていたのを思い出す。

グレンは寧ろ、シャルロットを見て『セリカのようだ』と感じた。その泰然とした佇まいが、常に余裕気なセリカと重なって見えたから。

一度、グレンはセリカにシャルロットが彼女と同じ永遠者（イモータリスト）では無いかと尋ねたことがある。

その時に明言された。それはありえないことだ、と。

セリカは自分以外の不死を見たことが無いし、もし居たとすれば必ず見つけている。

何より、彼女のようにうっかりしているならば、必ずどこかで痕跡を掴んでいたはずだ。
だから、シャルロットが私の様な奴だというのはありえない。
セリカはそう結論付けた。
それにしては、あそこまで育つまでの痕跡が一切見当たらなかったのも気にかかるが、という言葉を言い残して。
「アダムには、特務分室に居たことを言ってあるんだろ？」
グレンは、ふと不安になりそう尋ねた。
今日一日アダムを見続け、何かに気付きかけている。そのとっかかりをより確かに掴むため、心に浮かんだ問いを口にした。
「ええ、伝えてます。だからこその支援物資。〝礼装〟の定期補給だったんですよ？」
「そうか。まぁ、そうだよな……」
だが、だとすると解せない。
何故アダムは、先の一件でシャルロットを頼らなかった？
言葉を濁さずに言えば、シャルロットはグレンよりも『強い』。魔術の腕、格闘技術、知識、器用さ。そんな領域の話ではなく、殺し合いの話だ。
特務分室時代に見たことがある。シャルロットの戦い方はあまりにも稚拙で猛々しい。

先に挙げた四つの評価項目ならどれもグレンが上回るほどに弱いのに、けれどただフィジカルの一点――圧倒的な暴力で戦局を覆す。

恐ろしいのは、それが魔術に寄らない、素の身体能力から来るという点だ。

故にグレンの固有魔術（オリジナル）が意味をなさず、遠距離から一方的に狙撃するか、或いはセリカが出張らなければ殺せないだろうとまで言われていた。

いや。

彼女が持ってくる魔導器――アダムが言うところの〝礼装〟――を勘定に入れた場合、確実に殺しきれるのはたった一人。私だけだと、セリカはそう言っていた。

紛れも無く、シャルロットは化け物の一人だ。化け物揃いの特務分室でも指折りの、人でなし。

アダムはそのことを知っていたのか。

知っていたなら、何故シャルロットを頼らなかったのか。

実感がない？　確かに、グレンも拾われた当初はセリカの凄さに実感が持てなかった。それは納得できる仮説だ。

だが、やはり引っかかる。

あの時のアダムの行動を思い返す。自分の力だけで物事を解決しようだなんて、そういう意思はなかった。自分にはできないなら、システィーナに頼ることもあった。頼る

ことを迷わない。そういうやつだ。
なら何故、シャルロットにだけは頼らなかった？
これだ、とグレンは直感する。これこそが、自分の感じた違和だ。
何故。何故。何故。埒の開かない思考を繰り返し、頭を捻る。これは駄目だと頭を振り、思考を切り替える。
シャルロットを頼らなかったのではなく、頼れなかった？　見栄か、確執か。そんな様子でもないの事は、今日一日で良く分かった。シャルロットとアダムの仲は余りにも自然だ。熟年夫婦のそれだ。
もう少し視点をずらそう。頼ろうとしなかったのではなく、出来なかったのでもなく
――そもそも、その選択肢が浮かばなかったなら。
そもそもの話として、シャルロットを戦力として見做していなかった？
「――は。馬鹿げてる」
馬鹿げてる。馬鹿げた話だ。
あのシャルロットが、セリカにしか確殺できないと言わしめたあの女が、戦力外？
何のすれ違いがあれば、そんなことが起こりうるのか。想像もつかない。
だから笑って、軽口叩いて雑談して、仮説を忘れ去ろうとした。
「しっかし、アダムの何処が良くて仕えてんだ？」

それが失言であることに、グレンは直ぐに気付けた。
「仕えてる？　いいえ、グレンくん。私は別に、マスターの使用人ではありませんよ」
「へ？　んじゃなんだよ。奴隷とでもいう気か？」
御主人様（マスター）と敬するぐらいなのだから、主従関係でもあるんだろうと思ってた。金銭での雇用関係ではないにせよ、そういう間柄なのだろうと思っていた。
思っていた。思い違っていたのだ。
「そうですね。近いです。私はマスターの所有物、奴隷と言ってもいい」
――。

【速報】化け物染みた元同僚がまさかのマゾヒストだった【カミングアウト】

何処かから　電波　を　拾った
グレン　は　頭痛　が　痛くなった
ヘットエイクが　アウチしている　！
心成しかほんのりと頬が朱に染まっている。合意なのか。あの年で進んでるな。いや、それよりもアダムってこいつの息子的な存在なんじゃ。まさかアダムも不老なのか。いやいや、まさか。そんな存在がそこらに居るわけないだろ。まさかまさか。ふじ

こふじこ。
「そ、そっそそ、そっかー！　そーだったのかぁー！　あー、あー……あーっと、きゅうに用事思い出したなー！
　――そういうことで俺はこれで」
「グレンくんに仕事とかあるわけないじゃないですか」
「ぐえっ」
　逃げ出そうとしたグレンは、がしりと首筋を掴まれて抑え込まれる。
　命を掴まれていると確信するぐらい、指が食い込んでいる。
　すごくぞわりとしました。
「例え話をしましょう」
「すいません、あの、逃げないんで手を放してくれませんかね」
　そして、なんか語り始めた。
「ある世界では、『魔法』と定義された六つの奇跡がありました。存在すらあやふやで、六つ目に至っては内容すら判然としないものでしたが、確かに魔法は存在しました」
「おーい、シャルロット先輩ー？」
　なんか頭のとんだ話をし始めた。
　未だに首根っこを掴まれているグレンは、うっかりその怪力で頸椎を砕かれたらたま

らんと、こっそり足掻くのを止める。さっきの『逃げないので』は、嘘であった。
そして当たり始められた話に耳を傾け、だがその話題の脈絡の無さにまた首をひねる。
何が言いたいのか。
「例えば『青』
例えば『無の否定』
例えば『魂の物質化』
そのうちの一つ――『平行世界の運営』
それは平行世界への干渉を総括した奇跡」
グレンも、内幾つかの言葉には聞き覚えがあった。学生時代、熱意のままに資料を漁っていた頃に見つけられた、現代に名前の残る数少ない『魔法』なのだと。
最も、それが何処で発生したのか、何故廃れたのか、どんな理論で使われていたのかなど――全く分からなかったのだが。そもそも、『青』等その概要すらうかがえない。色でいいならば、晴れればそこから見えるだろうに。
「此処で問題です、グレンくん。
ただの凡人が、そこらに居る一般人が。そんな『魔法』を手中を手に入れるなど、有り得ることでしょうか？」

ぱっと、手が離される。

だがグレンは逃げ出そうという気にはなれなかった。

何か途轍もない、底知れない澱が知らぬうちに腹の底に降り積もっている。足が石畳に釘付けされたように、びくともしない。

「いいえ、いいえ。有り得ないのです。

『普通』の手に落ちては、『魔法』は『奇跡』足り得ない。

故に、きっと彼には何らかの異常性があった。『極々普通の主人公』と同じように、逸般人（主人公補正）の顔があってしかるべきなのです」

――空気が変わった。

何処か息苦しい、淀んだ空気に。

シャルロットの言いたいことは分かる。グレンも、『正義の魔法使い』になるためには特別な力が無いといけないと結論付けているのだから。きっとそれは、単純な暴力だけではいけない、天運やらカリスマやらの類なのだろうとも。

だが、題材が可笑しい。夢見がちな乙女でもこんな話はしないだろう。帰り道の、こんな状況で。

そもそも、シャルロットは何処を見ている？　こちらを見ているようで、実は虚空に焦点を当てている。瞳が虚ろだ。恐ろしい……。

「分かりますか？　それが、何なのか」
完全にペースに呑まれている。
分かるわけないだろ、と毒吐いて自分のペースを挟もうと口を開き、けれど頭を押さえられて答えを教えられた。
「愛ですよ、グレンくん」
身構えていたところに、頭を撫でられたように。
緊張して強張った体が、予想外のジャブによって弛緩する。
「はぁ……あ、い？」
何を言ってるんだ、そんな、まるで夢見る乙女みたいな話を。
呆けるグレンに、シャルロットは笑いかける。
「ふふっ、分かりませんか。でも、それでいい」
シャルロットはグレンから離れ、そして満面の笑みでこういった。
歯を剥き出すように、威嚇するように、華々しくも禍々しい、凶悪なまでに可愛らしい笑みで。
「私はマスターを愛している。
それが全てでいいのですから」

――だから、私とマスターに口出しするな。

その狂気的な喜びに、狂喜的な高揚に、知らずの内に一歩退く。
その、世界を殺すような言葉に、グレンは恐れを為す。
楽し気に歯を剥くシャルロットが、化け物にしか見えなかった。
そして思うのだ。また、何時もの様に、思うのだ。
狂ってる、と。

「……まぁ、愛なんて、ないのかもしれませんけど」

「っ、はぁ～～～っ。っ疲れたぁ！」
帰宅、後グレンは一直線に風呂を沸かし、その中に入った。
体にたまった疲れを癒すのに、それはとても有用だと知っているから。だが、同時に幼少時にセリカに体を洗われた思い出も蘇るので、少し気が重くもなる。
風呂は好きだが、自宅の風呂は苦手なグレンだった。
「やっぱあの人の考えは分からねぇなぁ」
いや、理解したくねぇのか。

話が通じないわけでもないし、悪い人でもないんだがな。
こうして手拭いを頭に乗せる習慣も、そういえばシャルロット先輩（）に教わったものだったな。
……『先輩』って呼び方も、あの人に教えられた敬称だったな。
アダムも俺とさして変わらない年頃……まさか……。
いや、まさかな。

そう言えばアダムは自分と同じような立場に居る、と気付いた。
うら若い（見た目は）女性に拾われ、養われている。その女性がとてつもなく強い。
さらに同じ職場、学院に通う者同士。
昔は『マスターを養うためです』などと言った同僚の勤務理由に奇異の目を向けていたが、今ならばその理由が分かる。アダムはセリカやシャルロットのように老化しない異常者ではなく、何処か天才的でありながらも根本が普通過ぎる凡人なのだから。
彼女の勤務年数から算出すれば、アダムにとってシャルロットは産湯に浸かっていた時から世話をしてきた相手の筈だ。
そんな相手と通学……うむ、今度から少しは優しくしてやろう。
というかむしろ、あんな奴と一緒に住んでるだけで罰ゲームものではないか？

グレンはそんな事態に自分が置かれたらの時のことを思い、身震いした。あれは駄目だ、なんかこう、兎に角やばい。知らない内に地雷踏んで頭握りつぶされそう。

ゾワリ。

背筋が粟立つ。

「っ、はぁー」

嫌な想像を振り払い、風呂の水を顔に浴びせる。

いやー、ないわー。ないないない。あの人と同居とかマジ無いわー。

そうして気分を変えると、今度はアダムへのささやかな尊敬が湧いていた。英雄じゃないか。自分なら数日で逃げだしていた。

やはりマスターだから耐えられるのだろうか。

……マスター（意味深長疑惑）

いやいや、いやいやいや。

忘れろ忘れろ。

うん、わすれた。

ともかく、シャルロットと付き合うのに関しても、アダムは紛れも無い天才であった。

それでいい。

……いや、人付き合いに才能も何もねーだろ。

「あー、あほらし」

風呂の縁に頭を預け、浴場の天井を見上げる。自然と溢れた溜息は、鉛のように重々しく、反してグレンの胸の内は水に押し潰されかねないほど軽かった。

なんでこんな問題抱え込まなきゃいけないのか。性癖なんて当人同士の秘密にしてくださいって。

でも。

思い返したのは、別れ際のあの言葉。脳裏に焼け付く程に赤い、笑顔の話。

愛、ねぇ。

「やっぱ、俺にゃ狂ってるようにしか思えんわ」

そんな油断から漏れた感想を、果たして拾うものがいた。

「そうか？　私からしたら、恋する乙女にしか見えないけどな」

「つげぇ、セリカ！」

自身の育ての親であり師匠で在り、最も身近な異性。セリカ。

彼女が、この浴場に入り込んでいた。

「いやー、私が帰る前に風呂を沸かしているとは、感心感心！　丁度風呂に浸かりたい気分だったんだ、一緒に浸かろうじゃないか、昔のようにな。ん？　どうした、そっぽ向いて」

「タオル巻け、タオルをっ。つかシャワーはどうした！」
「はっは、まさか私に欲情するわけでもあるまいに。ほーれ、愛い奴め」
そう抵抗するも、グレンはセリカを阻止できずに同じ風呂に浸かることを強制させられてしまう。腕をガシッと掴まれて、逃げ出せない。
観念したグレンは、成るべく意識を向けないように雑談でもしながら湯あたりを待った。流石にそれくらい浸かっていれば、上がることも許してくれるだろう。
暫く学院での仕事や生徒らでの話をし、いい感じに頭が回らなくなってきた。
「ああ、そうだ。シャルロットが恋する乙女ってどういうことだよ」
「言ったな、そんなことも。そうさ、あいつは乙女だよ。純情すぎるくらいに乙女だ」
「どこ見てほざくんだ？」
「女の勘で判断したのさ」
「おん、な……？」
「よし、痛い目を見たいようだな」
「痛い痛い痛い痛いッ！　止めて止めて止めて止めてぇぇぇぇぇーーー!!
らめぇっ！　頭がひょうたんになっちゃうのぉぉおお！」
んほぉ（棒読み）
グレンは逝った。気付けば浴室の外に寝かされていた。

湯冷めしかけた体でくしゃみを一つ。そそくさと体を拭いて服を着た。
〝女性の年齢には触れてはならない〟
明日にはゲロと共に下水に流されているだろう学びを得た。

そういえば。
セリカは別に、シャルロットが不死身であることの否定はしてなかったな。
同類であることは否定しても、同様な存在だとまでは否定していなかった。
そんなことを、のぼせた頭で考える。
詮の無いことだ。

＊＊＊

――人気のなくなった工房で一人、アダムは作業机の真下の床板に手をかけた。
「さて、仕込みの間に模造（ヴォールメン）：月霊髄液（ハイドログラム）の手入れ（アップデート）でもするか」
その奥には、昼は見つかる事のなかった数々の作業道具と、そしてアダム屈指の礼装が立ち並んでいた。一番初めに実現した空間倍率操作の拡張空間。固定認識座標としてなら実用出来たその技術は、つい最近持ち運びに対応できるようになった。
ああ、研究が進んでる。成果が積み重なっていく。その事に満足感を抱きながら、ア

ダムは狭い入り口から地下に身を落とした。
広がるは、無数の資料、無数の論文。
帰り際に渡したあれなど、所詮は公開用に書いたもの。
本当に秘匿しておきたい技術ならば、此処にごまんとあるのだ。
工房として紹介した事実に嘘はない。たが、工房は目眩ましも兼ねた作業場だ。態々大っぴらに厳重したロックも、視線誘導。この倉庫を気付かれないようにするための。
黒い拳銃を持ち上げ、試し打ちの場がないかと思案しながら恍惚の笑みを浮かべる。
自分の指先一つで世界を滅ぼせる全能感は甘美だ。
試作品の域を出ないそれを棚に戻しながら、倉庫の奥へ歩を進める。
「礼装用の調律器は、確か――」

ロクでなし魔術講師と被害妄想（パラノイア）　四話　恒例行事

拝啓、セシリア先生へ。フェジテを離れ長旅の末に学会に着き、いかがお過ごしでしょうか。馬車旅の中で大量吐血から失血死してないか大変心配です。何かあれば持たせた宝石は遠慮なく使ってくださいね。あ、今は蒸気機関が生まれてるから汽車があるのか……。

こちらはですが、テロリストが湧く季節となりました。とうとう我が校にもテロリストがおいでになられましたよ。ええ。

遠くの方で鳴った雷鳴にも似た破裂音と微かに混じる破砕音を聞きながら、心中で現実逃避を始める。静かだともいえるその一撃は、透明度の高い綺麗な硝子越しに上空を横切っていた。

あー、ちょうちょだー。いや違うな。蝶々はもっと、こう、ひらひら動くもんな。は。

そう言えば前世の記憶からすればこの世界はラノベ舞台らしいし、こんなこともあり得るんだろうな。

うん。

やっべ、忘れてた。どうしよ。

隣でエレちゃんが凄い目で見て来る。なんか、「どうするのだわっ？」とかそんなことを言いそうな目で。

あわあわする彼女に少し胸が痛むが、実際僕にも解決手段が無い。そりゃあ、宝石魔術を応用した奥の手が使えば一人ぐらいは完封できるだろうが、相手は複数人。拳銃を乱射してるようなやばい人と、フィクションの剣士を大真面目にやってるやばい人。校門で並んで歩いてきた時点で、教室に警告すればよかったかなぁ。

僕の手持ちでは一人ぐらいにしか対処できないし、そのあともう一人の方に叩きのめされるのは目に見えている。今から生徒たちの居る教室に向かっても、人質が増えるだけだ。

ああ、どちらを封殺するべきか。

片方を抑えれば、もう片方で被害が確実に出る。かといって両方抑えきれるほど、宝石の数に自信はない。

医者の給料でそこまで多く宝石が買えるわけないだろうが。

……。

僕はエレちゃんに微笑みかけて言ってやった。

「どうしようエレちゃん。詰んだ」
「なのだわっ!?」
あはは、変な驚き方。

＊＊＊

これは避難訓練ではなく、またポーズ機能も持たない現実だ。状況は馬鹿し合っている間にも刻一刻と進行する。
具体的には、もうテロリストがルミアちゃ……ルミアを指名してきている。まだ数十秒余裕はあるだろうが、直ぐに動き出さないと事態を完全に収めるのは難しくなる。
せめて片方づつで来てくれるのならば捕縛できる。だが、それだとルミアが犠牲になってしまう。下拵えした宝石の無い僕なんて、役立たずも良い所だ。魔術礼装を作ることに長けていれば、まだいろいろと搦め手を打てていただろうに。
最悪の場合、エレちゃんの宝具を開帳すれば全部解決するだろうと考えているのは間違っているだろうか。
あ、いや、エレちゃんといえばあれだ。ガルラ霊がいるじゃん。此処バビロニアどころか地球ですらない気がするけど、宝具を偽装開帳すればちょうどいい塩梅でバビロニ

アの冥界を招来できるんじゃない？

その旨をエレちゃんに小声で伝えると、エレちゃんは涙目でこう返してきた。

「そんな器用さ、私には無いのだわっ!?」

というか前に一度見た特務分室さんたちが怖いらしい。一歩間違えればフェジテが冥界に沈むような手を、エレちゃんは取れなかった。主にストレスによる手の震えで、失敗しそうな気がするらしい。

まじかー。エレちゃん意外と肝小さいなー。胸も小さいのに。

「胸は関係ないと思うのだけれど……」

まぁ、依り代があれだから仕方な……あっ、オリジナルもノー脂肪（というか皮すらなく肋骨丸見え）でしたね。

っと。危ない。煽っているとエレちゃんの拳が飛んできた。主にこんな時に何をふざけているのかという怒りと、揶揄われる恥ずかしさによって、顔が赤く染まっていた。

「この中にルミアって奴はいるか？」

教室の中からテロリストの声が聞こえた。因みに僕らは今、医務室から出て空き教室の中に入ってます。流石に何も動かないと上司（セシリア先生）が死にかねない。胃痛で。

ふーむ。だんだんと思いだしてきた。なんかルミアちゃんが原作のキーキャラ何だっけ。もう転生してはや十数年、一生懸命生きすぎて内容を殆ど覚えてない。ぶっ

ちゃけ、主人公が強いってこと以外覚えてない。
いや、別に強くはなかったっけ……？　不味いな、そこもうろ覚えだ。
これがマリオ的展開ならルミアちゃんは囚われのピーチ姫になるだろうし、鬱展開なら生徒は虐殺されたり強姦される可能性もある。更に言えば、態々キーキャラを誘拐しているところから、彼女がなんかの実験の素体になることも考え得る。
例えばほら、体を改造されて悪の科学者の物にされてしまったヒロインをむせび泣きながら殺すとか、割と人気でそうな内容じゃん？
「出ないと思うわ。むしろドン引きするわ、マスターのその発想には」
えー？　鬱展開いいじゃん。ご都合主義もいいけど、甘すぎるのは嫌いなんだよね。やっぱ世界は適度に厳しくなくちゃ。
にしてもホントどうしよう。ルミアがどっかに連れ去られちゃったし……あ、もしかして今、テロリストってばらけてる？
――殺れるッ！
きらりと目が光るようなエフェクトを挟み、僕は廊下に踏み出――
「はなっ、離しなさいよッ！　私が誰だと思ってるの！」
「はっ、活きが良いねぇ。やっぱ餓鬼ってのはこうでなくっちゃぁなぁ」
――音より早くしゃがみ伏せて身を隠す。幸い、扉を開けていなかったのが功を為し

た。

おいおい、おいおいおいおい。ちょっと手を付けるのが早すぎやしませんかね、テロリストさん。

鬱展開は嫌いじゃないけど、流石の僕でも現実と小説をごっちゃにはしないぞ。何処まで基本に忠実（レンプレート）な悪役なんだ。

……うん、遊んでる場合じゃあ、ないね。分かってる。

曲がりなりにも（年齢偽装をして）医務室の助法医師として雇われたのだ。身分としては成人相応。生徒を見捨てて逃げだせば、首が飛ぶどころか悪評が回ってフェジテから逃げ出さなくてはならないかもしれない。

ああ、それは何と、取り返しのつかない話だろうか。そんな目に合うくらいなら、五分五分で勝算の有る戦闘を仕掛けた方が良い。

仕掛け時はあのテロリストがどこかの部屋に入った時。逃げ場のない空間内で、一気に終わらせる。

だから僕は、鼻歌を交えて生徒の一人を抱え歩くテロリストの背後を追った。懐に抱えた宝石に触れ、苦い顔をしながら。

横を見れば、エレちゃんも心配そうな顔をしている。今更だけどさ、エレちゃんなら素手で殴りかかっても勝てるよね？

「……その、私、力加減はあまり得意ではないのだわ」
あー、長年死者ばっか相手にしてたボッチだからねぇ。
いったい。殴らないでよ。

緩んだ顔で、テロリストの男がある教室に入っていく。プレートから判断するに、何かの特殊教室の準備室のようだ。
部屋が狭いのは都合がいいが、うっかり生徒を巻き込みそうで怖いな。
あーあ、これが適当な廃村とかで、生徒もいなかったらよかったのに。辺り一帯に疫病をばらまいて、放置。それだけで勝手に死んでくれるだろう。
現実にそれをしたら、まず間違いなく捕まるだろうけど。そもそも、生徒を巻き込むから使えないけど。
「儘ならないもんだ」
胸元を握りしめ、そう呟く。如何に力があっても、それを振るえる状況は限定されていく。
エレちゃんの宝具は殲滅戦でもない限り使用できず、単体での戦闘技術はそれほど期待できない為、人質を巻き込むことを恐れている。何より、サーヴァントの火力は高すぎる。

令呪でブーストすれば、猶更。
胸元――更に言うなら、心臓の真上。そこには、三画の令印が刻まれている。
僕とエレちゃんの契約の証であるそれが。
あの夜の誓いの証であるそれは、今、疼く様に震えている。
ただでさえ一騎当千なサーヴァントの力に上乗せすれば、それこそ世界を獲るのも不可能ではない力。
それが、しかしこんな些細な場面では全くの役立たずであることを否定できない。
ただ奮い立たせるだけの力もない。退かない楔になるしかない。
「カッコつかないなぁ……」
「そんなこと無いのだわ」
ぼそりと呟けば、エレちゃんは小声でフォローしてくれる。本当にいい子だ。
エレちゃんに笑みを向け、解れた緊張のまま勢いよく準備室の戸を開け放つ。気分はイケイケＤＫで、テンションもそんな感じだ。
扉を開けて直ぐ、バンダナの……ジンと呼ばれていた男が床ドンの姿勢でシスティーナを押し倒しているのが見えた。
拘束された状態、首筋に粘液の跡。もしかすれば、男性恐怖症でも患うかもしれない。
精神面は専門外なんだけど。

後々のメンタルケアの手間を減らす為に、僕は情報量でシスティーナを混乱させようと行動を起こす。やることは簡単で、ただ懐に納めた宝石を節分よろしく室内にバラまいただけだ。回収しやすいように机の下や機材の隙間に入らないようにだけ気を付けて、どの宝石が何処に落ちたのかだけを把握する。

「な、んだぁ……ッ!?」

「やっほー。トリックオアトリート。投降してくれないと悪戯しちゃうぞ♪」

……我ながらこのテンションきついな。楽しいけど。

「ね、ネルガル先生っ!?　なんで……っ」

「いやさ、医務室で昼寝してたらなんとなく虫の知らせってゆーの？　そんな感じのを感じ取ってね」

「働いてください！」

「仕事ないから仕方ないじゃん」

因みに、エレちゃんには扉の脇に隠れててもらっている。いざというときは……うん。最終手段としてこいつに対処してもらうことになるだろうな。

足下に散らばった宝石を踏みつけながら、どんどん暗い室内へ踏み入る。トラップを仕掛けるような時間はなかったし、そこらへんは警戒してない。大体、設置式のトラップがあったら、ばら撒いた宝石に反応して作動したはずだ。それが振動式でも感圧式で

も、生命感知式でも。
「だいじょーぶ。もう助けは呼んであるし、僕もそこまで弱くは無いからさ」
おちゃらけた語り口調に反するように、意図的に威圧的な笑みを浮かべる。抗すると、不思議とアドレナリンが湧いて恐怖が麻痺する。成程、確かに笑顔は攻撃的だ。浮かべるだけで、戦闘態勢が整う。
「おーいおい。保健のせんせーですかー？　ちょーどいいじゃねーの。ちょっと今から保険の実技を始めたいんですよ手伝ってくれませんかぁ？」
「良いですよ。仮にも講師ですから、お手伝いしましょう。題材は……テロリストの解剖とかはどうでしょう？」
言いながら、足元の宝石の待機状態を解除する。
限界まで引っ張ったゴムが千切れるように、貯め込まれた呪いが一直線に打ち出された。
部屋の暗闇に同化するような黒靄の弾丸――それを、ジンは紙一重で避けて見せた。
「うおっ、とぉ……へっ、あぶねぇなぁ。体罰ですかぁ？　せんせぇ」
「いやいや、麻酔を掛けないと暴れちゃうでしょ？　それとも、麻酔なしでやられたかったんですか？」
「んー、どっちかっていうとオンナノコの服の解剖をしたかったカナ♪」

「ははっ、僕もしてみたいですねぇ、貴方の解体」
ははっ、はははは。
「――死ね」
「《ズドン》」
視認。敵の攻撃は、黒魔【ライトニング・ピアス】。詠唱速度は秒以下。出の早さは勝ったが、攻撃速度は向こうの方が上。先程避けられたのは、見てから回避だったのか？
警戒されていた可能性を考えて、もう一つ試してみよう。
「物騒ですねぇ。生徒（システィーナ）に当たったらどうするんです？」
よくよく考えれば、見知った人物がテロリストと和やかに会話してる時点でトラウマものじゃなかろうか。
横目に確認する暇もないが、ドン引かれているだけならまだしも、気を疑われると厳しい。下手したら男性恐怖症の代わりに人間不信を患わせてしまいそうだ。
それは兎も角として、折角飛び退いておくに行ってくれたのだから、僕はこれ幸いとばかりにシスティーナの壁になる様に仁王立ちする。着てきた白衣が丁度良く壁となって、視線を遮ってくれることを期待しよう。これ以上のストレスは、出来ればない方が良い。

「人の生徒に手ぇ出しといて、のこのこ帰れると思うなよ……！」

そんな、カッコいいこと言ってみたりして。

――なんだ。

――こいつも、偽善者かよ。

＊＊＊

ジンに生みの親の記憶はない。一番最初に知った大人は、皺だらけの老人――『爺さん』だった。

枯れ木のような体には無数の傷跡があって、狼の鬣のような銀髪は生気を毛先まで湛え、四六時中変わらない仏頂面は見るだけで恐怖に似た不安を抱かせる。

後に『戦争を呑んだ』とまで形容した老人の立ち姿は、記憶の限り、堂々としていた。育児に疎かろうと不安を一切感じさせない手つきで育ててくれた彼から、一番最初に学んだのが『臆さない強さ』であった。

〝爺さんは強かった。魔術が使えなくとも、俺じゃあ敵わないぐらいにな〟

物心ついたころには、ジンの育った山小屋に人を殺すための武器は無かった。解体用

のナイフ、調理用の包丁、鹿撃ち用の猟銃。明確に人を殺せそうなのは、それぐらいだっただろうか。

爺さんは物心の付いたジンに、様々なことを教えた。

植物の見分け方を教え、使い方を教え、加工法を教え。動物の種類を教え、足跡を教え、狩り方を教え。罠を、銃を、ナイフを、気配の殺し方を――山歩きを教えてくれた。

笠を編んだり、薬を調合したり。美味くできれば一言二言褒めてくれて、その日の食卓に脂の乗った肉が並ぶ。

時折不器用に頭を撫でてくれて、誕生日にはナイフや鞘なんかを自作して送ってくれる。

ジンは、そんな爺さんが大好きだった。

ジンはお人好しな輩が大嫌いだった。

きれいごとを述べて殺すのを躊躇うなど、馬鹿のすることだ。襲われたら殺す気で反撃する。それが当然だと思ったし、実際にそうして生き延びてきた。

時折下りた町で迷い込んだスラム街。治安の悪いそこで襲われたときは、爺さんの造ってくれたナイフが唯一の相棒となる。乞食を殺し、チンピラを殺し、浮浪児を殺し、ヤクザを殺した。

いけなかったのは、勢いで殺してしまったヤクザ者。ジンは経験的に、服装が良くて

ガタイの良い奴ほど徒党を組んでいると理解していた。
だが、すぐさま仇討ちが来るわけでもない。暫くぶらついても、更なる襲撃は無かった。
だから安心して、ジンは帰路に就いた。
そんな生活を繰り返し、ジンも大きく育った。
気も大きくなり、体もまたそう。良く町に降り、交友を築いていたためだろう。
魔術を習い始めて、また純粋に強かったジンはスラムで育った孤児らの大将を受け継いだ。スラムの大人を一掃できる実力は、偏に爺さんが山で教えてくれた狩りの技術――言葉を濁してはいたが、紛れも無いゲリラ用の戦術――のお陰だった。
子供らのヒーローで、世界で二番目に強くて、自分にできないものはない。
そんな幼少期の、ある日。

「なぁ、ジン。今日は妙にオトナがすくねぇよな」
「ん？　……ああ、ほんとだな。何してんかねぇ」
スラム街の一角、廃材置き場。下手に踏み入れば服の裾を引っかけ、転倒し、錆びた金属で傷口を作ってそのまま破風傷で死にそうな場所。けれど子供の体には丁度良く、入り組んだ迷路のような此処は子供ら公然の秘密基地となっていた。

「またなんか企んでんのか？」
「そんときゃあ、俺がぶっ叩いて追い返してやるよ！」
腕まくりしてジンが意気込む。実際、ジンは過去に三度此処に踏み込んだ大人等を撃退した実績を持っていた。
それは頼もしい、とばかりに子供らは沸き立つ。ガリガリにやせ細るものもいれば、上のあまり歪に超えた者もいる。間抜けに涎や鼻水を垂らすような彼らの王様としてふんぞり返るのは、悪くはない気分だった。
人の上に立つのが好きなのではなく、人に慕われるのが好きなのだろう。
この日も日暮れまでじゃれ合い、家の有る奴は家に、そうでない奴は自身の寝床に戻っていく。じゃあな、またな、と行儀のよい挨拶を交わして人気が捌けていく。
全員を見送り最後の一人となったジンは、そこでようやく帰路に着いた。一番初めに此処に着き、一番最後にここを出る、それもきっと王様の役目なんだと暗黙の裡に決まっていた。
「あー、楽しかった」
夕日に向けて背伸びして、ふと物足りなさを覚えている自分に気付く。
そう言えば、今日は一度も大人が寄ってこなかった。普段ならば騒ぐなり襲ってくるなりして、一日に一度はオトナ達が訪れるのに対し、今日はそれが無い。時折来る大人

の差し入れは、滅多にないことだから残念には思わないが。

「……」

何か引っかかる。

怪訝な顔をして山を登っていると、土と木々の臭いの中に嗅ぎなれない臭いが混じっていることに気付いた。僅かに残る熱と血、スラム独特の異臭、生まれてから一度も洗ってないんじゃないかという臭いは、オトナ達のそれに違いなかった。

「……っ」

嫌な予感がする。

山道を外れ、木の根の上を跳ねるように駆け、低木の枝に手をかけて木々の上を飛び回るように移動する。風が梢を揺らすような音が後に続き、その他は何も残らない。魔術の補助による体術だ。

大人が走るよりも早く、太陽が山の向こうに隠れるよりも早く、ジンは小屋の前に付いた。山道の続く先など、このほかに無い。スラムのオトナが道を態と逸れる様な能もないだろう。例外として、道を認識する能すらない場合を除いて、だが。

「爺さん……っ」

予感は焦燥にとって代わり、不安は確信にすり替わる。

考えてみれば簡単な論理だ。自力で狩れない獲物が居れば、その住処に仕掛けをす

る。
　餓鬼でも考えつく、単純な話だ。
　果たして、そこには汚物が居た。
「ひゃ、ひゃ、ひゃ……アニキぃ、ほんとにいいんですかい？　殺しちまって」
「良いんだよ。この糞爺はあの糞餓鬼を匿ったんだぜ？」
「あはははは！　潰れたぞこいつ！　べちゃって、べちゃって!!」
　鉄臭い。
　小屋の前に立つそいつらを視界に居れた後――後の事は、あまり鮮明には覚えてない。
　気付けば口元は血だらけで、奥歯が罅割れてて、息するたびに喉が痛くて。胸の中に心臓があるのが分かるぐらいに体が熱くて。
　初めての罪悪感も、虚脱感も、高揚も、何もなく。ただ頭の半分潰れた爺さんの体に縋りついていた。
　到底、立てそうにないほどに力が抜けていた。
　疲れたのだろうか。
「爺さんっ、なんで……っ！」

おかしい。ジンにも殺せる程度の奴らなんて、爺さんの敵ではない筈だ。
爺さんは言ってないけど、ジンは気付いてる。小屋に置いてあるあの猟銃は、『ライフル』っていう軍の備品何だって。押し入れの奥の不思議なにおいの服は、『グンプク』っていうんだって。
爺さんなら、あの程度の奴らに殺されるわけがない。なんだ？　疲れてたのか？　毒を盛られた？　何で殺された？
これは夢だ。爺さんがサプライズで、死んだふりをしてるだけだ。
だってそうじゃないか。あんなにきれいに鹿を狩れる爺さんが、たかがオトナに殺されるわけがない！

だが、ジンの『優れた』思考は感情如きで停滞しない。命令しようが、既に集めきった情報から真実を推測――補足した。

――致命となる傷を負ったものが一人も居らず
――硝煙の臭いも初めは薄かった
――それに、爺さんの獲物には血が――
「――ッ」

じゃあ、なんだ。
爺さんは、こいつらを殺そうとしなかったとでも???
「馬鹿な。馬鹿な。んな馬鹿な話が……」
その後に及んで、ようやく気付いたのだ。
自身の慕っていた爺さんが、その実争いなどまるでできないのだと。
爺さんは老兵ですらなく、ただの逃亡兵だったのだと。
脳裏でいつかの声が木霊する。
『この正義の魔法使いに、儂は成りたいんじゃよ……叶わない夢と知りながらもな』
将来の夢について尋ねられ、逆に困らせようと聞き返してやったある日の。
本棚から絵本を引っ張り出した、月のきれいな夜の話し。
ああ、ああ……っ。
兵士として、戦士として、魔術師として――致命的な欠陥。
人殺しを躊躇う良心。人を慮る善性。それらに気を取られて足踏みする欠陥。
何度も思ったじゃあないか。ジンが何度も。
お人よしだなぁ、と。
「爺さん……爺さん……っ!!」
でも、なら、なんで。

「なんで……逃げなかったんだよ」
逃げればよかったのに。
そう言いだすことはできなかった。此処に立ち続けた爺さんの、大切できれいな何かを汚してしまいそうだったから。
その代わりに、ジンは空を仰ぐ。
「畜生……畜生……なんで、死んじゃうんだよ……っ！」
この日からジンは、お人好しな輩が大ッ嫌いになった。

＊＊＊

「はっはっはぁ、命を掛けてでも生徒を守るってことか？　いいねぇ、カッコい――《ズド》ッとぉ!?」
台詞の途中に奇襲気味に《ライトニング・ピアス》を放とうとして、それを中断させられる。
また先程のような礫状の黒靄（ガンド）が放たれた為に。
今度ははっきり見えた。
足だ。

ガンドが放たれたのがネルガルの足元であることをしっかりと視認したジンは、にやりと笑って推測が確かであると確信した。

――奴は恐らく、宝石に発動済みの魔術を込めているんだろう。戦場でも似たような道具を使ってるやつは見たことがある。

――だが、それにしても……

――……これ、一体いくら使ってんのかねぇ。

その日暮らしの自分では到底拝めないだろう金額と、堪え性の無い自分では作り上げることのできないだろう数の魔導器にジンは僅かな賞賛を胸の内でつぶやいた。

とんだ馬鹿野郎だ。

その一言が聞こえた訳でもあるまいに、ネルガルは笑みを深め、怒りの中に少しの愉悦を含めた色を見せた。想う女と両想いになれたような興奮を感じながら、ジンは高らかに笑う。

「はぁーっはぁ！　いいねいいねいいねぇ！　平和ボケしたお坊ちゃんお嬢ちゃんばかりだと思ってたが、中々そそるのがいるじゃあねぇか！」

「――。そうか？　じゃあもう少し楽しませてやるよ。《Blue―six（青の六番は）add（赤の二番と）and（混ざりて）integrate（和を為し）Red―two（緑の三番は）,（自らの緒を）Three―green（与えよ）without missing.

Ｍｅｔａｐｈｏｒ Ｐｅｒｓｉｓｔｅｎｃｅ（尾を食む蛇の輪の様に）》ッ！」

撒き散らした宝石の並列起動。

並行処理された術式が宝石内を満たし、魔力光を放射する。

過負荷で軋みを上げる触媒は過剰なエネルギーで溶け始め、込められた魔力と反応してエーテル化現象を起こす。流動する力、連結する魔力。空間そのものを法陣の画板にした魔術が、蒸発するよりも早く渦を巻く――！

流石のジンも、これには目を剥いた。大方先の魔術を連射する程度しか手は無いだろうと見くびっていたために、得体の知れない術式が起動したことに混乱を覚えたのだ。これはまずい。それの起動が完了するより先に、ジンはネルガルを撃ち殺そうと指を伸ばした。

出遅れた早打ち勝負。

だが、遅れることもない。

何故なら、雷は呪いよりも早く空を駆けるのだから。

「グッ！」

着弾と同時、銃弾に似た衝撃が胸を突いた。

だがその直後にまた、ジンの体に『とっておき』が――

「甘ぇ！」

直前、つまり【ライトニング・ピアス】の着弾と同時に、ジンが視界から消える。
単純なステップで避けたのだろう。それも人の視界から消え失せるほどの速さで。
なるほど。テロなどを引き起こすだけあり、危険を冒すだけの武力はあるのだろう。
そして。
「ガ……ッ」
――突き刺さった。
「ホーミングくらい付けるさ、たった一つの鎮圧用魔術なんだから」
着弾の衝撃に咳きこみそうになりながらも立ち上がり、膝から倒れるジンにそう吐き捨てる。確かに術の原理はガンドと同じだ。だが、ただ威力を上げるだけが魔術の肝ではない。様々な効果を付与し、小さな術で最大の効果を引き出す。それこそが魔術師の戦い方なのだ。
――あれ、そんな事、誰に教わったんだっけ。
「なん、で……」
「何故立ち上がれるのか、何故死んでないのか、か？」
簡単な話だ。衝撃は走れど、【ライトニング・ピアス】の殺傷力の大半はその電撃に寄ったものだ。
例えば絶縁体を挟んだり、避雷針を脇に建てたり、或いはそれその物を地面に逃がし

たりすれば体は焼かれない。
それと同じだ。
「炎熱、冷気、電撃……そんなものに対策を持つことが、そんなに不思議か？」
何なら物理に毒、病、呪い、催眠、洗脳、昏睡にも備えている。それぞれが別々の宝石を触媒としているから、いつも嵩張るのが玉に瑕だけど。
それでも、たったそれだけで安心できるなら安いものだ。一番の備えはエレちゃんだけど、女の子になにもかも任せるのは格好悪いじゃないか。
それに、たった一人に防衛を依存したら、その一人が居なくなった時が怖いしね。
「んな、偏執な……」
掻き消えるような声を最後に、ジンは倒れ込む。床に打ち付けた頭の音の後、背後から跳ねるような音が聞こえた。
「僕からすれば、皆が無防備に過ぎるんだよ」
何せ、そこらの人が拳銃を隠し持っているかもしれないような世界だ。日本でのうのうと過ごしていた日本人が、突如ヨハネスブルグに放り込まれても平和ボケしていられるかっていう話だよ。
備えよ、常に。
優雅でなくとも、泥臭くとも良い。

死にたくないなら、備えるしかないのだ。

「大丈夫ですか？　システィーナさん」

柔らかい声を心掛けて、背後の少女に語り掛ける。

何がスイッチかは知らないが、茶番で濁した恐怖はまたぶり返しているようだ。

トラウマにならないと良いが。

目線を合わせ、微笑みかけてもう大丈夫だと語り掛ける。安心したように体から力を抜いた彼女に、今なら大丈夫だろうと判断して彼女の後ろに回った。

勿論拘束を解くためだ。

手に縄をかけ、それを解こうとした。

その時だった。

「――ここかっ！　って、あれ？」

振り返ると、そこに居たのは最近臨時講師として教鞭を振るい始めたグレン先生が立っていた。

彼は扉脇のエレちゃんに気付き事情を問いかける。僕が代わりに簡単な事情を説明すると、頷きを返してジンを縛り上げ始めた。

……あの、その縛り方はどうなんでしょうか。

「えー？　なんのことかボクわからなーい」
「イラっと来ますね、その口調。てかどこで習ったんですかそんな縛り方。
　ここには二人も女性がいることを忘れないでくださいね？」
「分かってる分かってるって。ところで……えーっと」
「ネルガル＝リルです。ネルガルとでも呼んでください」
　分かってない奴の返事じゃないか、それは。
「ああ。んじゃネルガル先輩……先輩？　先輩、医務室勤務何だし自白剤とか持ち合わせてないスか？」
　そこで、調子を取り戻してきたシスティーナが虚勢交じりに突っ込んでくれた。
「あるわけないでしょ！　此処は学院ですよ!?
　というか医務室にそんな物騒なものがあるわけないじゃないですかッ！」
「まぁ、それもそうだ――」
「ありますよ」
「――あるってさ（白目）」
「「なんでっ!?」」
　いや、正確には材料だけど。
　流石にジョークのつもりだったのだろうグレン先生が、ぼりぼりと頭を掻いて反応に

困ってる。
　だから僕は揶揄うような口調で冗談を言った。
「ただし改良された寄生虫を生きたまま飲ませるという形になりますが、よろしいですか？」
「よろしいわけねぇだろこいつらより先に俺らが盗っ捕まるわっ!?」
「冗談ですよ、冗談。自白剤の材料はあるので、調合するなら２０分はいただきたいですね」
「ああ、何だ冗談か……ってなるかボケェ！　物騒すぎるわっ！
　……それはそれとして自白剤の調合もできるんすね、先輩。以前はどちらに？」
「スラムでちょっと闇医者を……おっと」
「（冗談であってくれ……頼む、それも冗談であってくれ……！）」
　いやぁ、他人を揶揄うのって楽しいなぁ！
「ま、此処じゃなんです。医務室まで連れて行きましょう。エレちゃん、宝石の回収よろしく」
「分かったわ。それじゃ、マスターは先に――」
　そう言って腰を落とし、亀〇縛りされたジンの体を抱えて立ち上がろうと――
「――マスターッ!?」

――刹那。

サーヴァント由来の霊的直感能力が警鐘を発し、パスを通じてその騒めきが流入してくる。

鉛よりも重い時の中、臓腑に氷水を駆けられたように思考が冷え込み、体に先んじで意識が立ち上がる。

首根っこをひっ捕まえられるように急に立ち上がり、ジンの体を放り投げ、狭い準備室を飛び出して辺りを見回す。

〝敵襲だ〟

目を左右に走らせる。敵影確認。白――いや、灰色。骨？　スケルトン――ではない。死霊ではない。魂が無い。死んでもない。無機物――ゴーレムだ。輪郭、頭蓋骨がトカゲに似ている。竜種に似ているというべきか。神秘の臭いが濃い。恐らく竜牙兵。数は多数。概算三十以上。奥の法陣より召喚されている。構成式に見覚えはある。たしか神代の未改良魔術。先生と――先生？

脳裏に引っかかるそれを今は関係ないと切り捨てながら、彼我の戦力差を確認する。その一体一体が、確実に今現在の僕を上回っている兵士。当然、三流魔術師のグレン先

生とただの優等生のシスティーナでは対抗しようがない――逃げるか？

無理だ、そんな体力と身体能力が僕には無い。研究ばかりではなく、フィールドワークもするべきだったか。

医者のフィールドワークってなんだよ。風土病収集？

混乱している。

突然の襲撃に無意識に胸を掴んだ。心臓の真上にある令呪が脈に合わせて鼓動するように熱を持つ……ような錯覚を起こす。

手持ちの宝石を確認するまでもなく、非生物相手の勝算など僕には無い。

強いて言うなら伝染病をばら撒いての殺戮ぐらいしかできない僕では、命の無い敵に対する抵抗手段を持ち合わせていないのだ。

そもそも医者がそんな事態に陥ること自体があり得ないことなので、寧ろある程度の武力がある方が可笑しかったりもするはずだ。

だがまぁ、僕は色々と心配症なのだ。特に、この世界は法整備が甘く、小市民でも名前を知る様なテロリストが未だに息づいている国だ。備えるに越したことは無く、寧ろ今回は備えが足りなかった。

詰みだ。僕の手ではどうしようもない。

――ああ、しくったなぁ。

溜息を吐いた僕の肩に、だが細くか弱げな手が乗せられた。
「大丈夫、私がいるわ」
ああ。
「そっか。それじゃあ、安心だ」
冷たく、嫋やかで、でも頼もしいその手を握り。こんなところで彼女（僕のジョーカー）に頼る事へ惜しさと欠片程の罪悪感を抱きながら。
廊下の端から端、奥の奥に至るまでを埋める骨の軍勢を前に安堵の息をついた。

「――任せた、エレちゃん」
「任されたのだわ、マスター」
蹂躙は一瞬のことだった。

「――行くのだわ」
鼓膜を震わせるのは、鉄のように冷たい鐘の音。
呼応するように腹の底まで震える竜の咆哮が続いく。
呼び出されたのは死者の国の権威、女主人の忠実な下僕。嘗て星を制した種族の亡骸。

それが、波のように竜牙兵を流し砕いた。
押し込まれた彼らは押し合い、圧し合い、時には互いの自重で互いを砕いて散っていく。
後にはただ、凶つ骨片と虚ろに冷めた空気のみ。
「おいおい、あの輪郭（シルエット）……まさか竜種かよ!?」
悲鳴の様な叫び声に答えるものは唯一人。
だがそれは、校庭などではない。
「知らないのだわ。彼らの生前がどうであれ、死んだらみんな一緒だもの」
冥府の女主人は平等である。
神であろうと、人であろうと、虫であろうと、竜であろうと。
極めて平等に、公平に、職務を進める。
刮目せよ。遍く国の、あらゆる死者の帰る国の主を――！
とまぁ、澄ました風にエレちゃんは言ったが、その実少し自慢げなのがパスを通じて理解できた。
当然、気付いていることにも気づかれていて、だからパスを通じてそれを秘密にして

欲しい、という声が聞こえた。
バラすつもりはないよ。
そう返すと、安堵したように体の強張りを緩めた。
威厳って大事だよね。うんうん。どうでもいいけど、僕もノリは良い方なんだ。
「それで、どうするのかしら？　こんな事態なのだし、あれで終わりだとも思えないわよ」
「あれは確か、竜の因子を材料に竜牙兵を大量召喚する魔術の筈だ。なら、少なくとも相手は竜の因子を手に入れられるだけの力がある。そんな相手がこれ以上の備えをしていないというのは考えにくい。
……それで、どうしましょうか、グレン先生」
「って、俺に丸投げかよ!?」
危機感を煽るだけ煽ってグレン先生に話を振ってみると、理不尽な話でも振られたような形相で突っ込みを入れられた。いや、確かに丸投げするつもりだったけど、別にいいじゃないですか。
僕、医師ですよ？　何要求してんですか。
「あぁ、そういやそうだったな。
因みに、あいつ鎮圧した奴は……」

「もう使えないですねぇ。
　いや、フェジテごと滅んでいいなら手段は山ほどありますけど」
「物騒すぎるわ!?」
　もともと持ってたガンドの残弾は四発。牽制で二発、大技の触媒として一発と、それの増強にもう一発分。あれで仕留めきれなかったらエレちゃんに頼るしかなかったが、エレちゃんの攻撃の余波でシスティーナが大怪我負いかねなかった。
　実は割とぎりぎりだったことは、僕の胸の内にだけとどめておこう。
「――ほう、ならば貴様を殺すのは後回しにしてやろう」
　あ、新手だ。
「わぁ、なんかフラグ立てちゃってたかな?」
「マスター、マスター。なんか凄く強そうな人が居るのだけれど援軍かしら?」
「だとよかったんだけどね。どう見ても敵だね……ごめんエレちゃんッ!」
　無拍子（ノモーション）で放たれた剣を、エレちゃんの背に隠れることで避ける。とっさに発熱神殿でも取り出したのか、重い金属塊を弾き飛ばす音が響いた。
「――ッ、いきなり何をするのだわ。戦士というのは、まず名乗りを上げてから殺し合うと聞いたのだけれど」
「それはすまない、レディ。生憎とこちらはテロリスト。犯罪者なのだから」

……理性的、予想外の事態にも柔軟に対処する、敵対している女性をレディ呼び。
うわぁ、強キャラ臭がプンプンする。
グレン先生グレン先生。なんか秘策とかおありで？
「んなもんあったらもう使ってるわ！
奥の手は無くもないが、この状況じゃあどれも使えねぇしなぁ……そっちはどうなんだ」
生憎と、自分、戦闘はからきしなんで。
「そういや医師だったな、あんた。
……ん？　それにしては若過ぎないか？」
やだなぁ、グレン先生が言えたことじゃないでしょ？
「それもそうか」
……ふぅ。
冷ややかに睨み付けてくるテロリストは、傍らにその五つの剣を滞空させながら何かを呟き終えた。
「……？」
どうしたのだろう。様子からして、魔術の詠唱でもしたのか。後から気づいた違和感によって、その体で魔力の蠢動が行われたことが確認できた。だが、変化は見られない。

世界が書き換えられた様子も、捻じ曲げられた様子も、置き換えられた様子もない。
不発か？
「……やっちゃえ、エレちゃん！」
「分かったのだわ！」
冥府から槍檻を引き出し、テロリストの男に向けて打ち出す。雪崩か、機関銃（ガトリング）の様な物量攻撃がテロリストを圧し潰す。
「あれ、魔術じゃねぇのかよ……」
「何か言いました？」
「いんや、なにも」
焦りを見せた男に一気に畳みかけ、四方に槍檻を突き立てて拘束。魔導器であろう五本の剣は、いずれもエレちゃんの猛攻によって砕け散っている。
グレン先生がロープを持ってきて縛り上げるが……。
「先生、【スペル・シール】は要らないんですか？」
「要らねぇな。今は誰も魔術を使えない」
「それはどういう……」
「俺の固有魔術（オリジナル）だよ」
へー。

……へぇっ!?
「固有魔術(オリジナル)持ちの魔術師、か。実力を見誤ったな」
「いや、こんな切り札があるなんて想像が至る方が可笑しいと思いますよ?」
「ふっ。それもそうか……」
……いや、まて。そういえば風の噂で聞いたことがある。一年まがふっ」
「――っと、それで、今どうなってんだ? 生徒は無事なのか?」
「流れるように気絶させましたねぇ……」
なんか後ろ暗い過去でも抱えてるんだろうな。きっと。
お互い様なので詮索はしないけど。

その後は全てグレン先生に放り投げ、僕は生徒たちへの事情説明の後に医務室へ戻った。単純にできることがなくなったのだ。
最後のテロリストがいるであろう『白亜の塔』付近のゴーレムはエレちゃんに一蹴してもらったが、その奥の魔法陣は僕らではどうしようもない。けども解呪の時間も有り余っていたために、全ては消化試合の様相を見せていた。

システィーナやルミアを今の教室に戻すのは、少し時間を置いてからにした方が良いだろう。そういう判断から僕らは衛兵が駆け付けるまで雑談を交わした。

流石は優等生か、グレン先生と一緒になって僕の使った魔術について根掘り葉掘り聞いてきた。はぐらかしたけど。好奇心旺盛だね。

ていうかせめて宝石回収ぐらいは手伝えよグレン先生。グレン先生の歯邪魔でしかなかったぞ。

隙あらば懐に隠そうとするんだからもー。

事情聴取さえ終われば自由なので、いっそグレン先生に授業でもと促してみたが、まぁ当然そんなことができる体調でもない。

今教室に居る彼らにとっては、せっかく休暇返上の補講日に、しかし何一つ授業が進まなかったのだ。これは学園長に医薬の差し入れをするべきかな。

なんて。

斯くして僕の医務室勤務史上最大の事件は幕を閉じた。事情聴取が鬱陶しく、また事情を知ったセシリア先生が吐血しまくって失血死しかけたが、何も問題はなかった。

ないったらない。少なくとも指名手配やら冤罪やらは無いので問題なしだ。

うん、第七階梯（セブンデテ）の魔術師さんに目を付けられたような気がしないでもないけど、問題はない！

――最悪アルザーノを冥界に落として逃げ延びれば全部解決だし、ね。

第二幕　木漏れ日に揺蕩うように優しく

ロクでなし魔術講師と恋愛妄想（エロトマニア）　七話

浮足立つ

フェジテの街は活気に満ちていた。起きたばかりの体に血が巡り始めるように、人々は賑やかに街を満たす。普段よりも騒がしい彼らは、来たる祭り――魔術競技祭に胸を高鳴らせていた。

学生は　自らの活躍に思いを馳せ、或いは級友の雄姿に期待を寄せて。講師は会場の準備に、特別な客人を出迎えるのに失礼のない備えを。そして全く魔術とかかわりのない人々も、例年には現れないあのお方の来訪にざわついていた。

気の早い露店は既に魔術競技祭で出す食品やらを売り始め、飯時には揚げ物や肉を始めとする香ばしい匂いが石畳に染み付いていく。

高揚する彼らに感化されてか、巡回する衛兵らの足取りもどこか高らかで、その顔は期待が滲んでいた。

祭りだ。

もうすぐ、楽しいお祭りが始まる。

「――ふ、ふふ、ふふふ」

だが、それと相反するように薄暗い部屋の中、アダムは俯きながら肩を震わせていた。自然と漏れ出る笑いに体が揺れている。何がそこまで嬉しいのか。楽し気なその声は、けれど部屋の様相のせいで不吉さすら醸し出している。

さながら、爆弾を仕掛けたテロリスト、毒ガスを撒く前の殺人鬼にも似ている。

その手に持つのは小さな桐箱。掌大の遺骨か、或いは臍の緒のミイラでも入っていそうな、見ているだけで息の詰まる様な箱。

そんなことは無いのに、まるで自分がその小さな箱の中に押し込められているような圧迫感と、そんな異常性を帯びた箱に対する恐怖を与えてくる。

彼は愛し子にそうするように、そっと蓋を一撫でした。きっとそれはとても大切な物なのだろう。

或いは、思い入れか。

育て親が死んで復讐者に成り果てたある男は、育て親から受け継いだ体術のみでそれらを殺したという。

遺品遺産は死を想わせる楔で、ある意味では死者の代弁を為す象徴なのだろう。

全ての行動に意味があり、全てのものに価値があるのならば。

きっと石にも遺志が染み渡るはずだ。
そうしてできた遺品はきっと、無二の物となる。
……けどまぁ、そんな話はきっと関係ない。
ゆっくりと開けられる桐箱の隙間から虹色の燐光が微かに漏れ出る。
雨上がりの虹にも似て、美しい。特にこの薄暗い部屋の中ではそれが良く映える。
「ふふふ、ふふふふふ、ふふふふふふふふふふ――」
やがて開け切った箱の中には、星型八面体の結晶と、その欠片である正四角錐の結晶がぎしりと詰まっていた。
緩衝材の綿も薄く潰れるほどに溜まったそれらは世界の資源――数多の可能性が結晶化した超常の物体。
「溜まったなぁ……ふふ、ふふふ！」
そう。
虹色のアレであるッッ!!!（聖晶石とか聖小片とか）
聖晶石とはぶっちゃけ課金アイテムだ。課金してないから無償石か。
聖晶片はそれと交換するアイテムと言ったところだろう。ゲームでは七つもあれば石一つになったけれど、アダムが変換しようとすると八つは必要になる。つくづくダ

ヴィンチちゃんは天才なんだなって。

「ふふ……ふぅ」

ストーリーをクリアすれば山ほど手に入るそれを、何故アダムがご神体を拝むオタクの様な顔で見ているのか。それは、その素材の貴重性と異常性と、何より調教されたプレイヤー魂に端を発している。

召喚陣も召喚システムもないどころか、聖杯も伝承結晶もないこの世界において、一見すればそれは無価値な資源に見える。

いや、召喚も糞もねーよ、と。聖杯戦争も人理修復もしてないんだから、意味ないじゃんと。

それは、大きな間違いだ。

忘れてはいないだろうか？　聖晶石は六騎のサーヴァントを纏めて復活させたり、或いはアタランテが飛びついたあの黄金のリンゴの代用になるという事を。

結論を言おう。

アダムは、疑似的な蘇生礼装の量産を可能としていた。

ああ、実は前世で獅子頭だったりするのだろうか。米国、量産技術の申し子なのか。正直な話をすれば、単なる蘇生というだけなら前例は山ほどある。

流石に死体や魂が損傷していたり、死後数時間も経っていると無理だが、そうでなけ

れば蘇生自体は可能だ。これも白魔術の発達故の功績である。
やっていることは基本的にＡＥＤと変わらない。心臓が止まっているならばそれを動かし、脳が傷を受けているなら修復し、魂が抜けていたら冥府までも潜って引き戻す。
軽く漁れば、数件は見つかる前例だ。
ではアダムの礼装の何が異常か。いや、何が戦争にとって有用だったのか。
持ち運びの便利さ。保険としての性能。確保できる数。即効性。適用できる遺体の損傷の範囲。
その何もかもが、既存の白魔術を凌駕するためである。
例によって消耗品だ。既製の絶対数は百にも届かない。
だが、それを一騎当千の強者に渡せばどうなるだろうか。もしかすれば、単騎で国一つを攻め落とせるのではないか。
それほどまでの品なのである。

……あ、でも別に今回作る奴とは関係ないですよ。

「さて、始めるか」
アダムはそう言って、机上に並べた薬研を引き寄せた。

まずはメルキュールの生体研磨用銀砂を、精霊根の汁液と共に塗布した薬研で聖晶片を磨り潰す。その結晶がへき開しないような軌道を心掛ける。エンキ産霊水を旧書派のやり方で浄化したものを少量ずつ加え、土塊の様な手応えになるまで混ぜ合わせる。

ゴリゴリ、ゴリゴリと手を動かすアダムの背中を、シャルロットは部屋の奥にある一人用ベットに腰かけて眺めていた。

薄暗いからこそ良く分かる僅かな光量の変化に目を光らせながら、アダムは針に糸を手を通すように繊細に器具を操作し続ける。

絶えず机の上で舞う手は洗練されていて、きっと職人芸と呼ばれるそれなのだろう。

片手で使用した容器の共洗いをし、もう片方の手で次に使う溶液の調合をする。その間、目は抽出器具からそらさずその具合を見続けている。

たった二本の腕でも絡まりそうな、端から見ていても意味の分からない器用さ。一体幾つのタスクを並列して行っているのだろう。

本人は慣れというが、慣れただけで果たしてこんな動きができるのか。

シャルロットの目からは、それもまた確かな『達人技』というものに見えた。

錬金術師が弟子を取るとき、その大抵の第一声は〝敬意をもって、道具を扱え〟だという。

別に道具を敬えという事ではない。敬意を払う様に丁重に扱わなければ、その大抵の

調合が失敗するためである。
故に、〝敬意を払え〟と。
神に祈るように道具を扱えと教えるのだという。
なら、きっとアダムは神が見えているに違いない。
ああそうだ。
たしか五年ほど前に彼が『アトラスの思考法を身に着けた』と喜んでいた。その時は素直に祝ったが、心の中ではまだ身に着けていなかったのかと驚愕したものである。
素であんな訳の分からない並列作業をしていたと？
……劣等感に悩みますよ、まったく。
シャルロットは静かに苦笑する。
だが、劣等感という割にはその笑みは大層自慢げで。
目には憧憬に似た慈しみが宿っていた。

＊＊＊

時刻は既に日の出を過ぎ、街に血が通い始めるようになった。
朝靄の残る窓の外を眺めながら、ぼんやりとマスターの傍に佇む。心地良い、穏やか

な静寂だ。
「んー、終わりっ」
上に延ばした二本の手は、しかし何か作業の続行とする動作ではなかった。
ゴキゴキと首の凝りを解しながら背伸びをしている。欠伸の音が耳に届いた。作業は終わったみたいだ。
「お疲れ様です、マスター。もう朝ですよ」
「ありがと、シャルロット。……まぁ、日本人は大半社畜気質だし、これくらいはね?」
「私は何も言ってませんよ?」
「後ろに居るから顔も見えないね……うん、うん。ごめん、威圧感が凄い」
「なんのことでしょうか」
薬包紙に小分けにされて包まれた弾薬が散乱する机上を見て、熱が入り過ぎたことを自覚した。流石に作りすぎたようだ。これなら少なくとも二十発分は銃弾を作れる。それだけあったところで何ができるわけでもないのに……何か、別の用途でも探ろうか。
「さて、朝ご飯はどうしよっか」
「もう私が作っておきますから、マスターは寝ててください。一時間くらいしか寝れなくても、寝ないよりましでしょう?」

「んー、わかった」
ふわぁう、と堪えられない欠伸が漏れた。
ああ、これは大分疲れているな。栄養ドリンクで誤魔化している分の疲れを実感し、椅子に深く腰掛ける。
一時間となると仮眠だ。だが、今の疲れでベットに横になったら起きれるものか分からない。寝坊しないよう、完全に寝込まないような体勢で寝る。
「じゃあ、少し寝るよ。おやすみ」
「はい。おやすみなさい、マスター」
解されていくような安らぎの中で、パンの焼ける香ばしい匂いが漂っていた。

学院生の朝は早い。伊達に2桁の乗算の暗算を必須とされていない。
学費自体は奨学金やら支援やらで何とかできるが、その分下層階級――平民身分の学生には、素の能力の優秀さが要求される。
周り以上の努力や天性の素質、或いは遠国の知識、特殊な魔術、研究成果や論文なんかもありだ。
総じていうと、学院生は最低限でも優秀でなければその地位を維持することが叶わない――魔術師の素質だけで居続けることのできる身分ではないのだ。

それがどういうことかというと、つまりこう言いたいわけだ。

――学院生の朝は早い。

起床は日の出と共に、街の人が水を汲む音を聞きながら朝食を終え、日の出たばかりの朝日を浴びて学院へ足を運ぶ。

教室に着いた時には、もうだいぶ席は埋まっていた。

「いや、遅刻したかと思って焦ったよ。みんな、何時もは此処まで早くないのに」

「グレンくんが原因みたいですね。『あの同類と思われたくない』とか、『あいつの前で遅刻したら死ぬほど煽られそう』だとか、そんな理由が多いみたいですけど」

「反面教師か」

「ですね」

あー、焦ったー。

未だにバクバクと余韻を残す胸に手を当てて、机に臥せる。

いつも通りの社交性で女生徒らと談笑してきたシャルロットは、この事態の原因と思われる人物について語り始めた。

「にしても、やめませんでしたねー、グレンくん。あれだけ止めたがってたのに」

「まぁ、そりゃ色々あったんだろうさ」

確かヒロインらとの絡みで色々思い直して……っていう感じで主人公は講師を続けていたはずだ。いや、原作で心が折れた原因を取り除いたのだから、単純に『そろそろ働かねーと本当に飢え死ぬっ！』という危機感を抱いただけかもしれないが。

……というか、特務分室から『お守り』の受注、未だに来ないんだよな。

まぁ、出されても困るんだけども。聖晶片の数もそれほど多いわけじゃないし。量産ができない。

でも『死を覆す』なんて馬鹿げた礼装、例え消耗品でも買い占めようとすると思うんだけどなぁ。やっぱりセラさんが約束守ってくれたのかね。

約束を守るのはいい事だ。

でも少し『お守り』の情報が漏洩してあちらこちらから狙われるのも悪くないなぁ、なんて思ったりもしたんだよね。

備えもいろいろしたのに、これじゃまるで僕がテロリストの襲撃を妄想する中二男子みたいじゃないか。

いつまでたっても心は子供、成長なしの社会生活不適合者！　……ってか？

うん。大人になっても心が子供な奴は、普通にウザいだけだよね。となると僕は社会生活不適合者だったのか。

まいったなぁ。反省しないと。

「ああ、それともう一つ」
「ん？」
「今日こそ競技祭の振り分けを決めるって、システィーナさんが言ってましたから」
一瞬、時が止まる。聞き覚えのない話題、知らぬ間に平行世界にでも迷い込んだか、と

あ。
「……ああー、僕が寝てる間にか」
「そうですねぇ。最近まともに寝てませんですもんねぇ……お話の最中に寝るぐらいに」
ハイ、ごめんなさい。
「よろしい。……ふふ、マスター。マスターはどの種目に出るんですか？」
「いや、僕が出るなら錬金術系列以外は有り得ないだろ」
僕は転生者であり、その為この世界の原住民とは深層心理の構造が異なる為だろう。僕はみんなが使う呪文を唱えても、皆の様な魔術を発動させることができない。
いやはや、【ショック・ボルト】呪文唱えて地面が割れたのには驚いたな。何処がどうなってそうなったんだ。
そんな僕は、実技の時は調律用の礼装や発動代行の礼装を付けて挑んでる。ズルして

いる感が否めず、一年次は学院内で2番目に胃薬を服用していた。

今ではもう慣れたけれども。

実技では何とか誤魔化せても、流石に大勢の目線が集まる場所でも同じように誤魔化しきれるとは思えない。その為の礼装があるならまだしも、起動した時点でセリカ＝アルフォネアに見抜かれるだろう。

一応、自分用に改変した呪文なら普通の魔術で起こす結果と同じことをすることもできる。だがそれは少しでも魔術に詳しければ、即座に気付けてしまうような改変――魔改造というやつだ。

そんなものを大人数の前で使用して、尚且つ何の間違いかで異能者扱いされた日には悲惨なことになるだろう。ヒトラーの前で黒人が白粉落とすような物だ。

死ぬ。確実に死ぬ。

だから僕は競技際に出たがらない。でても錬金術系統のみなのだ。

錬金術なら、呪文の腕とかには注目されないから。

……別に錬金術系統の種目は人気が少なくて落ち着くからとか、そういう理由ではない。

ほんとだ。

システィーナさんが教卓を前にして声を張り上げていた。
どうせならば全員で参加しよう、とかいうお題目で声を張り上げている。
ああ、本当に、良くやるねぇ。
そんな皮肉主体の心の声は、しかし確かに感心から湧き出たものだ。そこに嫉妬だとか煩わしさだとか、そんなものが混ざって皮肉染みたものになったのだろう。
そんな自分の心に対して、子供の頃に作って遊んだスライムを思い出した。
洗剤とか水とか着色料を混ぜて、異なる色同士を混ぜて、最終的に『混沌』と呼びたくなるような『黒にもなり切れない混色』が出来上がった。
……なんで子供の頃ってあんなに色を混ぜて黒を作りたがるんだろうなぁ。
何だ？
綺麗×綺麗＝サイキョー！　ってことか？
馬鹿じゃねぇの？
馬鹿だったわ。
「はぁぁ……死にたい」
「はいはい。あ、お話長くなりそうですし、お茶飲みます？」
「飲む。アイスティー？」
「そうですよ」

シャルロットがポットから淹れたそれを受け取る。ひんやりと掌に伝わる冷たさは、紛れも無くアイスティーの証。

香りがなんだのと言われるが、自分は冷たい飲み物じゃないと落ち着かない性質なのだ。仕方ないだろ。

今は授業時間でないので、別にこうしてお茶を嗜むことに気後れすることは無い。というか、自由時間なので咎められる人がいない。

システィーナさんもそれが分かっているからだろう。本来自習だの友達との会話だのに充てる時間を割いてもらっているという自覚が、僕らの行為を責めさせるのに躊躇させている。

うーん、美味しいっ！

「……あ、あの、アダムくん？」

「はい？」

「そのー、システィが凄い目で見てるんだけど……」

ええ、気味の良い目つきですね。

愉☆悦……って奴カナ。

「まぁ、あこの一杯だけですので。喉渇いてるんですよ」

とは言え、そんなことを口に出せるほど度胸があるわけではない。

普通に考えてそんな奴、村八分にされても仕方ないから。
「うーん。その、早く飲み切ってね？」
「分かりました。……これで？」
ぐびっと残りのお茶を飲み干して、手早く片付ける。
軽い挑発も楽しんだことだし、そろそろ真面目に話を聞くふりに戻ろう。
いつもの眠気も、この一杯で完全に覚めたし。ハーブティーってスゲー。
そうしてコップをシャルロットに返し、頬杖をついて講壇を見下ろす。荒い溜息と共にシスティーナさんは肩を下ろし、ルミアさんは自席に戻った気配がした。
……真面目に話すとすると、一年次の頃の『競技祭に出たい！』なんて思いはこのクラスから消え去っている。その原因は明確、今回の競技祭には女王陛下が来られるからだ。
ああ、誰が好き好んで天皇に無様を見せたい？　しかも、当の天皇が権力を握っている時代に。僕の生まれた日本のように、置物になっている象徴ではないのだ。
元より成績の振るわない生徒は当然の事、成績の優秀な生徒だって臆してる。例外はギイブルやシスティーナさんぐらいだ。
「話は聞かせてもらったぞ！　このグレン大先生に任せるんだなぁ！」
わ、システィーナさんすっげぇ顔してる。

いやみんなすげぇ顔してるな。「面倒なのが来たか……」って顔だ。
しかしここからは早かった。それこそ、アニメ第一話の導入の如くするする話が進んでいった。

「んでー、あー、シャルロットは――『代理決闘』だな。うん」
代理決闘。自身の代わりを立てて行う決闘。
魔術師の場合は、即ち『自身の使い魔による決闘』を指す。
……使い魔（サーヴァント）が使い魔使役して戦うのかぁ。
天使さんに頑張ってもらうのかな？　まぁ、一見しても深く調べても謎存在だけど、それでも英霊（サーヴァント）の一部だし。
何も使い魔とは比べ物にならないスペックだろうな。
「今年のルール次第では、全戦全勝も夢じゃなさそうだね」
そう呟いて横を向くと、シャルロットは意外にも乗り気で、笑っていた。
珍しい。去年はずっとなぁなぁで済ませていたのに。
「なるほど、最近天使さんとあまり一緒じゃなかったので、丁度いいですね。
やって見せましょう、全戦全勝……！」
理由は分からないが、どうやらシャルロットは凄くやる気のようだった。

むんっ、って意気が可愛い。うん。理由なんてどうでもいっか。

僕に割り振られたのは『品評会』。要するに材料を持ち寄り、魔術を使って自由に制作して、その出来を競う種目。

審査員によって得点が定まらない種目で、基準も不明瞭。密かに情報収集と買収の手腕を競う種目なのではないかと囁かれてる。

因みに審査員は当日まで公開されない。というか教員から抽選で決めるみたいだ。昨年いろいろと調べて知った。なので教員方に聞いて回ったり、或いは探りを入れるのは全くの無意味だったりする。

抽選を偏らせるために賄賂をするならともかく、まず選定方法が抽選だと気付くのが三年次だというのだから、二年次にこのような手を使うものもいないだろう。

……今年度の四年生の代は事前買収とか盤外戦術とか闇討ちとかで酷く盛り上がったらしいけれど。

それは例外だとしよう。実際希少な例だと聞いた。

この種目は割り振られた瞬間から既に始まっているようなもので、制作物を決め、予めそれに必要な『部品』を作ったり集めて置き、それを当日持ち寄る……というのが基本。

まぁ、素材持ち込みと言っても部品がダメとは書いてないからね。その場でぶっつけ

で作るような場合は、手順で魅せたり、捻りを加えたり、色々な工夫を凝らさないといけなくなる。

ただ、事前準備なしでも勝てなくはない、というのがこの種目の面白い所なのだ。その年の審査員に技術屋気質の教員が居れば、部品の持ち込み、調合済みの薬品の持ち込みは逆に不評になることもある。

その時その時で柔軟に対応できるよう、組み立て用部品の他にも技術の披露用の製作品とそのレシピが必要だ。

あ、これは全部教員の気質を理解していることが前提の話だ。

滅多に交流を取らなかったり、或いは一部の関心をかうことが軽犯罪に入る様な人物であった場合、その年は阿鼻叫喚となる。

是非もないよね。抽選なんだから、結局は運だ。

「なぁ、アダム。今年は何作るんだ？」

「んー、今年は、そうだなー。

……半永久的に飛び続ける竜の模型でも作ろうかな」

「お？　なんか恰好良さそうだな！」

「だがそれで審査員の心象は掴めるのか？　言うまでもないだろうが、技術が伴わなけ

れば幾ら出来が良くても――」
「第三種永久機関のエンジンを組み込もうかなって」
「――まて、待ってくれ。色々と待て。一言の内に突っ込みどころを複数入れるのは止せ。永久機関ってなんだ、完成してるのか？　というか第三種ってなんだ。また新しい分類でも作ったのか」
「いや、さっきまで徹夜してたんだけどさ、その際にふと思いついちゃって。やってみたらできたのよ。他時間軸の自己存在を燃料にする機関。
　思ったけど、永久機関か？　これ」
「時間軸への干渉……だと？　おまえ、おま、おまえ……」
「そっ、それよりカッシュは競技祭どうするの!?　確か『決闘戦』に選ばれたんだよねっ！」
「お、おう、そうだな！　グレン先生は『【トライ・レジスト】と回避で耐えて殴り飛ばせ』ってさ！　相変わらず型破りな人だヨナー！」
「……だが、効果的でもある。確かに魔術師の主な戦法は魔術の打ち合いだが、至近距離まで縺れ込めば一発の拳の方が呪文を使うよりも早いからな」
　あ、帰ってきた。
「ギイブルおかえりー」

「お前はもうしゃべるな」
「酷いなぁ」
「妥当だと思うよ」
「あれ、セシル？　セシルさん？」
「まぁ、アダムはシュウザー教授と同レベルだって言われるぐらいだしなー。いろんな意味で」
「カッシュカッシュ。友達を売らせるようで悪いんだけど、それ誰が言ったんだ？　大丈夫、ちょっとＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＨＩするだけだから」
「ん？　確かギイブルだな」
「ちょっ！」
「ギイブル……お前に教科書では教わらないことを教えてやるよ……！」
「止めろ！　にじり寄るな！　また変な噂が流れるだろうがッ!!」
ぎゃーぎゃわいわい、やいのやいの。
基本的にシャルロットが居ない昼食は、これぐらい騒がしい。けど周りはもっと騒がしいから目立たない。
「知ってるか？　最近人工金鉱石の錬成実験で精錬された魔力結合性メリストス鉱が酸化すると計六波長の瘴気エネルギーを放出するんだけどな、実はこの中の第二瘴気エネ

ルギーがな――」
「やめろ！　本気で気になる分続きが聞きたくなるからやめてくれっ！　我に返った後に肝を冷やす思いはうんざりだ！」
「あっはは、何そんな慌てんだよ、ギイブル」
いやー、他人を揶揄うのは楽しいなぁ。
いけないと分かっててもついついやっちゃいたくなる。

そして放課後。
近い休日に四人で街に繰り出そうかという約束をして、校門で別れた。
但し僕が向かうのは自宅ではない。図書館だ。シャルロットが中庭で練習しているらしいから、彼女を待つために。
「んじゃ、また明日」
「ああ、またな！」
「また」
「みんな、またね」
そう言って手を振り、ばらばらに分かれていく。僕が向かう図書館は学院の敷地内にあるので、踵を返す。

校門から去っていく人影の中にシャルロットの姿は、当然ながらない。シャルロットは、少し中庭で競技祭の練習をするらしかった。一人で帰るのも、一人で家に居るのも寂しいので、僕は図書館でネタ探ししようとしているわけだ。

だが……。

「さて、本当に何を作ったものか。

『半永久的に飛び続ける竜の模型（仮名）』がダメなら、思い切って人工太陽でも作ろっかな」

何もセシルらが言う程に突飛な発想ではない。

こんなもの、前世では普通に思い描かれて居た空想で、今の自分には空想を現実にできる技術があるだけ。魔術が人の深層心理を突き詰めるというのなら、魔術による発明という分野では僕は現代の魔術師の数百年分先を行くアドバンテージがある。それ故に天才に見えるというだけの話だ。

学院の図書館の蔵書量は、常人が想像できるものよりもはるかに多い。生前通っていた大学に付属していた図書館でも此処の数分の一の蔵書量もなかったと断言できる。敷地面積からして違うのだ。

まるで迷宮のように奥深くまで広いこの図書館は、地上三階建て、地下は存在しないと言われているが……果たして嘘か真か、学園地下の迷宮と同じぐらい深くまで続く地

下施設があるらしい。
後、実は時空間を弄る魔術で外の見た目よりも空間が拡張されているだとか、一部の本棚の間は異界を接続することによって人が通れるぐらいに広くなってるだとか。
眉唾でしかないのに、不思議と信じてしまえるような神秘を僕ら学生はこの図書館に感じている。

行き詰まった。
この図書館で確たる目的もなく、刺激を求めて文献を探し求めて、それで都合よく刺激が得られるなど……そんな夢物語は無かった。刺激を得る前に圧倒的な蔵書量に押し潰されそうになる。
だから息抜きとして、適当な人の論文でも読もうと思って、それを借りの捜索目的とした。何度でも読み返したい、と思える論文んは、一つだけあった。
いや……あれは論文なのだろうか？　……きっと論文だ。うん。
さぁて論文、論文……この区画、でこの棚の筈、って。
あ。
「……うん？　あっ」
先客がいた。ラブコメの様な接触事故を起こしながら、僕の目線の高さにあるそれを

手を伸ばして先に取った少女がいた。
学院で最も小さいだろうサイズの制服に身を包む、その友人の名前を僕は知っている。
「やっぱり、リンか」
「あ、アダムくん」
目的の本は、何の理由かは知らないが彼女が手に取っていた。あまりに特徴的な表紙だからわかる。あれは、セリカ＝アルフォネア直筆の学院生徒向けの論文だ。学生が読む難易度ではないことを除けば。
なんで学生向けの文章にバンバン専門用語出してんだよ……しかも何の補足説明もないし。何なら専門用語と専門用語組み合わせて専門家でも頭を捻る様な造語つくるし。
「えっと、本気でそれ読むの？　また？」
「う、うん。今日は今まで読んだところを読み返そうかなって思ってたけど……翻訳、お願いしてもいいかな？」
「別にいいけど……え、何処まで読めた？」
「１２６頁までは何とか……」
絶句。

「……それは、頑張ったね」

「えっへへ」

確か前に『翻訳』したのは８０何頁かそこらだったはずだ。単語のメモを取っていたとはいえ、バンバン色んな専門用語使って、しかも分野外のものまで半々の割合で紛れ込ませてくるアレを自力で読み進めたのか……そっかぁ。

彼女のはにかみに少し畏敬を抱いた。

努力家ってレベルじゃねーぞ。もはや勉強中毒なんじゃないだろうか。

いや、ないか。普通に可愛らしいし、中毒なんてないない。

というかリンの種目は『変身』だったはずだが……まぁ、大方息抜きに別分野の勉強をしようとか、そういった理由だろう。何時もの事だ。そこでなぜ、よりにもよってこれを手に取ったのかは分からないが。

それほど多いわけではないが、僕もこの図書館にはわりと来る。論文を漁ったり、娯楽本を読みに来たり。

そして僕は毎回、図書館の何処かしらでリンの姿を見かける。

多分、毎日ここで勉強してるんじゃないだろうか。気のせいならよいが、もう此処に住み着いていると言っていいくらい良く見かけるのだ。

「あ、それでね。この前この本で『第五真説要素』って単語があって、それを再現するの

が術式の肝だ―っていう風なことが書いてあったんだけど……」
「第五真説……ああ、『真エーテル』かな？　いや、それは架空の方だっけか……」
「えっと、アダム君でも分からなかったかな？」
「……まぁ、意地を張らずに言えばね。
『第五真説要素』っていうのは『第五架空要素』に対する反物質……概念的な猛毒みたいな無質量物質を指してるんだ。で、確か『第五架空要素』っていうのが『エーテル』で、『第五真説要素』が『真エーテル』って呼ばれてるはず。
説明しにくい概念だから分かりにくいけど、要するに『魔力』と『魔力に対する猛毒』って感じで覚えると良いよ。実際、それで大体あってる」
僕自身、これらの概念への理解が曖昧だから詳しく説明ができない。
その点を申し訳なく思うも、リンは気にする様子はない。
「そうなんだ。じゃあ、此処の頁で言ってることって……」
「要は『神様殺すために原動力の魔力枯渇させよう！』って理念から初めて、紆余曲折通って『魔力の汚染とか根絶とかはできなかったけど、何とか神様殺せる様な魔術作れました』ってことだよ。
……なんでその結論（虚数エネルギー）に行き付いたかなぁ……いや、確かに理論的にも思想的にも間違ってはいないけどさぁ……」

因みに詳しい術式、呪文の構造が書いてある２４６ページ以降は、虚量石（ホローツ）の持つ虚数質量をエネルギーに変換し、噴出のベクトルを制御してー、って感じの理論や方法が５００頁ぐらい細かい字でずらずら書かれてる。非常に目が痛くなる。

この技術の本質は、既存の鉱石を用いた疑似的な反物質を生成することにある。その為、神殺しの魔術が吹き荒れた後には塵一つ残らないのだ。対消滅とかで起きたエネルギーの打ち消しとか、そこらへんも大層頑張ってる。

巻末には変換効率の試行錯誤の記録とかが付けられてたなぁ……面白かったけど。

「それより、『変身』ってどの術式使うのかは決めたの？」

「うん。先生がアドバイスしてくれた魔術でね――」

「そうか。じゃあ神話とかも呼んでみると良いぞ。知ってるか？　女神の翼って実は――」

防音の魔術を展開し、僅かに居る他の生徒等に声が届かないように細工する。

迷惑だろうと思っての配慮ではなく、事前情報を抜き取られないための警戒だ。手首に着けた調律礼装を通して流れる魔力が形を成し、自分たちが発する音と逆位相の音を球状に広がる定点から発する振動で打ち消（キャンセル）しする。

振動の減衰は痕跡を残しやすいし、何より理論が分かりやすい魔術の方が使っていてストレスが少ない。魔力消費は、まぁ……誤差だ。

そうして日暮れまで話し合い、そろそろ帰宅する頃合いだと席を立つ。
「あ、この本……論文は僕が返してくるよ」
「ほんと？　ありがとう。じゃあ、私はこっち返してくるね」
そう言ってリンが持つのは、話の途中に僕が参考資料として持ってきた宗教や神話の歴史に関する本。
そっちの方が重いぞ、と思って手を伸ばすと、こっちの棚の方が近いから、と取り上げられた。
じゃ、入口で待ってるね。そう言ってリンはさっさと本棚の奥へ消えていった。
……うん。
少しの罪悪感と共に、僕は論文が集まる区画の、最初の目的地だった本棚へ向かう。
そして手にあるそれを隙間に戻し、最後にもう一度見直す。
周りが論文の束で占められる本棚の中、革の背表紙のそれは特に異彩を放っていた。
『セリカちゃんと学ぶ良く分かる神殺しの覚え方っ！』
全体的にとても丸っこく読みにくいそれを必死に無意味な記号と認識し、げんなりしながら後にした。
なんで僕はアイデアに行き詰まったからと言ってこんなのを読もうとしたのか。
というか装丁までされてるのになぜ論文扱い何だろう。内容的にはそうなんだろう

けど。

この後、練習終わりのシャルロットの紅潮した頬に人知れず興奮したり、リンとシャルロットの会話が盛り上がりすぎて寂しくなったのはまたの話しとしよう。